ると言ふことや、この上佛蘭西や伊太利からも澤山の本を取り寄せて、妹にうんと勉強をして貰ふつもりだと言つた。

「本當に恥かしいからね。」と、彼は言つて、

「お前のやうに大きくなつてゐる娘が、歐洲大陸では乳母の手を離れたばかりの幼女すら知つてゐることを、知らないでゐてくれてはねえ。」

「仰せの通りでございますわ、阿兄さま。」と、コロンバは答へて、

「私はいかにも無學だとよく存じてゐます。ですから、一生懸命に勉強をすることより外には何も望んでゐません、特に阿兄さまが先生になつて下さるのでしたら、ねえ。」

コロンバが再びバリチニ家の話を持ち出すまでには數日の間隔があつた。彼女は最も心を用ひて只管兄の慰安に努め、また屢々ネヴィル孃の話を兄にした。オルソは彼女に佛蘭西や伊太利の書籍を讀ませた。そして彼女が正確で且つ立派な把握力があるのに驚いたが一面ごく通俗な平凡なことにも眞底から暗いのにも驚いた。

或日晝食の後にコロンバは暫らく部屋から出てゐた。そして讀書、習字のために部屋へ歸つて來ないで、被衣を着て入つて來た。

彼女は言つた。

「阿兄樣、私と一緒に來ては頂けませんでせうか。」

「何處へ行くんだね。」と、オルソは手を差し出して訊いた。

「あら、お手はいりませんの。その代りに鐵砲と藥莢を持つて來て下さいまし。迚も武裝しないでは歩かれませんのです。」

「いゝよ！　一般の習慣なら、それに從ふとしませう！　ところで行く先きは？」

コロンバは何とも答へないで、被衣を首のまはりに固く結んで番犬を呼んで置いて、兄を伴れて出懸けた。村は大急ぎで通り貫けて葡萄畠の曲りくねつてゐる凹地の道を歩いた。彼女は犬を先發にして、犬が判るらしい合圖を時々した。犬は忽ち電光形の葡萄畠を走り貫けて、いつも女主人よりは二十四五間の前方を走つて、屢々路の途中で身を蹲めて、彼女を振り返つて眺めた。爲てゐることが皆立派な搜索兵よろしくであつた。

「若し犬が吠えたら。」と、コロンバが言つた。

「鐵砲の引金を上げて、凝乎としてゐて下さい。」

村から半哩ばかり隔つて、幾度も廻り道をした後に道が環狀を呈してゐる地點で、コロンバは突然佇ち止つた。そこには木の枝を三尺位の高さに積み重ねたもので出來てゐる小さな三角尖塔があつた。枝の或るものは青々としてゐて、或るものは枯れてゐた。その頂上には木製で黑塗りの十字架の頭が見えた。

コルシカの郡部、殊に山間部には古くから一種の習慣があつた。それは異教徒の迷信の名殘りであ

らうかと思はれるが、或る人が變死した場合、その臨終の地點へは、通行者が石だとか木の枝だとかを投げて置くのである。何年も〳〵その人の悲劇的最後が人の記憶に存する限りは、この奇妙なお供物が增すばかりである。それを「何某の堆積」と呼んでゐる。

コロンバは、この木の枝の堆積の前に立つた。そして、あせびの枝をちぎつて、その堆積の上に投げた。

「オルソ。」と、彼女は言つた。

「阿父樣がお亡くなりになつたのはこゝでございます。御靈のためにお祈り下さい、阿兄さま。」

彼女は膝まづいた。オルソもそれにならつた。と同時に村の敎會の鐘が鳴り渡つた、昨夜誰だか死んだものがあつたらしい。オルソは涙に咽んだ。

數分の後に、コロンバは立ち上つた。涙を拭つて、顏は興奮に燃えてゐた。島の人が何か嚴そかなる誓ひをたてる時に爲るやうに、急いで親指で十字を切つた。それから、兄を急がせて村へ歸つて來た。二人は沈默のまゝに家へ歸つた。オルソは自分の部屋へ入つた。數分の後にコロンバは小さな箱を一つ持つて兄に蹤いて來た。そしてその箱を机の上に置いた。彼女はそれを開いて大きな血痕で汚れた一枚の襦衣を取り出した。

「貴方の阿父樣の襦衣です、オルソー。」そして彼女はオルソの膝の上にそれを投げた。「これはまた阿父樣を斃した彈丸なんですわ。」

と、言つて二個の錆ついた彈丸を襦衣の上に置いた。

「ねえ、お兄さまのオルソ。」と叫んで、兄の腕に飛び込んでしつかりと抱きついて、

「オルソ、仇敵を討つて下さるわねえ！」

彼女は熱狂して兄を抱き緊めて、彈丸と襦衣とに接吻して部屋を去つた。殘された兄は化石したやうになつて椅子を動かなかつた。

暫らくの間オルソは膝の上に置かれた、この怖るべき遺物を取り除く勇氣もなく、全く身動きをしなかつた。しかし、到頭、思ひ切つて辛つとそれを小箱の中へ入れた。それから部屋の別の端にある寢臺の上へ身を投げた。彼は顏を壁の方に向けて、亡靈を見まいとするかの如くに枕の中へ頭を埋めた。妹の最後の言葉は絕え間なしに彼の耳に鳴り響いた。それは避け難き運命を負はせんとして、彼の手から血を要求し、然も淸淨無垢なる血を要求してやまない神託の聲のやうであつた。作者はこの青年の荒みに荒み、人をして狂亂に陷らしめるに足るやうなこの場の感情をこゝに描寫することはやめにします。

長い間オルソはその場に止まつてゐた。頭を向け換へようともしなかつた。

暫らくの後に彼は立ち上つて、箱を閉めて、家から飛び出した。何處と言ふことなく、處定めず、田舍道を足に任せて歩き廻つた。

野の空氣は次第に彼を慰めた。やゝ沈着いて來ると、幾らか冷靜になつて、自分の位置を考察し、

それから逃れ出るべき方法を考へた。

既に作者が言つた如く、オルソはバリチニ家が父の加害者だとは毫も疑つてはゐなかつた。然し無賴漢アゴスティニの手紙を僞造したバリチニ家は責むべきであると思つた。その手紙のために父が死することになつたのだ。

彼はそんな僞造事件を盾にとつて訴訟を起すことは出來ないことだと思つた。そして、時に彼の鄕士の偏見や野蠻な感情が彼の心の中に騷ぎ立つと、何處か野原の人通りのない處を發見して早く復讐をやつてしまへと敎へられるやうで戰慄した。彼はそんな時には彼の聯隊の友人や、巴里の社交界や特にネヴィル孃のことを思ひ出して恐怖の念を持つてその考を拂ひ除けるやうにした。次ぎに妹から起こる非難を考へた。そして彼の心の中に殘るコルシカ魂は妹の非難が當然だと思はせ、我慢しきれなくさへも感じさせた。この鄕士的偏見と彼の良心との苦鬪の中間から唯一つの希望が起きて來た。それは何かの口實の下に、喧嘩をして、辯護士の息子の一人と血鬪を行ふことである。親代代の仇敵をピストルの彈丸の一發か、劒の一突きで殺してしまふことが出來ると考へると、彼の佛蘭西思想とコルシカ思想とが初めて妥協が出來る。この計畫を實行することにして、如何にしてそれを最も巧妙に行ふべきかと考へてゐるともう重荷を下したやうに考へられた。と、また他の變つた愉快な考へが彼の煩悶を鎭めてくれた。

シセロ（羅馬の雄辯家。）は娘のジュリイアを失つて悲しみに沈んだ時に、その娘に就て、言ひ得る限りの美

を心の中に繰り返して稱へてゐると、その悲しみを忘れることが出來た。トリストラム・シャンディもまた同じ方法で息子の死に接した時慰安を得た。

オルソは自分のこの心持を、いかにも不思議なことだと言つて、ネヴィル孃に書き送ることが出來るし、それが屹度あの非凡に美しい孃を喜ばせることが出來るだらうと考へると、心持が更に靜まつてゆくのを感じた！

彼は、初めは餘程遠ざかつてゐた村の方へ、そんなことは氣附かずに近づいて來た。すると一人の少女が藪の傍の小路を歩きながら、歌を唄つて通るのを聞いた。無論彼女は人が近くにゐるとは思つてゐなかつた。

少女は葬式の時に歌はれる歌を、緩やかな單調な節で歌つてゐた。

吾が十字勳章と、鮮血に
まみれし吾が襦衣を
いとも遙けき外國に
居る吾が子のために保存せよ——

「何を歌つてゐるんだい、おい。」とオルソは突然少女の傍に表はれて、怒つたやうな調子で聞いた。

「あら、オルサントンさんだ！」と少女は少しく怖れたやうに叫んで、
「コロンバお孃さんの歌なの。」
「その歌を唄つてはいけない。」と、オルソは恐ろしい聲で言つた。
少女は右や左を見廻して逃げ出す道を探してゐるやうだつた。自分の傍の草原の上に置いてある大きな包みの張番と言ふ、自分の用件がなかつたら一目散に逃げ出したことであつたらう。
オルソは自分の亂暴を恥ぢた。
「何を運んでゐるんだい、ねえ、おい。」と、彼は今度は出來るだけ優しく訊いた。だが、少女は、もぢもぢとして返答をしなかつたので、彼はその包みの上蔽ひの布片を取つてみると、中にパンと他の食料品とが入つてゐた。
「誰にこの御馳走を持つて行くのかね。」
と、訊いた。
「私の叔父様に屆けるのだと御存じでせう。」
「叔父さんは無賴漢だつたね？」
「お味方の者なのですわ。オルサントン若旦那様。」
「警官が君を見附けたら、君に何處へ行くかつて訊きやしないかい？」
「その時は言つてやりますわ。」と、少女は、何等の躊躇もなく、

「私は藪の木伐りに行つてゐる樵夫さんに辨當を持つてゆくんです、と。」
「もしお腹を空かせてゐる獲人に出逢つて、それがたゞで御馳走にならうとでも言つたら？」
「そんなことは爲やしませんですよ。これは私の叔父様のものだと言つてやります。」
「さうだ！　君の叔父さんは容易に辨當を取られるやうな人ではなかつた。叔父さんは君を愛してゐるかい？」
「えゝ、さうです。オルサントン！　私の阿父様が無くなつてからと言ふもの、叔父は私達の全家族を保護してくれました。私の母や私の妹など。阿母さんが病氣に罹る前には、叔父様はよくお金持の人に阿母さんを推薦しては阿母さんを働かせてくれました。村長さんは毎年私に一枚の着物を下さるし、お坊さまは私に教理問答や讀み方を教へてくれました。それと言ふのも叔父さまが私の話をして下さつたからです。だけど、うちのみんなに一等親切なのはコロンバさんですわ。」
その時一匹の犬が路に表はれた。少女は二本の指を口に當てると鋭い口笛を吹いた。犬は早速少女の所へ飛んで來ると彼女の顏を舐めて、それから直ぐに藪の中へ入つた。と、着物は汚ないが、立派な鐵砲を持つて武裝を充分に施した二人の男がオルソの蔭、六七尺の藪から出て來た。彼等は大地を蔽ふ低い草叢の下を通つて、蛇の如く這ひながら出て來た。
「これはようこそ、オルサントン若旦那！」と、二人の内の年長者が言つた。
「どうですか！　私の顏を思ひ出しはなさらんかな？」

「知らない。」と、オルソは繁々と彼の顏を見て言つた。
「どうもをかしい。髯と尖つた帽子の有る無しは人相をかうまで變へるものかなあ！　ねえ、中尉、よく私を見て下さい。貴方はウォタローの老戰友を忘れましたか？　ブランドオ・サヴェリイと言ふ兵隊が貴方の傍で、あの不運な日には隨分澤山の藥莢を潰しましたなあ？」
「おや！　あれが君だつたか？　そして君は千八百十三年に脫走した！」と、オルソは言つた。
「圖星です、中尉、全く軍隊が厭になつちまつたんです。おまけにこゝで片を附けなくちやならないことが出來たんです。チリ、お前は本當に好い娘だ！　食ひ物を吳れろよ、早くさ。どうも腹が空いた。他人には分らんて、森の中に隱れてるつていのは隨分腹が空るもんだなあ。チリ、誰がこの御馳走を吳れたのだ、コロンバ孃さんか、それとも村長か？」
「いゝえ、叔父樣、粉屋の小母さんが私に下さいました。そして、阿母さんには、毛皮を下さつたのです。」
「俺に何用があるんだらう？」
「小母さんは言つてゐました。あそこの日傭ひの人達がピエトラネラの凹地は熱病の流行地だから、日當七十錢と栗の實をいくらとかを吳れろと請求むのですつて。」
「べらんめえ！　俺が話をつけてやる！　中尉、この有り合せで一口いかゞです。御一緒にナポレオン時代には、これよりかまだ不味い飯を食つたぢやありませんか！　ナポレオンも到頭免職になつて

しまつた！」
「有難う！　僕も免職になつた！」
「さうださうですねえ、聞きましたよ。だが、悲觀なさるには及びません。事實、貴方には一寸片を附けられなくちやならねえことがありますからねえ。おゝ、來いよ、坊んさん。」と、彼は一人の友の方へ向いて、
「坐つて飯を食へよ！　オルソさん、坊んさん君を御紹介します。本當に坊んさんだかどうだか知らないのです。學問だけは和尙さんになれる力のある男です。」
「憐れな神學書生ですよ、貴方。」とその無賴漢は言つて、
「自分の天職に從ふことがならねえんです……なあ、ブランドラチオ、これで順當に行けば法王になつてゐたかも知れないんだから！」
「どう言ふ理由で敎會は貴方の光明と學問とを奪つたのです。」
「なあに、詰らないことからです——ブランドラチオが言つてゐるやうに一寸としたことを片附けたからですよ。私の妹がね、私がピサの大學で、古書に埋れてそれへ鼻をつゝこんでゐた時に、ちよいと、ふざけたまねをしでかしたんですよ。私は妹を嫁にやるために歸つて來ました。ところがその花婿どんは、偶然私が歸るより三日前に餘り周章て熱病で頓死してしまつたんでさあ。そこで、その兄弟に懸け合つてみると、そいつはもう嫁を持つてゐたんです！　どうにも取りつく島はねえぢや

ありませんか？」
「成る程、それはまづいことになつてしまつた。それで貴方はどうしました？」
「どうも、かうなれや、鐵砲に物を言はせる外には仕樣がねえぢやありませんか？」
「それはどう言ふ意味かね？」
「一發、その弟の頭に見舞つただけです。」と言つて、坊んさんはケロリとしてゐた。
オルソは身慄ひして一歩退いた。然し天性の好奇心と、恐らくは一刻でも、出來るだけ家へ歸るのを遲らせたいと思ふ考へとが、そこに彼を止まらせて、この二人の男と談話をすることを續けさせた。二人とも、少なくとも一人づつは人殺しをやつたことを覺えてゐる男である。
坊んさんが話してゐる間に、ブランドラチオは彼のために一片のパンと肉片とを切つてやつた。それから自分の分を口へ入れながら、犬にも一片を與へた。彼はその犬をブルスコと言ふ名だと言つてオルソに紹介して、それは兵隊がどんなに變裝してゐてもちやんと見別けると言ふ不思議な本能を持つてゐると說明した。次ぎに彼は一片のパンと生のハムとを姪に與へた。
「この放浪生活は好いですなあ！」と神學書生は二口三口食つてから叫んだ。
「あなたもいまに行つて御覽なさるでせうがねえ、デラ・レビアさん。さうすると、自分の氣儘勝手以外には何者からも指圖を受けないと言ふことが、どんなに樂しいものだかと言ふことがお判りになりますよ！」

この時まで伊太利語で喋舌つてゐた彼は、今度は佛蘭西語で話しはじめた。
「コルシカは、由來世間竝の青年には、面白くもをかしくもないところです。だが、放浪者にとつてはなんと言ふ相違を見せてくれるでせう！　婦人にはもてるし、私は、かうは見えてゐても、三つの別々の村に、三人の情婦があるんです。至るところに家庭ありでさあ。中で、一人は警官の嬶と來てゐる！」
「君は方々の語學が出來ますねえ。」と、オルソは眞面目になつて訊いた。
「このところ佛蘭西語で話してゐるのはねえ、私は古い諺の『子供は最も尊敬せられていゝ』を守つてたんです。ブランドラチオと私は、この娘をどうかして眞直に健やかに育てゝやらうと言ふ計畫でゐますから、ためにならんことはまあ聞かせないことにしてゐます。」
「十五歳になつたら。」と、叔父は言つて、
「この娘は相當なところに嫁にやります。もう心當りの青年がゐるんです。」
「仲人は君がするのかね？」と、オルソは言つた。
「それは私ですとも。もしも私が或る金持に、『私、ブラドオ・サヴェリイは、お宅の御子息と私の姪のミチリナ・サヴェリイと御結婚なさつたら至極良緣と思ひます』と、かう言つてやつて御覽なさい。誰が何と言ふもんですか？」
「私も加勢してやるさ。」と、坊んさんは言つて、

「この男はなか〳〵金持だ！」
「私が卑劣漢で、悪黨で、僞つきなら。」と、ブランドラチオは言つて、
「財布の口を開けさへすれば、銀貨の洪水が流れ込むのでさあ。」
「すると、君の財布には何か細工があつて、それが銀貨を引つ張り寄せるのかね？」
「そんなものは無い！　だが、外の奴等のやうに金持に『金何百圓入用に候』と手紙一本書けば、金持は大急ぎで私に送つてくれるのです。然し、中尉、私は名譽を重ずる人物です。」
「貴方は知つてゐますかね、デラ・レビアさん。」と、坊んさんなる諢名を持つ男は、
「島の者は單純な人ばかりだと思つてゐると、中には吾々がこの旅行券――と言つて彼の鐵砲をたゝいてみせて――によつて獲ち得た吾々の尊敬を惡用して、吾々の筆蹟を僞造して爲替手形を揑造するやうな奴もゐるんです。」
「知つてゐます。」と、オルソは急いで答へて、
「だが、どう言つたやうな爲替手形でした？」
「六ケ月も前のことですがね。」と言つて、
「オレザ（村名）から程遠からぬ處を私が歩いてゐると、一人の農夫が私のところへやつて來て、帽子を脫いで言ひました。『あれつ！　坊んさん樣（人は私をかう言ふのです）、どうかもう暫らく御猶豫下さいませ。やつとまあ五十五法だけ集めたところでがすよ。これでもどうにか、かうにか集め

たんですよ』と、言はれて、私は吃驚しました。『その五十五法たあ何のことだい、この野郎！』
彼が答へるのに、
『つまり六十五法にまけて貰ひていのでがすよ。仰しやるやうな百法は、とても、この私には出來ねえのでがすよ。』
「何だと、この間抜けめ！　お前から百法吳れろと言つたつて！　俺はお前なんか知りもしねい！
「するとね、奴は私に一本の手紙を渡しました。すこし汚れて皺くちやになつた紙片なんです。讀んでみると百法を指定の場所に置いて置け、さうしないと貴樣の家を燒き家畜を殺すぞ――ヂォカント・カストリコニ――（私の本名です）――とちやんと署名がしてある。恥知らずめが、私の署名を僞造してやがつた！　まだむかつ腹の立つたことはその手紙は方言で書いてあつて、うそ字だらけなんです。なんだか、私と言ふ人間がうそ字を書く男ででもあるやうに――私は大學にゐた時にはありとあらゆる賞與を貰つてゐた！　……
「……そこで、私はその百性の頭にボカンと鐵拳をくらはせてやつたら、奴め二回ほどきり〳〵舞ひをしやがつた。その後でうんと蹴つ飛してやつた――何處を蹴つたかお判りですな――それから、私は言つた。『こら、貴樣はこの俺をたゞの物盗りと見違へやがつたな？　どうだ、さうだらう？』すると、すこし氣分が沈着いて來たから、『その手紙の中の金は何日までに持つて行くつもりだ？』すると、彼は、

『今晩ですよ、日限は。』
『よし、持つて行け。』と、私は言つてやつた。
「はつきり指定してあつた場所と言ふのは、松の木の麓でした。そこへ埋めて、奴は私の傍へ歸つて來ました。私はその傍に奴と一緒にかくれてゐましたよ。六時間もですよ。ねえ、中尉、止むを得んとありや私は三日でも待つ覺悟でした。六時間の最後の頃になると、一人の野郎がのこ〳〵やつて來ました。金貸しのバスティオです。奴め、お金を掘らうとして體軀を屈めやがつたから、私は引金を曳きました。その時の狙ひは實にうまく行つたのなんのつて、奴が掘り出したお金と、奴がつゝのめつた拍子の奴の頭とが鉢合せをしたと言ふ案梅で、ね。そこで、私は言つてやつた。
「貴樣の金は持つて去せろ、馬鹿野郎！　これからは氣を注けて、このジョカント・カストリコニ先生は斷じて卑劣な行爲は遊ばされねえんだと、固く覺えて置け。
「奴、可哀さうに身慄ひしながら、その六十五法を血も拭かないで搔き集めてやがつた。奴は私に感謝してゐましたよ。私はお別れの挨拶に、また一發蹴つ飛ばしてやつたところ、や、逃げたわ逃げたわ、今でもまだ逃げ續けてゐるです！」
「あゝ！　坊んさん。」と、ブランドラチオは言葉を入れて、
「うらやましいな、お前のそのねらひがサ！　嘸ぞ腹の皮をよつて笑へたらう。」
「うん、奴の前額の眞つ向うから、金的と來た。」と、坊んさんは言つて、

「一寸ヴージル（古羅馬の詩人）の詩を思ひだしたぜ。」

「……熔けたる鉛は熱して飛ぶ——額と腦とをつきぬけると、どつと青年は倒れて、廣野を蹴る。」

「熔ける！　オルソさん、空を飛ぶ彈丸はその速力のために熔けますかねえ？　貴方は彈道學を學ばれたんだから、この詩の文句は嘘か眞實か敎へて下さい。」
オルソはかう言つた科學に關する問題をこの學士と論議する方が、彼の行爲に對する道德論を是非するよりは面白かつた。ブランドラチオはこんな議論には一向面白みがなかつたので、もう陽が沈むからと言つて言葉を挿んで、
「オルサントンさん、貴方は私等と一緒に食事をなさるのでもねえんだから、もうこの上コロンバさんを待たされねえがいゝですよ。それから、日が暮れてからのぶら〳〵歩きはあぶないです。貴方は何故鐵砲を持たないで出て來なすつたんです。近所には惡い奴がゐるのですよ。お氣を注けなさらなくてはいけませんなあ。今日のところは心配はありません。バリチニ村長の一家は知事を自宅へ招いてゐます。途中まで出迎へをしてゐます、知事はコルテ（地名）へ向ふ前の一日をこのピエトラネラへ宿泊するんです。コルテでは礎石を据ゑるのださうです。彼等は何か彼か彼が馬鹿げたことを言つ

てるか爲てるかでさあ。知事が今夜泊るとなると、今夜は奴等は急がしいが、明日からはまた暇になるでせう。ヴィンセンテロと言ふ惡い奴がゐるし、兄のオルランデェチヨと言つて、負けず劣らずの代物がゐる。一人づつ伴れ出しなさいよ。今日一人、翌日また一人とね。だが、私の申し上げて置かなきやならんことゝ言へば、どうか吳々もお氣を注けなさいと言ふことだけです。」

「忠告ありがたう。」と、オルソは答へて、

「だが僕は何も喧嘩をすることはないな、先方から僕に會ひに來るまでは、僕の方ではあの人達に何も言ふことは無い。」

無賴漢は皮肉に舌で頰を突いて笑つてゐたが何とも答へなかつた。オルソが起ち上つて行きかゝると、ブランドラチオが言つた。

「さうでした、私は火藥のお禮を申しませんでしたがね、あれはほんとに要つてかなはん時に頂戴が出來たのです。今は私の必要品は皆持つてゐます。靴だけが足りないが、近い内に羊の皮で私が作りませう。」

オルソは五法銀貨を二つ彼の手に握らせて、

「コロンバが君に火藥を上げたんだよ。これは僕の心持だから、靴を買つて吳れ給へ。」

「馬鹿なことを、中尉殿。」と、叫んで、金を返しながら、

「僕を乞食と思つてゐるんですか？　パンと火藥は頂戴するが、外には何もいりません。」

「まあお互ひに同じ軍隊にゐた仲だから、お互ひに助け合つてもいゝと思ふよ。やあ、さよなら！」しかしオルソは出懸ける時にそつと相手の囊の中へお金を入れて置いた。

「さよなら、オルサントン。」と、神學者は言つて、

「また近い内に藪の中で逢つて、ヴージルの詩を研究したいですなあ！」

かう言ふ偉い連中と別れて十五分も經つと、オルソは誰だか走つて彼の後を追つて來る者があるのを聞いた。それはブランドラチオだつた。

「これはどうもいけねい。」と、彼は叫んで、

「さあ貴方の十法は取つて下さい。外の者がこんな冗談をしたのなら、私は我慢がならんのだがなあ。コロンバ孃さんによろしく。お蔭ですつかり息が切れた。お休みなさい。」

十二

コロンバはオルソが長い時間家を空けてゐたので少し驚いた。しかし、兄を見た時には、その顏は平常の通りに哀しい靜けさを回復してゐた。食事の間には二人とも普通のことを話した。そして、オルソは妹が沈着いてゐるのに元氣づいて、無賴漢と逢つたことや、小さなチリナが、叔父や、頭の好い同僚のカストリコニ氏から道德や宗教の教育を受けてゐることを冗談を交ぜて話した。

「ブランドラチオは正直者ですわ。」と、コロンバは言つた。

「だが、カストリコニは無定見ですつて。」
「私は二人とも似たり寄つたりのものだと思つてゐる。」と、オルソは言つて、
「二人とも社會と戰さをしてゐる。彼等の最初の罪が毎日彼等を次ぎの新らしい罪へと導いてゐる。だけれど、二人とも、森の深いところに住まない人間どもと較べたら、大した惡黨ではない。」
喜びの輝きがコロンバの顏をかすめた。
「全くだ。」と、オルソは話をつゞけて、
「あの氣の毒な人達は島固有の風習から言つたなら尊敬せられていゝ人達だ。悲慘な運命が彼等が今辿つてゐる人生へと曳いて行つてゐるのであつて、何も慾得からではない。」
二人は暫らく默つてゐた。すると、コロンバは珈琲を注ぎながら言つた。
「阿兄樣はシャール・バスティステ・ピエトリがマラリア熱で昨夜亡くなつたことをお聞きになりましたか？」
「ピエトリつて誰だい？」
「この村の人ですわ。マデレエヌの御亭主です。うちの阿父樣がお亡くなりになる時に手帳を托されたのはそのマデレエヌです。寡婦になつたばかりのそのマデレエヌが、先刻こゝへ來てねえ、私にお通夜に來て、何か歌を唄つてくれつて頼みました。阿兄樣も御一緒においでになつたら、誠に至當だと思ひますわ、あの人達は隣人ですもの。それにこんな小いさな村では缺かすことの出來ない勤めで

すわ。」
「おや、お通夜とは又どうしたことだ！　コロンバ。私は妹を多勢の前で晒物にはしたくない！」
「オルソ。」と、コロンバは言葉を返して、
「誰にしたつて亡き人へはそれ〴〵の方法で敬意を捧げます。お葬式の時の挽歌は私共の祖先から傳はつて來てゐるものですから、これだけは古來の習慣として尊ばなければなりません。マデレエヌには唄ふだけの天分がないのです。それにフィオルディス、ピナと言ふこの地方で一等上手なお婆さんは病氣で寢てゐます。ですから、誰かゞ歌はなけりやなりませんのです。」
「シャアル・バスティステは自分の死骸の上で、下手な挽歌を唄つてもらはなけりや天國へ行かれないと、お前は本氣で思つてゐるのかい。お通夜には行きたけりや行つてもいゝよ、コロンバ、また私も行かにやならんものならお伴をしようよ。だが唄ふのだけはやめてくれ、お前の年頃で挽歌を歌ふのは色消しだ。お願ひだから、歌はやめてくれ。」
「おゝ！　お兄さま。私はもう承諾してやつたのです。御承知の通りに、それはこの島の習慣です。それから、も一度言はせて下さいまし、この際私より外には歌へる者はゐないのです。」
「馬鹿らしい習慣だよ！」
「私はね、歌ふ時には隨分苦しいのです。私の不幸が思ひ出されてなりません。翌る日は病氣になるのです。だけど、それはしなければなりませんのです。ですから、お許し下さい、ねえ阿兄樣。私共

がアヂャッチオに居た時に、お兄さまは、私共の傳來の習慣を輕蔑してゐる英吉利の娘の慰み物にするために、私に歌へ〳〵と仰しやつたぢやありませんか。ですから、感謝してゐる氣の毒な人のために今日歌つてならないことはないでせう？　その人達は、私の歌で悲哀の情がどんなに慰められるでせう？」

「よろしい、いゝやうにするさ。私は、お前はもう挽歌を作つてしまつてゐて、それを反古にしたくないんだと思つてゐるが、ねえ！」

「そんなことはありません、阿兄樣。私は、いざと言ふ時が來るまでは詩を作ることは出來ません。私は亡き骸の前に立ち、遺族の人のことを考へるのです。私の眼に涙が一ぱいになつて來ます。そこで私は私の魂に浮ぶことを歌ひます。」

かう言ふ話の調子は非常に單純な感情から話されてゐるので、コロンバの心の內部に宿る詩人の自惚れなどは微塵もそこには想像されなかつた。オルソは讓步して妹の希望の通りにピエトリの家へ彼女と一緒に行つた。

死人は顏を露出して、その家の一番大きな部屋のテーブルの上に寢かされてゐた。戸も窓も開け放つて、五六本の明るい蠟燭をテーブルの上に立てゝあつた。死人の頭の方には寡婦が立つてゐて、その背後には數人の婦人がゐる。婦人連の向ひ側には、帽子なしの男子連が立ちならんで、一樣に死人に眼を向けて默つてゐた。そこへ入つて來た者は一人々々死人の顏に接吻をして、寡婦や息子に挨拶

をして一言も言はないで圓形となつてゐる各々の席に着いた。

ではあつたけれど、屢々この憂鬱なる沈默を破つて亡き人に二言三言話しかける者もあつた。

「なぜお前さんはこの親切なお內儀さんを殘したのだ？　お內儀さんはお前を大切にしなかつたとでも言はつしやるか？　お前は何が不足だつたのだい？　何故お前さんはもう一ケ月辛抱して生き延びなさらなかつたんだ、さうするとお前のとこの嫁さんは孫を生んだのに。」

年若なピエトリの兄息子は父親の冷たい手を取り上げて叫んだ。

「おゝ！　何故阿父樣は疊の上で往生したんだ？　でなけりや、息子等は復讐が出來たんぢや！」

オルソがこの部屋へ入つて初めて聞いた言葉はこれであつた。

一同は彼を見ると圓形の席を廣くして迎へた。靜かな囁きが一同の感動を表はした。それはその夜の葬式の挽歌を歌ふ女のコロンバが來たからである。

コロンバは先づ寡婦と相抱いた。それから、彼女の一方の手と自分の手とを組み合せて、目を伏せて沈默に耽つて暫らく考へ込んでゐた。やがて、被衣を後方に拂ひ除けて、きつと死人を見て、その上に凭れかゝつて、死の如く蒼ざめた顏をして次のやうに歌ひはじめた。

おゝ！　シャアル・バプティストよ！　主、基督樣がお前の御魂を受け給ふやうに！

生くるは苦しみぞかし。お前の行つた處には大陽も無い、寒さも無い。もうお前は鎌もいらない、重たい鶴嘴もいらない。

あの世ではお前にもう勞働はない——これからの日日毎日はお前のための日曜日。

シャアル・バプティストよ、基督樣がお前の御魂を受け給ふやうに！

お前の息子は今こそお前の家の長となる——

嘗て、私は西南の烈風に吹き枯らされて大地に倒れた樫の樹を見た。

私はその樹は枯死したと思つてゐた。

二度目にその傍を通る時、見れば、新芽は大きな木蔭を持つ樫の大木に育ち延びた。

おゝ！　アデレー（寡婦、マドレーヌのこと。）よ！　その大木の蔭にて休めよ！　また、今は無き元の樫を忍べかし！

こゝで、マデレエーヌは聲を揚げて歔欷きをはじめた。二三人の男も、その連中は普通の場合には基督教徒を射ち殺すのに鵠鵠を射ち落す位にしか思つてゐないのに、陽燒けした頰から涙を拭つた。

コロンバは暫らく挽歌を續けた。或時は故人に、また或時はその遺族に話しかけた。また、かうした挽歌には屢々行はれる形式を履んで、死人に擬してその聲色を使ひ、生前の朋友知己達に慰めの言

葉や助言を交へて歌つた。

彼女が歌ひ續けてゐる間に顏は感激と共に輝いた。頰に潮す薔薇色は齒の白さと火の如く輝く彼女の眼とを浮彫の如くに表した。言はゞ三脚椅子に座す昔の巫女のやうであつた。溜め息と半ば息を塞まらせた欷り涕きの聲の外には、微かな聲すらも、彼女の周圍に群がる人々から起らなかつた。オルソはそこの連中共もにこの荒つぽい詩に感激したわけではなかつた。けれど、彼も亦直ぐに仲間に入つてしまつた。彼は部屋の暗い隅に、一人離れて立ちながらピエトリの息子と同じく涕いてゐた。

忽ちそこの人々の中から微かなざわめきが起つた。人の輪の中に入口が開けられて數人の見知らぬ客が入つて來た。人々が示す尊敬と、その人々のために席を讓らうと心使ひをしてゐることから見てこれは地位のある人々で、その人達の訪問を受けるのはこの家の名譽だと考へられた。でも、人々は挽歌を妨げてはならないので、誰もお客に話しかけなかつた。先頭になつて家へ入つたのは年齡四十歲位の紳士で、黑の上衣、ボタン穴の勳章の赤い略償、その容貌、親しげであり抑壓的であることが直ぐに知事だと判つた。彼の脊後には身を屈めて、靑い顏をした一人の老人がゐた。神經質なこそこそと人目を避けてゐるやうな顏が、靑い色眼鏡の蔭から覗いてゐた。彼は體軀に大き過ぎるだぶ〳〵の黑の服を着てゐた。その服は今でも新らしく見えるけれど、もう數年前に作つたものらしかつた。彼は知事に身を寄せて、彼の威嚴の蔭にかくれてゐるやうであつた。その背後から脊の高い二人の靑年が來た。皮膚は陽燒けがして、顏はいかめしい頰髯にかくれ、傲然として脾睨しながら、目の前の

見んとするものに對して、抑へ難き好奇心を表はしてゐた。

オルソは村人の顏を殆んど忘れてゐた。しかし、青い色眼鏡を附けた老人を見ると直ちに昔の記憶を呼び起した。知事の傍を離れないでゐるのを見てもそれは直ぐに判つて來た。

それはピエトラネラ村長のバリチニ辯護士であつた。彼は二人の息子を引き具して、知事に挽歌を聞かせるために案内に立つたのであつた。

その瞬間、オルソの心に浮んだ思想をこゝに述べるのはむづかしい。然し、父の敵を目のあたり見るに及んでは、一種の恐怖を感じながら、自分は長い間苦鬪を續けたのだ、自分はその疑ひの犧牲になつてゐたのだと、日頃に增してはつきりと感ずることが出來た。

コロンバの動き易い顏の色は、日頃から憎み切つてゐる相手の男の顏を一見して、忽ち憂鬱にまた呪ひに滿ちたものとなつた。顏はさつと蒼ざめた。聲が嗄れて、歌の文句は脣の上で消えてしまつた。然し、間もなく新たな勢で歌ひ續けた。

主の逝きし巢の上に、
鷹が來て悲嘆にくる。

椋鳥そのあたりを飛びまはり、

鷹の悲嘆を嘲ざ笑ふ！

こゝで半ば抑へられた笑ひ聲がした。それは村長の息子の二人の青年が漏らしたところであつた。二人は疑ひもなくこの歌の比喩は隨分思ひ切つて露骨なものだと思つた。

鷹は再び力づきて起つ、
翼を廣け——嘴を血にて洗ふ。

さあれ、シャアル・バプティステよ、お前の友は集ひたり、彼等はお前に最後の訣別を告げ、心ゆくまで涙にかきくれてゐる。

たゞ一人泣かない哀れな孤娘あり、彼女は何故お前のために泣かうぞ？　お前は年齡に不足なくこの世の呼吸をひきとつた——家族にとりまかれ——いと高き御前に行くべき支度も整ひたり。

その孤娘は父のために嘆く、父は卑怯な刺客の手にかゝり、背後より討たれたり——その血は紅に、綠葉の堆積の下にあり。

さても孤娘は父の血を集めたり――尊くも汚れなき血――
その血はピエトラネラの空に撒かれたり、毒素となれかしとばかりに、

かくてピエトラネラは汚されたらん、罪深き血もて、無垢の血の跡を盡く搔き消す果ての後の時まで――

歌ひ終るとコロンバは椅子に沈んで、被衣で顏を蔽つた。歔欷きの聲が聞えた。婦人達は涕きながら彼女の圍りに集まつた。數人の男子はきつと村長やその息子を睨めつけた。年寄り達は彼等が來たので一座が白けたとブツブツ言つた。この家の息子が人中を搔きわけて、村長に出來るだけ早く出て行つて呉れと言ひかけると、村長はさう言はない間に息子達を先きにして戸口へ行つた。知事は悔みの言葉を息子に二言三言言ひ置くと、直ぐに村長の後を追つた。オルソは妹の腕をかゝへて、部屋から出て行つた。

「一緒に行つてやつて呉れ。」と、若いピエトリは二三の友に言つて、

「怪我があつてはならないから、氣を注けてくれ。」

二三人の青年は急いで短刀を左の袖に入れて、オルソとコロンバを家まで護衛して來た。

十三

コロンバは息を切らせ、疲れ果てゝ一言も口が利けない狀態になつてゐた。頭を兄の肩の上に横にして、兄の手を緊く抱いてゐた。彼女の挽歌の最後の章の意味で、兄はいさゝか不愉快な思ひがしてゐたのではつたが、この際餘りに自分も驚いてゐたので、彼女を咎めようなどとは思はなかつた。何も言はないで、彼は妹が痛ましくも、さいなまれてゐる神經興奮の鎭まるのを待つてゐた。すると女中のサヴェリアが非常に吃驚した顏をして入つて來た。

「知事さんがお目にかゝりたいと仰しやいます！」

その案内を聞くとともに、コロンバは起き上つて、自分の弱氣を恥ぢてゐるやうに眞直に立ち上つて、椅子に凭れたが、椅子は彼女の體軀の下で微かにふるへてゐた。

知事はこんな時間外れに訪問したことに對して二言三言、形式ばかりの辨解の辭を述べた。またコロンバ令孃へ同情の挨拶を述べ、歌の天才は列席者の心を轉動させることもあるからと言つて、挽歌に夢中になる島の風習に批難を加へた。猶ほまた、知事自身が聞いた歌詞の寓意（コロンバが復讐を誓つた。）にも叱責の意をほのめかした。それから、話頭を換へて、

「デラ・レビアさん、私は貴方の親友の英吉利の紳士から貴方によろしく申上げて下さいと傳言を託せられました。また、ネヴィル孃から御令妹へよろしくと仰しやつてね、貴方への令孃からのお手紙

もお預かり申してゐます。」
「ネヴィル嬢からお手紙！」と、オルソが叫んだ。
「いま、都合の悪いことには私はそれを持つて來ませんでした。だけど、五分間もすればお渡しいたします。令嬢の阿父様は御病氣にお罹りで、一時はあの怖しい熱病ではないかと心配もしましたが、今は後推察の通りに危險期を去られました。やがて、こちらへ見えるからお逢ひになることが出來ますでせう。」
「ネヴィル嬢は定めし御心配になつたことでせう。」
「いゝ案梅に病症が危險だと令嬢がお判りになつた時には、その危險期が過ぎてゐました。デラ・レビアさん、ネヴィル嬢は貴方の妹さんや貴方のことに就ては、隨分心配をして私にお話になりましたよ。」
オルソはお辭儀をした。
「令嬢は貴方がた御兄妹に非常な親しみを感じて居られます。あのお方は奥床しい態度と明るい氣輕さの下に、充分なる理性の働きを蔽つていらつしやいますのです。」
「あのお方は愛らしい美しいお方です。」と、オルソが言つた。
「私がこちらへ參上したのは、令嬢個人としてのお頼みを大部分承つて參りましたのです。貴方がたには寧ろ思ひ出していたゞきたくない例の憂鬱な話の仔細を、私位よく知つてゐる者は居ませんの

です。バリチニ氏は今ではピエトラネラの村長でありますし、私はこの州の知事でありますから、私がくはしく知ることが出來るやうに提供してもらつた或る嫌疑の上に、私が描いた價値はどんなに重大であつたかは私からお話する必要はないと存じます。その嫌疑は貴方の前にも無分別なる人々から提出せられたが、貴方は貴方の位置と立派な品性から、却つて、御立腹になつて一蹴せられたと承つてゐます。」
「コロンバ。」と、オルソは椅子についたまゝ、不安げに體軀を動かしながら、
「お前は大層お疲れのやうだ、お休み。」
コロンバは頸を振つた。彼女は平常の冷靜を回復して一心に知事を見てゐた。
知事は話をつゞけて、
「バリチニ氏は大いに斯ういふ惡感情は、一掃してしまひたいと言ふ御希望です——私が思ひまするに、お互に不安定な狀態の關係をと言ふ意味です——で、もしも貴方が、お宅とバリチニ家と言ふやうな、名家相互の間に存在すべき基礎の上に、雙方の關係を置くことにして下さつたら、私だつて非常に滿足するところでございます。」
「閣下。」と、オルソはいさゝか興奮して、話を遮つて、
「私はバリチニ辯護士が私の父を暗殺したと言つて咎め立てをしたことはございません。しかし彼と妥協をするのを常に妨げるやうなことを彼はしてゐます。彼は脅迫の意を含んだ手紙を僞造してゐま

す。それは何某と言ふ無頼漢が署名したと言ふ見せかけにしてゐます。そして、彼は兎も角も暗々に父が書かせた體裁にしてゐました。短かくお話をしますと、その僞造の手紙が間接に父の死の原因となりましたのです。」

知事はそれに答へる前に暫らく考へこんでゐた。

「阿父様がバリチニ氏に對して係訟中だつたので、阿父様が自然に興奮して、さうお信じになつてゐたのだつたら至極御尤もと存じますがねえ、貴方までが眞實の事實に面を覆うていらつしやると言ふことはいけませんですな。一寸お考へ下さつたらお判りでございませうけれど、バリチニ氏があんな手紙を僞造したのでは、氏自身の利益に反することだと貴方はお判りでせう。私は氏の性格をここでお話しするのではございません。貴方はそのことでは何も御存じがありませんし、兎角氏に對しては偏見をお持ちとお察ししますが、一面確かに、法律に明るい人のすることは御想像なさることは出來ませんのです。」

「では、閣下。」と、オルソは椅子から立ち上つて、

「その手紙がバリチニ氏の手細工でないと仰せになるのは、とりも直さず手紙の僞造は父の責任だと仰しやるのですか？　父の名譽は、閣下、私の名譽です。」

「それは誰にしたつて。」と、知事は言つて、

「デラ・レビア大佐の御名譽に關しては私より高い意見を持つてゐる人はゐません、ですけど……

今ではあの手紙を書いた眞犯人が私共には明らかになつて來てゐるのですから。」

「誰です？」と、今度はコロンバが叫んで、知事に詰め寄つて來た。

「いろ〳〵の前科のある、實に、ひどい奴でしてね、貴方がたコルシカ人はお許しにならない泥坊ですよ、トマソ・ビアンチと言ふバスチアの獄にゐる奴が、その呪ふべき手紙を書いたと告白いたしました。」

「私はその男を存じてゐませんが、彼がそれを書いた目的は何でありましたのです？」

するとコロンバは言つた。

「あの男でしたらこの村の出身でございます。以前私の家にゐた水車小屋の粉磨きの弟でございます。性質の惡い男でして、おまけに謔つきで、彼が言つたことには眞を置くに足るものは何一つだつてございませんわ。」

「お判りになるやうにお話しませう。」と、知事は話を續けた。

「何故、彼がこの事件に差し出たかと申しますと、いまコロンバ孃が仰しやつた、粉磨きの兄の方の——テオドールと言ふ名だつたと思ひますが——その兄は、故大佐から小川に架つてゐる水車小屋を借用してゐました。その小川の水利權が、つまり、バリチニ家と御當家の訴訟事件の問題となりました。大佐は御承知の寛大なお扱ひから、その水車小屋から貸し附け料は殆んどお取りになりませんでした。扨て、弟のトマソが考へるのに、もし、バリチニ氏が水利權を取ることになると、兄は相

當な使用料を納めなければならなくなる、人も知つてゐるとほりに、バリチニ氏は、金錢と言ふ點では非常に吝嗇だからです。つまり、手短かにお話すると、兄に同情を寄せて、僞手紙を書きました。それがこの事件全體なんです。御存じの如く、コルシカでは家族の關係が非常に密になつてゐます。また非常に强固だから、往々家族の個人を同一の犯罪に捲き込みます。どうか、この書面を御覽下さい、これが檢事から私へ來た書面であります。私のお話はこの手紙を御覽下すつたら一層確實になります。」

オルソは手紙に眼を通した。それにはトマソの告白のこまかなことが充分書き竝べてあつた。コロンバは兄の肩越しにそれを讀み返した。

讀み終ると彼女は叫んだ。

「オルランデュヨチ・バリチニは先月バスチアへ行つた時、自宅の兄さんが歸ると言ふことを聞きました。だから、トマソに會つて彼を賣收してこんな謊を言はせたのです！」

「お孃さん」と、知事は我慢がしきれなくなつて言つた。

「貴方は何も彼も呪ふべき暗示をこしらへてそれにくつゝけて說明をせられます。それで眞相がつかめるでせうか、デラ・レビアさん、貴方は冷靜でいらつしやる、さあ、それをどうお考へになりますか、貴方も御令妹と同じく、輕微な刑罰を受ければ濟む筈の男が、知りもしない人から賴まれて、その顏を立てるために、私文書僞造と言ふやうな罪を引き受けて平氣でそれを白狀するやうなことがあ

るとお考へになりますか？」

オルソは檢事の手紙を讀み返して非常に注意して一字々々に就て考へた。何故なら、まだ逢はない數日以前よりは、バリチニ氏に一度會つてから後と言ふもの、何だかこの事件にはバリチニ氏が潔白だとは信じ難く感ずるやうになつたからであつた。だが遂に彼はこの辯明書は彼には滿足すべきものと認めざるを得ないと感ずるやうになつた。

するとコロンバは興奮して叫んだ。

「トマソ・ビアンチは詐欺です。あの男は無罪になれるのです。さうでなければ脫獄を默許してもらへるのです。必つとさうです。」

知事はにが〳〵しげに肩をすくめてオルソに向ひ、

「私は、私が受取つた沙汰を貴方にお知らせしましたから、これで失禮して、貴方がとくとお考へになることをお願ひして置きせう。貴方の善き御判斷で、それを確認なさるまでお待ちいたしませう、唯一つ希望して置きたいことは、その書面が、御令妹の臆測よりは、貴方にはもつと有力なる效果が擧がればいゝと言ふことです。」

オルソは二言三言コロンバの振舞の辯解をした後、今となつては、トマソしかこの事件の犯人はないと信じますと繰返して言つた。

知事は歸らうとして立ち上つた。立ち上りながら彼は言つた。

「こんなに遅くないのなら私と一緒にいらして頂くとネヴィル嬢の手紙をお渡ししますと申上げられるのですがねえ、それから、その時に、貴方はバリチニさんに今私に貴方が仰しやつたことを、も一度繰り返して仰しやつて頂くと、さうすると、この事件全體は一段落つくのですがなあ。」

「オルソ・デラ・レビアはバリチニ家へは斷じて行くことはなりません。」と、コロンバは烈しい聲で叫んだ。

「どうもコロンバ嬢さんは。」と知事は冷やかして言つた。

「羊の群の先導に立つてゐる鈴附羊（家庭爭議の音頭取の役を演ずる婦人の意）のやうですなあ。」

「閣下。」と、コロンバは嚴然と答へた。

「あの連中は貴方をだましてゐます。辯護士のバリチニが、めつたに見られない、目から鼻へぬけるやうな惡者だとは貴方は御存じないのです。お願ひですからオルソには何事もこの際行はせないで下さい。それは今後兄を辱しめることになるのですから。」

「コロンバ、お前さんはあんまり熱中して狂人になりつゝある！」と、オルソは叫んだ。

「オルソ！　オルソ！　兄様の手の中へ、私が先刻お渡ししした、あの襦衣が入つてゐた箱に誓つて、お願ひしますから、どうか私の言ふことを聞いて頂戴。阿兄様とバリチニ家との中間にあるものはただ流血です！　決してあんな家へ行つてはなりません。」

「ねえ、コロンバ！」

「いゝえ、阿兄様は行つてはなりません！　是非いらつしやりたければ私はこの家を出て行きます。そして二度とお會ひ致しません。オルソ、私を可哀想と思つて下さい！」かう言ひながら彼女は跪いてしまつた。

「コロンバお嬢さんが理性を失つていらつしやるのはどうも困りましたなあ。」と知事は言つて、

「だがきつとお嬢様がお思ひ違ひをしていらつしやることを、兄さんから說き伏せられますよ。」

知事は戸を半開きにしてそこで立ち止つてゐた。オルソが彼の後を追つて來るのを待つてゐると言ふ風であつた。

オルソは言つた。

「妹をこのまゝにしては置けません。ですけれど……明日、もし……」

「明日は早く立ちます。」と、知事は答へた。

「ねえ阿兄様。」と、コロンバは叫んだ、

「少くとも明日の朝までお待ち下さい。阿父様の書類を、も一度、私、調べてみます。貴方はそのことまで私を止めて下さつてはなりません。」

「いゝよ、今晩調べたらいゝ。だが、その代りこの上あの人々に對するお前さんの根據のない憎惡から私を苦しめてはいけない。閣下、誠に申譯ないですが、御免を蒙つて明日までお待ちを願つた方がいいと思ひます、私も少し周章てゝゐますので。」

「一晩寢るといゝ考へが浮ぶものです。」と、知事は家を出ながら答へて、
「明朝までには貴方の御疑念が消滅するといゝですがなあ。」
「サヴェリアや。」と、コロンバは女中を呼んで、
「お前提灯を持つて、知事様のお伴をしてお呉れ、それから、阿兄様への手紙をいたゞいて來るのですよ。」
この吩咐に附け加へて、二言三言コロンバは女中に囁いたが、それは誰にも聞えなかつた。
知事が去るとオルソは言つた。
「コロンバ、隨分私を苦しめたねえ。私達の前に置かれたこの證據をお前は信じないのかい？」
「阿兄様明日までの餘裕を私に下すつたんです、私はぐづ〳〵してはいられません。ですけれど、ねえ、望みはあるのよ……」
斯う言つたまゝコロンバは一房の鍵を手にして階段を駈け上つて二階の部屋へ入つた。そこで大急ぎで抽筐を開けたり、机を探したりしてゐる音が聞えて來た。それはデラ・レビア大佐が重要書類を納め、几帳面に鍵を施して置いたところのものであつた。

十四

サヴェリアが餘り長い時間かゝつたので、オルソは我慢がしきれなくなつた。待ち疲れてゐると、

その途端に、彼女は手に一本の手紙を持つて、少女のチリナを背後から連れて歸つて來た。チリナは寢端を起されたので眼をこすつてゐた。
「今時分何をそこでしてるんだい？　ねえ、おい。」と、オルソは言つた。
「コロンバお孃さんが私に御用ですつて。」と、彼女は答へた。
「何だつてまあこの娘に用があるんだらう？」と、オルソは思つた。然し彼は大急ぎでリディアの手紙を開いた。そしてそれを讀んでゐる間にチリナは二階へ上つて行つた。

リディアの手紙

父はまだ全快致しません。それに筆無精ですから私は父の祕書をしなければなりません。御存じと思ひますが、先日、海岸で私達と景色を眺めようとはしないで、父は足を水に入れました。この美しい島で熱病に罹る妙藥としてはこれに勝るものはありませんのねえ！　斯う書くと何だか貴方が顏をしかめて、貴方の短劍へ手を掛けていらつしやるのが目に見えるやうですわ。尤もその武器は私が頂戴したから、お手許にお持ちにならないこととは思つてゐるの！　扨て父は少々熱が高かつたので、私非常に心配いたしました。知事さんは今も氣持ちのいゝ方と存じてゐますが、同じやうに御親切なお醫者様をお世話下

さいましたので、その方が二日ばかり經つと私達の心配を取り除いて下さいました。再發の心配がなくなりましたから、父はまた〳〵狩獵に出懸けたいと申しますが、私はこゝしばらく待つて下さるやうに願つてをります。

お山の御住居は如何？　北側の塔は今も昔のまゝですか？　亡靈も出るのですか？

こんなことをお尋ねするのは、貴方が父に、鹿、野猪、野羊を射たせてやるとお約束になつたのを父が忘れてゐないからです。その變つた獸物の名を間違へてはゐませんか？

バスチアへ出て、そこから船に乘るまでの途中で貴方のお宅をお訪ねしてお世話に預かりたいと思つてゐます。で、貴方がお話しになつた、古びて壞れてゐると言ふデラ・レビア城が、私共の頭の上へ落ちかゝらねばいゝと思ひます。知事さんは非常に快活な人ですから、隨分私共と話の種がつきませんでした。私は上手に知事の心を向け換へて、貴方がた傳來の特性のことを話しました。バスチアの官憲は知事に、目下入獄中の或る一人の惡者の自白書を送つたのです。それは貴方の最後の疑念を一掃するに相違ないと言ふことですから、私に非常な不安を抱かせてゐた貴方の仇敵に對する憎惡は、もう消え去つたことでせう、私の嬉しさは貴方の御想像も及ばないところです！　嘗て貴方が挽歌の美しき天才と鐵砲を手にして顏を曇らせてこちらをお立ちになつた時、日頃に增して一層コルシカ人臭く――あまりにコルシカ人臭く私に思はれました、ほんたうに！

それは扨て置き！　私がこんなに、長い手紙を認めますのも、私が苦しんでゐるからです。あゝ！　知事は去るのです、貴方の山へ私共出懸けます時は、また手紙をお送り致しませう、そしてコロンバお孃さんにクリーム乾酪をおねだり致しませう、それも特別上等を！　どうぞコロンバ樣によろしく。私は絕えずあの短劍を使つて私が讀んでゐる新刊の小說の頁を切ることにしてゐます。だがあの銘刀はこんなことに使はれろのを怒つてゐると見えて、時に私の本をひどく裂くのです！

ではさよなら。父はよろしく申上げてくれと言ふことです。知事が申上げることをお聞き下さい。その忠告は聞くだけの價ひがあります。また知事は貴方のためにわざ〳〵寄り道をするのです。知事はコルテ（村の名）へ礎石を据ゑに行くのです。素晴しく大切な行事らしいのですが、私は遺憾ながらそれを見ることが出來ません。刺繡の附いた上衣を着て、絹の靴下や白の職綬を附けた一人の紳士が鏝を抱へてゐるのださうです、それから演說があつて、儀式は萬雷の如き「皇帝萬歲！」で閉ぢるのださうです。

貴方はこんな四枚續きの長い手紙を私にお書かせなされて、隨分御自慢なすつていゝ。とは言へ、前に申上げたやうに私は疲れてゐます。疲れてゐますからこそこんな長つたらしく書いてしまひましたの！　貴方も長いお手紙を下さつてもいゝのですの。猶、附言しますが、貴方が今以つて、ピヘトラネラ城へ目出度くお到着の御手紙を下さらないとは、

隨分思ひ切つていらつしやるのね。

再伸――くれ〴〵も知事が貴方に申上げ貴方にして頂くやうにお話することをお聞き入れ下さいますやうに。私共の方では、知事の忠告に貴方がお從ひにならねばならないと意見が一致いたしました。かくてこそ貴方は私を喜ばせて下さいます。

リディアより

オルソはこの手紙を三四回讀んで、その度毎に二三の註釋を心の中で附け加へた。それから彼は筆をとつて、長い返事を認め女中に言ひ附けて、その晩アジャッチオへ行く村の者に託した。

リディアの手紙が來るより前に、彼はもうバリチニ家に對する家庭の苦情が眞實のものか、架空のものかについて、妹と論議する氣持にはなれなくなつてゐた。扨て、こゝで手紙に接してみると、總てのことが明るく美しく見えて來て、彼はもう疑ひもしないし、憎みもしなくなつた。暫らく待つても、妹が下りて來なかつたから、彼は寢所へ行つた。彼の心は久しぶりに輕くなつてゐた。

祕密の吩咐を含めて、チリナを送り出したコロンバは、その夜、夜通し古い手紙を讀み調べた。夜明け暫らく前に、彼女の窓に二つ三つの小石を投げる者があつた。彼女は庭へ下りて行つて、隱し戸を開けて、頗る人相の惡い二人の男を家へ入れた。それから彼等を臺所へ案内すると、何か食べ物をやらねばならぬことを知つた。この者どものことは次の章でわかるでせう。

十五

翌朝の六時頃知事がよこした一人の下男が、オルソの家の扉を敲いた。コロンバは彼に會つた、すると彼は知事は今出懸けるところでオルソを待つてゐるのだと言つた。コロンバは躊ふところなく、オルソは階段から滑つて足の踵をくぢいたと言つた。三尺も歩くことが出來ないから、彼は知事さんをお訪ねすることを許して頂いて、ならうことなら、知事さんの方から當家へおいでを願へたら非常に忝けないと言つてゐますと答へた。

下男がこの意を含んで出て行くと間もなくオルソが寢室から下りて來て、知事が自分を呼びに來やしなかつたかと聞いた。コロンバは澄した顏をして知事からは、オルソに家に居て待つてゐて呉れと頼んで來たと答へた。

三十分ばかり經つてもバリチニ家には何の氣配もしなかつた。オルソはコロンバに、父の書類の中に何か新らしい見附け物でも有つたかと聞くと、彼女は言はなきやならないこともありますが、知事の面前でお話ししませうと言つた。彼女は外見は、充分落着いてはゐたが、顏付きと眼とに興奮が伺はれた。

遂にバリチニ家の戸が開いた。知事は旅行服を着て先頭に立つて歩き、村長と二人の息子とがその後から蹤いて來た。ピエトラネラ村民は、州の長官がその早朝彼等の村を去つて行くのを見ようとし

て早起きをしたのだが、見れば長官は三人のバリチニ家の人と廣場を横斷して、デラ・レビア家へ入つたのでその驚きは想像以上だつた！

「一同は媒和に行くのだ！」と、村の政事家が叫んだ。

「だから俺が言つたんだ、オルソは大陸生活が長過ぎたから、血の氣のあるものがするやうな結着をつけることが出來なくなつたんだな？」と、一人の老人が言つた。

「でもね。」と、デラ・レビア家の出入の男が答へた。

「最初の行動を起したのはバリチニ家だと言ふことを見逃してはならん、バリチニ家の方から降參して媒和を願つてゐるんだ。」

これに對して先きの老人が答へた。

「小さな指先きにうまく圓めてしまつたのは知事なんだよ。今時は勇氣なんて藥にしたくもありやしない、若い奴等はみんな私生兒か何かのやうに、祖先の血なるものを苦に惱んで、自分は正當にその血を受けてゐるかどうかと思つてやがるんだ。」

知事はオルソが痛さうな樣子もなく歩き廻つてゐるのを見て、少なからず驚いた。コロンバは嘘を申上げて濟みませんと二言三言お詫びを言つた。

「閣下が別の家に御滯在なら、兄はもう一も二もなく、お伺ひして敬意を表したのでしたでせうに。」

オルソは、幾度も〳〵、自分はこの冗戯けた計略に關係はありません、實は私も驚いてゐます。何

とも申譯がありませんと繰返して言つた。

知事と老辯護士のバリチニとは、オルソの辯解の眞實を信じたらしかつた。且つオルソが妹を叱りつけたりしてゐたので、一層本心から濟まないと思つてゐるものと信じた。然し村長の息子共の腹の蟲は納まつてゐたとは見えなかつた。

「我々を馬鹿にしてゐやがる！」と、オルランデュチヨが聞えよがしに言つた。

「僕の妹が僕にこんな惡戯をしたのなら、二度とさせないやうに僕は充分氣を附けて懲らしてやるのだが。」と、ヴィンセンテロが言つた。

この言葉や言葉の調子とがオルソをひどく不愉快にした。そして、親しくならうと言ふ望みが減つた。で、彼と息子共とはお互に包まず隱さず露骨に對峙して睨み合つた。

皆椅子へ着いたが、コロンバだけは臺所に通ずる入口に立つてゐる。知事は二言三言ありふれた挨拶の後に、世間の多くの訴訟事件では誤解の結果往々怨みを含むことになると話した。それから、村長の方へ向つてデラ・レビア氏は、お父樣を失はれた痛ましい事件に就て直接にも間接にも、バリチニ家は全々無關係だと信じて居られると言つた。實際の事實として、氏は兩家の間の訴訟事件の細目に關しては不快な感情を持つて居られた。その感情は家庭を長く遠ざかつて居られたのと、氏が入手せられた明細報告書の性質から考へると御尤もの次第であつた。だが、この事件全體は最近の告白書に依つて暗雲が一掃せられ、今は全然滿足して、バリチニ氏及び令息と親睦なる隣人の交誼を締盟し

たいと言ふ御希望におなりです……と言つた。
オルソは聊か不愉快さうであつたが、お辭儀をした。バリチニ氏は誰にも聞き取れぬやうな言葉を二言三言言つた。息子達は天井を睨んでゐた。知事は熱辯を續けて、今バリチニ氏に言つたことに相應なことを、今度はオルソに言はうとした。と、その途端にコロンバは襟卷の下から書類を取り出して、兩方の間へ進んで行つた。
「私共兩家の爭ひが眞實に止むのを見たいとは私の切望してゐるところです。」と、言つて、
「然し斯う言ふ媾和に絶對の誠意をあらしめるためには、充分雙方から説明を盡して、後々まで疑ひの感情は少しも殘さないやうにしたいと思ひます。扨て閣下、トマソ・ビアンチの告白書には正しく疑義があります。彼はあんなに惡評の響いた性質の人物だからです。また私はバリチニ氏の令息達がバスチアの監獄で、トマソに面會せられたる可能性があることを貴方にお話いたしましたね……」
「そんなことは謊だ。」と、オルランデュチヨが口を挿んで、
「トマソなんて見たこともない。」
コロンバは素早く輕蔑の眼を彼に與へて落着いて言つた。
「閣下は、トマソが一人の非常に危險者なる無賴漢の名を騙つて脅迫の手紙をバリチニ氏へ送つた理由、そして、彼の兄のテオドルに、私の父が非常に安く貸してゐた水車を、そのまゝ從來の通りに持たせたいと言ふ望みを抱いたからだと御説明なさいましたね、さうでしたか？」

「さうですとも。」と、知事は言つて、
「全く明瞭なことです。」
「こんなビアンチ輩が關係してゐるやうでは、もう分つてゐるよ。」と、オルソは妹の控へ目にしてゐる態度に誘はれて言つた。
コロンバの眼は話すにつれて興奮して輝き始めた。彼女は言つた。
「僞筆の手紙は七月十一日附にしてあります、その日の頃はトマソは彼の兄と水車小屋で暮してゐました。」
「さうですとも。」と、聊か不安を感じながら村長が答へた。
「だとすると、トマソ・ビアンチはこの事件に飛び込んで何が利益になつたのでせう？」と、コロンバは勝ち誇つて叫んだ。
「兄のテオドルの借地期間が盡きて、父は七月一日に解雇通知を發してゐます。こゝに父のその手續きの書類があります。注意條項もあります。新借地人を周旋した、アジャヲチオの事務員からの書面もあります。」
斯う言ひながら彼女は手にしてゐた書類を知事に渡した。暫らく人々は默つて驚いてゐた。村長は青くなつた。オルソは顏を顰めて知事の傍へ行つて、知事が頗る愼重に讀んでゐた書類を眺めてゐた。
「馬鹿にしてやがる。」とオルランデュチヨは再び叫んで、ぷり〳〵腹を立てゝ椅子から立ち上つた、

「行かう、阿父さん、こんな家へは二度と再び來るこつちやあない。」
バリチニ氏は直ちに平靜な態度になつてゐた。氏はその書附けを見たいと要求したから、知事は何にも言はないでそれを渡した。すると色眼鏡を額の上へ押し上げて、法律家らしい態度で、その書類を見た。コロンバは、母虎が仔の巣の傍へ近づく鹿を見つめてゐるやうに辯護士を見守もつてゐた。
「扨て？」と眼鏡を元へ下して書類を知事に返しながら、バリチニ氏が言つた。
「トマソは故大佐の親切を知つてゐて考へたのです——それに違ひありません——解雇する旨の大佐の書附けを撤回してもらひたいと思つてゐました。事實水車を持ち續けて來たのですから、であるが故に……」
「それは私でした。」と、コロンバは輕蔑した調子で言つて、
「水車へ彼を殘したのは私です。父が亡くなりましたから、出入の者を親切にいたはるのは私の勤めでした。」
「それにしても。」と、知事が言つて、
「トマソなる者は僞筆をしたと自分で白狀してゐるのです。これは明々白々です。」
「私に明白に感ぜられることは。」と、オルソが口を挿んで、
「この事件の底には暗々の裡に或る奸策が弄せられてゐると言ふことです。」
「私は、も一度皆樣達が確實なりとせられてゐることに反證を上げねばなりません。」

と、コロンバは言つて、臺所の戸を開けると、ブランドラチオと神學書生と犬のブルスコが、その部屋へ入つて來た。
この二人の無賴漢は何の武裝もしてゐなかつた。二人とも藝莢の帶はしてゐたが、附きもの、小銃は持つてゐなかつた。室へ入ると二人は丁寧に帽子を脱いだ。
彼等が突然出現した效果は想像に餘りがあつた。
村長は、殆んど失神した。二人の息子達は、彼等の短劍をさぐりながら、父を防ぐために勇敢に突進した。知事は、入口の方へ體軀を動かした。オルソは、ブランドラオチの上衣の襟首をひつ掴んで怒鳴つた。
「何用で此處へ來たのか、ゴロツキ奴？」
「係蹄だ！」と村長は叫んで、入口の戸を開けようとした。だが、戸は無賴漢の指圖でサヴェリアが外側から二重に鍵を掛けて置いた。
「よう、善良なる諸君。」と、ブランドラチオが言つた。
「吾輩を恐れる勿れ、吾輩は見掛け程腹黑い人間ではない。吾輩達は何等の危險を諸君に加へようとは思つてゐない。知事閣下、吾輩は貴官の召使であります。親愛なる中尉殿、どうぞお手柔らかに、絞め殺されさうだ。吾々は證人として此處へ罷り出たのです。おい坊んさん、なぜ默つてゐる。君は藝言の名人ぢやないか。」

「知事閣下。」と神學書生が立つた。
「吾輩は閣下の知遇を得てゐる紳士の一人に數へ上げられるの光榮を持つてゐません。姓名はヂォカント・カストリコニと申しますが、坊んさんなら、渾名は天下周知のことです。あゝ！　私を覺えてゐて下さい！　また、デラ・レビア令孃、今日まで拜眉の榮を得ませんでしたが、令孃は或人を通じて、トマソ・ビアンチなる者に關する明細なる陳述を私にお求めになりましたね。彼は三週間以前まで、バスチア監獄に於ける、吾輩の一同僚でありました。扨て、吾輩がお話しいたしたいことたるや……」
「それには及ばない。」と知事が言つた。
「拙者は斯う言ふ連中から何事も聞きたくない。デラ・レビアさん。私は貴方がこんな不快な隱謀に御用はない筈と思ひます。貴方はお家の御主人でせう、戸を開けさせなさい。御令妹はこの無賴漢共に對する奇怪な關係に就ては何かお話をなさることでせう。」
「知事閣下、どうぞ。」とコロンバは叫んで、
「この人が言はなければならないことをお聞き下さい、貴方は吾々全體に公平を以て臨むために此處にいらしてゐるのです。完全なる眞理をお求めになるのが貴方の義務ですわ。ヂォカント・カストリコニ、お話をおし！」
「こん奴の言ふことをお聞きになつてはいけません！」と、バリチニ家の者は聲を揃へて叫んだ。

「皆が同時に喋舌つたのでは。」と、坊んさんはニコ〳〵しながら言つて、
「何も聞えはしなくなる……既に申し上げた如く、吾輩はバスチアの監獄で、一人の同僚囚人がありました。その者こそ、かねてお聞き及びのトマソであります。彼はオルランデュチョ氏から再三訪問を受けてゐました。」
「それは謊だ！」と二人の兄弟が聲を揃へて叫んだ。
「二つの否定は一つの肯定に等しいのです。」と、カストリコニは冷やかに言つて、
「トマソは澤山金を持つてゐて、極めて豪奢に食ひ且つ飲んでゐました。吾輩は常に饗應を喜んだので——それは吾輩の唯一の小さな缺點ですが——然り、斯る奇妙なお客さんと相提携することは吾輩の根深き反對であつたにも拘らず、吾輩は謙遜して彼と數回食事を共にしました。だから、返禮として彼は監獄から吾輩と一緒に連れ出してやらうと誘ひました。吾輩が或種の親切を施したる一少女が脫獄の手段を供給して呉れました。名は言ひませんが。その少女に限らず誰でも監獄へは入れたくないから！　然るに、トマソは吾輩の提案を辭退して言ふのに、自分は無罪放免を確信してゐる。バリチニ辯護士が總ての法官に、自分の事件を有利に辯護して呉れて、雪の如く白き人物として法廷から大手を振つて出ることが出來る——懷ろにはどつさりお金を持つて——扨て吾輩は新鮮なる空氣を、吾輩自由の慣に依つて獲得する方が勝つてゐると思ひました。で、その通りに遣つゝけた次第です。」
「此奴の言ふことは皆謊の塊りだ。」と、オルランデュチョはきつぱりと言つて、

「吾々兄弟が鐵砲を持つて、家の外にゐるのなら此奴はこんなことは言へない筈だ。」
「馬鹿なこと！」と、ブランドラチオが叫んで、
「オルランデュチヨさん、坊んさんと喧嘩をしてはいけねいや。」
「お家にゐることはもう御免を蒙りませう、デラ・レビアさん。」と、知事は我慢がし切れないやうに足を踏み鳴らして言つた。
「サヴェリア！　サヴェリア！」と、オルソは叫んで、
「戸を開けろ、何をまご〳〵してる！」
「一寸、」と、ブランドラチオは言つて、
「吾々兩人が先づ逃げ出さなければなりません。知事閣下、人が普通の友人の家で見知らぬ人と會つた時には、三十分ばかり前に人を先きへ歸すのが習慣になつてゐます。」
知事は輕蔑したやうに彼を眺めた。
「吾輩は諸君の謙遜なる召使ひです。」と、ブランドラチオは言つた。それから手を水平に差し延べて、犬に向つて叫んだ。
「これ、ブルスコ、知事さんにお前がよく踊りが出來るのをお目に掛けろ。」
犬は飛んだ。無賴漢共は大急ぎで、臺所にある鐵砲を浚つて、直ぐに庭へ下りた。庭の門は鋭い口笛に應じて魔法に罹つたかの如く開いた。

「パリチニ氏よ。」と、オルソは怒りに燃えて言つた、
「私は今日と言ふ日こそ、君を相手に私書僞造並びにビアンチと、共謀罪の故を以つて檢事に告訴する。ことに寄ると、更に一層恐るべき訴訟を起すかも知れないよ。」
「拙者の方では、デラ・レビア君。」と、村長は答へて、
「君を無賴漢と連絡を取つて私を係蹄に陷し入れたものとして告訴する。兎も角、知事は君を警戒するやうに警官に命令を發せられるよ。」
「知事はその職務を果たします。」と、知事は嚴そかに言つて、
「知事は、ピエトラネラに秩序紊亂の無きやうに監視をします。知事は公平なる處置をとります。これは君がた全體に申してゐるのです。お判りですか、諸君。」
村長とヴィンセンテロはもう部屋を出てゐた。オルランデュチヨは後退りをして出かけると、オルソは聲を低めて言つた。
「君の父はあんなに年老つてゐるんだから、横つ面の一擊で擲り倒すことが出來る。僕は、君や君の弟に與るべきもつと有力な一擊が納つてあるんだ。」
その答へにオルランデュチヨは、短劍を引き拔いてオルソに殺倒して來て、將に、一突きせんとすると、コロンバが彼の手を摑んで力にまかせて捻ぢ曲げた。その間に、オルソは彼の顏に拳骨を食はせたから、彼は四五尺退つて自分の體軀を戸の柱に打ちつけた。短劍はオルランデュチヨの手から落

ちたが、ヴィンセンテロは自分の劍を拔いて部屋へ、つかくと歸つて來た。だが、コロンバは鐵砲を拾ひ上げて、此處の勝負は彼に不利であると知らせた。それと同時に、知事は喧嘩の中へ割つて入つた。

「覺えて居やがれ！　オルサントン。」と、オルランデュチヨが叫んだ。彼は手荒く戸を閉めてそれに鍵を掛けた。無事に逃げ出す暇があるやうにと。

オルソと知事は一言も言ないはで部屋の反對の隅に十五分も殘つてゐた。コロンバは彼女が得た輝やかしい勝利を誇らしげに、今日の勝ちを決した鐵砲に寄りかゝつて二人を順々に見てゐた。

「何と言ふ國だ！　何と言ふ國だ！」と、知事は遂に椅子から立ち上つて叫んだ。

「デラ・レビア君、君は間違つてゐる。僕は君が總て亂暴な行を中止し、法律がこの呪ふべき事件を解決するまでは待つてゐると言ふ名譽ある誓ひの言葉を君から聞かせて貰ひたい。」

「さうです、閣下、あの惡者を擲つたのは私の間違ひです。だが、既に擲つてしまつた以上は、彼が決鬪でも申込んで來たらそれを拒むことは出來ません。」

「おゝ！　いけません！　彼は君と決鬪したがりはしません、また萬一、君を暗殺するやうなことがあつたとすると、その血は貴方自身の頭の上にありますのです。（責任は君にあるの意）」

「私共は充分警戒いたしませう。」と、コロンバが言つた。

「オルランデュチヨは、かなり膽力があります。」と、オルソが言つて、

「何か暗殺以上のことを彼の手で決行するものと豫想出來ます。彼が劍を拔くことは素晴らしく早かつた。もし私が彼の位置に立つてゐたら、私も同じやうなことを爲たでせうけれど。だが、私は幸運にも妹がゐて呉れて、彼女の握力が世間のお孃さん並でなかつたために助かつたのです。」

「決鬪はなりません、それは禁じます。」と、知事が叫んだ。

「閣下、念のために申上げますが、私は私の名譽に關する範圍のことでは私自身の良心の外に何等の權威をも認めてゐませんのです。」

「君は決鬪してはならんと言ふことを申しますぞ。」

「閣下、貴方は私を拘引することが出來ます。もし私が囚人にせられるのをそのまゝに承知すればです。然しさうなさつたにしても、今日避け難きことを、別の日に延ずだけのことです。貴方は名譽あるお方です、閣下。貴方は外には何とも致し方がない事情になつてゐることを、御承知にならねばなりません。」

「お兄樣を拘引なさつたら。」と、コロンバが言つた。

「村の半數は兄に味方します。さうなると、私共は面白い射擊戰を見ることになるでせう。」

「閣下、私は貴方に適當な御忠告を申上げます。そして私が駄法螺を吹いてゐるものとは御想像ならないで下さい。」と、オルソは言つて、

「萬一、バリヲニ氏が、私を拘引するために村長たる職權を亂用するやうなことでもあれば、私は當

然自己防禦に出でます。」
「今日以後は。」と、知事は答へて、
「バリチニ氏の村長の職を解きます。氏は自らその明しを立てるでせう、ねえ、君。僕は君の味方をしてるのですよ。僕が君にお願ひしてゐることは極めて小さいことなんです。それは君に、私がコルテから歸つて來るまで、家の中に落着いてゐて下さい、と言ふことだけなのです。僅か三日不在するだけで、歸る時には檢事をつれて來ます。さうすれば、この犯罪の眞相が完全に闡明せられます。それまでの間、どうでせう、何等の暴行を行はないと約束をしては下さらんでせうか？」
「お約束は出來ません、閣下、オルランデュチヨが決鬪を申込むと私は豫想してゐます。」
「何ですつて、佛蘭西の一將校たる貴方が、私書僞造の嫌疑を掛けてゐるやうな一人物と決鬪をなさるのですつて！　デラ・レビアさん！」
「でも、私は彼を擲つてゐますからな。」
「しかし、貴方が或る懲役人をお擲りになつたとして、その者が仕返しを要求しても、でもなほ貴方は彼の相手になつて決鬪をなさるのでせうか？　ねえ、オルソ君！　だが私はこの點、出來るだけ讓歩するとしませう。では、言つて下さい――オルランデュチヨに挑戰しないと。尤も彼の方から決鬪を申込んで來たのなら、貴方は戰はれても構ひません。」
「申込むでせうよ――兎に角、私はそれを疑つてゐません――だが私は決鬪するために、私の方から

は二度と彼の顏を擲ると言ふことはしないとお約束致します。」
「何と言ふ國だ！」と、知事は部屋を大膽に歩きながら叫んだ。
「何時になつたら僕は佛蘭西へ歸れるのだらう？」
「閣下。」と、コロンバは愛嬌よく言つて、
「時刻が經ちましたから、此處で朝御飯をお召し上り下さいませんでせうか？」
知事は、噴笑さざるを得なかつた。
「もう、餘りに長い時間此處にゐましたのですから最眉をしてゐると疑はれるかも知れません！　あの礎石は何たる厄介物だ！　行かなければなりません。や、デラ・レビア嬢、今日は隨分偉い仕事を企てましたなあ！」
「少くとも、閣下、貴方は妹の自信が誠意の籠つてゐるものだとは、公平に御信用下さるでせう。また貴方自身で、その自信は相當な根據を持つてゐると信じて下さつたでせう。」
「さよなら。」と、知事は答へて、
「私は警察署長に貴方がたの行動を監視するやうに、命令を發して置きますよ。」
知事が出て行くと、コロンバが言つた。
「オルソ、此處は大陸ではないのよ。オルランデュチヨには貴方の正々堂々たる決鬪のことなどは分りやしません。且つ、あんな卑劣な男には、勇士らしい死に方を許すわけには行きませんのです。」

「コロンバ、ほんとにお前さんは強氣だねえ、危ないところをよく私を救つて呉れて、何ともお禮の申しやうがない。お前さんの小さな手をお借し、私は接吻したい。だが、私自身のことを少し調べさじて貰はう。お前さんに判らぬことがあるんだから。何か食べる物の支度をして頂戴。それから、知事がコルテへ出發すると同時に少女のチリナを私のところへ來させて貰ひたい。彼の娘なら何を吩咐けても立派に役に立つから。手紙を一本持つて行つて貰ひたいのだから。」

コロンバが朝餐の支度をしてゐる間に、オルソは自分の部屋へ馳け込んで、次の手紙を書いた。

貴君は至急小生と會見の必要あり、小生に於ても亦然り！　吾等は明朝六時を期し、アクアヴィヴの谷間にて會見することを得。小生はピストルを得意とするものなれど、其故を以て敢てその武器を貴下等に要求するものに非ず。貴君は小銃の名手と承る故に、雙方二連發銃を携へることにしては如何。小生は當村出身の一人の介添人を連れ行くべし。貴下の兄弟が貴下と同行の希望あらば介添人をいま一人連れ來らるべし。その際に限りて小生は介添人二人を連れ行く筈なり。但し前以て何分の御通知を乞ふ。

オルソ・アントニオ・デラ・レビア

知事は村長代理の家を訪問して一時間ばかり滯在し、バリチニ家に數分間立ち寄つた後、一人の警

官を護衛として連れて、コルテへ出發した。十五分ばかりした後に、チリナはオルソの手紙を持つてバリチニ家へ行つて、オルラデュチヨにそれを手渡しして來た。

手紙の返事はなか〳〵來なかつたが、夕方やつと届いた。それにはバリチニ辯護士の署名がしてあつて、自分の息子へ宛てた脅迫狀は檢事へ送り届けたと知らせ、最後に「老生の潔白を確信して、貴君の誣告は、よろしく法に依つて處罰あるべきものと期待罷り在り候。」と、書いてあつた。

彼れ是れする間にコロンバの召集に應じて五六人の羊飼ひがレビア家へ來て、塔の防禦工事に掛つた。オルソが止めるのも聞かないで、廣場を見下す窓を密閉して、銃眼をあけた。また、夜通し、村の色々の人々から援助の絶え間なしの申込みを受けた。神學書生、所謂坊んさんからは、彼とブランドラチオとは、村長が警官を呼び込むやうなことがあれば、その際は御援助に參加すると言ふ意味の手紙が來た。その手紙には次の附言がしてあつた。

「犬ブルスコに友の與へたる卓拔なる教育を知事は如何に考へたらんかをお尋ね申上候。」チリナに次ぎて、より以上有望にして才氣ある生徒はブルスコを措いて他にはこれなきものと存じ候。」

十六

翌日は戰爭らしいことは少しもなく、雙方防禦の位置に就いて睨み合ひのまゝで過ぎた。オルソは家を一歩も出なかつたし、バリチニ家の戸は終日閉ざされたまゝであつた。

五人の憲兵はピエトラネラ戒嚴のために殘留を命ぜられて、民兵唯一の代表者たる田舍巡査共と一緒に、廣場の周りを歩いたり、村の近所を歩いてゐるのが見受けられた。

村長代理は終日職綬を附けてゐたが、然し相對峙せる兩家の戸の銃眼が見えるばかりで戰爭が行はれるものとも見えなかつた。

たゞコルシカ人だけは、その日は廣場の樫の木の蔭に婦人連ばかりしかゐなかつたことを氣附いただらう。

晩飯時分にコロンバは嬉々としてネヴィル嬢から受取つた次の手紙を兄に見せた。

おなつかしきコロンバ嬢よ――私は貴嬢方總ての爭ひが解決したと言ふあなたの阿兄樣からのお便りにて非常に喜んでゐます。お目出度う！　父はこの上アジャッチオに滯在いたしかねると申してゐます。戰爭や狩獵の話の相手をする貴嬢の阿兄樣がいらつしやらないからです。私共は今日當地を引き拂つて豫て御紹介を蒙りし貴嬢の御親戚の家に今夜は御厄介になります。明後日略十一時頃お訪ね致して、山で作られるチーズを食べさせて頂きます。豫て貴嬢はその品は都會の製品より數等勝つてゐるとお話し下さいましたのね。

さよなら

なつかしきコロンバ嬢

貴嬢の友リディア・ネヴィル

「さうすると、僕の第二回目の手紙は見てゐないね？」と、オルソが言つた。

「この手紙の日附では、リディアさんは、貴方の手紙が、アジャッチオへ着いた頃は、もうお出懸けになつてゐたにちがひないのね、阿兄樣は、お客樣に來てはいけないと言つておやりになつたのですか？」

「僕は嬢に、今吾々は籠城の狀態にゐますと言つてやつたよ。お客に來て貰うには適當な時機ではないらしいからねえ。」

「まあ、呆れた！　あの英國人は風變りです。私がネヴィル嬢の部屋に泊つた最後の晩に、嬢は私に立派な仇討を見ることなくコルシカを去るのは殘念ですわとお話しになりました。だから、オルソ、貴方さへその氣になれば私共の敵の家へ攻め寄せて、お手本を見せてあげられるわ。」

「コロンバ、お前さんは女に生れて來たのはどう考へても自然の間違ひだよ、お前さんなら立派な軍人になれたのだ。」

「さうねえ。こんなことをしてる間に私はチーズを作らなければならないのでした。」

「それには及ばないよ。誰か使ひを遣つて出發せられぬ間に止めねばならない。」

「何ですつて！　こんな天氣にまあ使ひを出すなんて！　手紙を持つたまゝ川の中へ使ひの者が落ち

込んで溺れてしまふぢやありませんか。あゝ！　こんな嵐の晩には無頼漢の人々は氣の毒ねえ！　いい案梅にあの人達は厚い外套を着てゐる。私は貴方に爲なければならぬことをお話しいたしませう。この嵐が止んだら明朝早く立つてお客さん達がまだ出ぬ内に親類の家までいらつしやい、それなら難しいことはない、リディアさんは寢坊ですもの。貴方は一通り此處の事情をお話しして、でも猶ほ來ると仰しやつたら私共大喜びで歡迎しませう。」

オルソは喜んでこの提言に同意した、それから暫らく默つてゐたのでコロンバは話をつゞけた。

「多分貴方は、私がバリチニ家襲擊の話をした時は、私が冗談を言つてゐたと思つたでせう、だが今は少くとも一に對する二の力で向つてゐることがおわかりになりますか？　知事が村長を免職したので、この地方の人は皆私共の味方をしてゐます。私共は木つ葉微塵に彼等を粉碎することが出來、いつでも戰爭が出來るのです。貴方のお許しがあれば私は噴水の處へ行つて、女連中をひやかしてやります。すると彼等は恐らくは家から飛び出して來ます。非常なる卑怯者ですから。彼等の戸の銃眼から私に鐵砲を射つでせう、だが私に當てはしないでせう。それでことが決まります。と言ふのは喧嘩の火蓋を先方から切つたことになるからです。負けた方がいつでも割が惡いと定まつてゐます、喧嘩がある度に誰が誰を殺したと發見するのは誰の役ですか？　妹の言ふことを聞いて下さい、ねえ、オルソ、あの黑服の役人達や檢事連は此處へ來るでせう。愚にもつかぬことを喋舌りもするし書きもするでせう、だがそんなことは何の役にも立つものでもありません。あの古狐の辯護士が役人連中をまるめて黑を白と信じさせるでせう。あゝ！　あの知事奴が、貴方とヴィンセンテロとの間に割り込みさへしなかつたら、今は一人だけでも敵が減つてゐたのに！」

彼女はこのことを冷やかに定まり切つたことのやうに、恰も例の有名なるチーズを作る準備の話の繼續ででもあるやうに話した。

オルソは吃驚して恐ろしさと共に讚嘆して妹を眺め、テーブルから立ちながら答へた。

「美しいコロンバ、お前さんは惡魔が人間に化けてゐるやうな氣がする、しかし心を落着けたがいゝよ。私がバリチニの者共を絞罪にさせることが出來なかつたら何か外の方法で仇敵を取つてやるよ。『灼熱の彈丸か氷の刃』――ねえ、僕はコルシカの文句は忘れてはゐないぜ。」

「早からう好からう、ですわ……」と、コロンバは溜息をして、

「明日はどの馬にお乘り？」と、言つた。

「黑だよ、なぜそんなことを聞くの？」

「大麥の飼料をやつて置くのですわ。」

オルソは自分の部屋へ行くと、コロンバはサヴェリアや羊飼を寢せて、自分はチーズを作る筈になつてゐる臺所へ入つた。屢々彼女は耳を傾けて兄が寢入るのを待ち遠しがつてゐるやうであつた。遂にもう寢入つた筈だと考へた時、小刀を取り出して、その切れ味を確かめ、大きな靴をはいて、音を立てないやうにして庭へ出て行つた。

この庭は壁に圍繞まれてゐた。隣接地はいさゝか廣い地面となつてゐた。そこには生籬を撓らして馬が放牧してあつた。コルシカでは馬は厩舎に馴染ない。原野に放し飼ひとなつてゐて、勝手に食物や寒さ防けや雨避けを、動物の知感で探し求めさせることになつてゐた。

コロンバは庭の門をすこしも音を立てないで開けた。廣い地面へ出ると、やさしく口笛を吹いて、馬を自分の周圍に集めた。彼女は鹽や穀物をよく持つて來て與つたことがあつた。黑い馬が彼女の手の屆くところまで來ると、彼女は髮を取つて、短刀でその耳を切り取つた。馬は吃驚して飛び上つて鋭く嘶いて踊り上つて逃げた。

自分はこの仕事に滿足して、コロンバは庭を通りぬけて、歸らうとすると、オルソは窓を開けて叫んだ。

「誰だ？」

と、同時に鐵砲に裝彈する音が聞えた。具合のいゝことには庭の門が暗い隅にあつて、その大部分は無果樹の蔭に蔽はれてゐた。忽ち斷續的に兄の部屋から閃光が見えたので、兄はランプを點したがつてゐることが明かになつて來た。そこで、彼女は急いで庭の門を閉め、壁に添つて這ひながら進んだ。彼女の黑い着物と地に垂れ下る無果樹の簇葉と相錯綜するやうにして、やつと臺所へ達した。オルソが下りて來るより數分間の前のことであつた。

「どうなさつたのです？」と、彼女から訊いた。

「誰だか庭の戸を開けたやうだつた。」と、オルソは答へた。

「それは全く出來ないことですわ。犬が吠えさうなものねえ、兎も角も行つて見て來ませう。」

オルソは庭の周りを歩いてみて、門が堅く閉ぢてゐるのを確かめると、いさゝか氣まりわるげにして、自分の思ひ違ひを恥ぢながら部屋へ引き返さうとした。

「私ねえ、阿兄樣が用心深くおなりになつて、今の位置では當然さうなさらなければならない人のやうに成つて下さつたのを拜見して、喜んでゐますわ。」と、コロンバは言つた。

「それはお前さんのお仕込みだよ、お休みなさい。」と、兄は答へた。

翌朝暗い内にオルソは起きて、出發の支度をした。彼が着込んだ服裝の中には、今や心ときめく婦人を迎へんとする流行を追ふ青年の趣味と、隣人に仇敵を持つコルシカ人の賢しい心使ひが伺はれた。ぴつたりと體軀と合つてゐる青い上衣の肩に小さな錫の藥莢箱を掛けて、片脇のポケットに短劍を入れ、手には英國製の立派な鐵砲を携へた。鐵砲には既に裝彈してあつた。

彼は、コロンバの淹れた珈琲を急いで飲んでゐると、一人の羊飼が、馬に鞍や轡を附けに出て行つた。彼と妹とは直ぐにその羊飼の後を追つて草原へ出た。羊飼は馬を捕へたが、忽ち吃驚仰天して鞍や轡を落してしまつた。夜前の切傷を忘れてゐなかつた馬は、また片耳も同じ扱ひを受けるのだと恐れて尻込みをし、大地を蹴り嘶き立てゝ、種々と荒れ廻つてゐた。

「こら早くしろ！」と、オルソは叫んだ。

「あれ！　オルサントン！　あれまあ、オルサントン！　飛んでもねえ！　飛んでもねえ！」と羊飼は叫んで、數へ切れない意味の分らない呪ひの言葉を續けざまに怒鳴りたてた。

「どうしたと言ふの？」と、コロンバが聞いた。

一同は馬の處まで走つて行つて、馬が耳に深傷を負ひ血を流してゐるのを見ると、且つ驚き且つ怒つた。

コルシカ人の眼には、敵の馬を切傷ることは、直ちに復讐、挑戰、死の脅威なることを、讀者は、思ひ出して下さらねばならぬ。「彈丸より外にはこの大罪を拭ふことは出來ない。」

オルソは大陸に住んでゐたから、かゝる暴行は外の人よりは腹立たしさが少なかつた。でも、その瞬間、バルチニ一家の者が眼前に居たなら、敵のこの爲業によりて加へられたる侮辱を償はせるために、必ず仕返しをしたらうと思はれた。

「卑怯者奴等が、正面から僕に向はれないから、罪もない馬に復讐しやがつた！」と、彼は叫んだ。

「どうするつもり？」と、コロンバは猛々しく叫んで、

「敵は私共にこんな挑戰をしました。敵は私共の馬を切傷つたのに何の仕返しもしないでゐるの！

それでも男子？」

「復讐だ！」と、羊飼共は叫んだ。

「さあ、馬を村中駈けさせて、敵の家へ襲撃だ！」

「俺は瞬く間にあの納屋を燒き落して呉れる。」

或る者はお寺から長梯子を運ばうと言ふし、また或る者は廣場の片側に横へてある大梁を持つて來て、バリチニ家の屋敷の戸と言ふ戸はみな敲き壞してしまはうと言つた。

怒りわめく聲々の中で、コロンバも聲を張り上げて、銘々が部署につくより以前、ブランデーの一杯のために、一先づ家で勢揃ひをしなければならぬと言つた。

不幸にして、或は恐らく幸ひにして、コロンバが無辜の動物に加へた殘酷なる計略は、オルソへの利き目が殆んど失はれた。オルソはこの野蠻な切傷は疑ひもなく敵の一人の爲業と思つた、特にオルランデュチヨの爲業と疑つてゐたけれど、また彼は自分が決鬪を申込み、擲つたほどの青年が馬の耳を切る位のことで彼等の受けた恥辱を晴らしたとは信じなかつた。却つてこの馬鹿らしい卑劣な復讐の形式は敵に對する侮蔑の念を彼に加へさせた。また知事の意見とも共鳴して、そんな手合ひはこちらの刀の汚れになると思つた。

そこで、彼は自分の言ふことが人々に聞えるやうになると同時に、驚く家來共に、彼等の好戰的主張はよろしく撤回すべし、國法の力は間もなく馬の耳の最高の倍償をして呉れると言つた。言葉を勵まして、彼は言ひつゞけた。

「私は此家の主人である。私に服從して貰ひたい。人を殺すとか、家を燒くとか、と言ふことを考へる者があつたら、私は眞先にその者を射つ。さあ栗毛の方の馬へ鞍を置いて呉れ。」

「何ですつて！　オルソ！」と、コロンバは兄を傍らへ誘ひ出して言つた。
「阿兄様は、私共をこんなに侮辱した奴等をお許しになるのですか？　阿父様が御存命ならば、バリチニの奴等は獣物を切るなんて、とてもしなかつたのです。」
「奴等は必つと後悔することになるのだ。だがねえ、獣物を襲撃する勇氣しかないやうな者を罰するのは、警官や、看守位の男がする職務だよ、皆に言つた通り、法律が復讐して呉れる。かりに法律ではよくいかなくつても、私が何人の子孫であるかを思ひ出さして呉れる程のことではないんだよ。」
「我慢しなければならないのねえ！」と、コロンバは嘆息しながら言つた。
「コロンバ、念のために言ひ置くが、私が歸つて來て、こちらからバリチニ家へ對して少しでも示威らしい行動を執つたやうな形跡を認めたら、私はお前さんと雖も許さないのだよ。」
それから少し優しい調子で彼は言つた。
「大丈夫、うん、頗る大丈夫、私は大佐と令嬢を連れて歸るよ。お部屋を潔れいにきちんと整へて、晝餐の御馳走にもぬかりなく、出來るだけ、御客様を氣持ちよくさせるやうに氣を附けておくれ、ねえ。それは勇氣があるのは結構なのだ。コロンバ、だが、女と言ふものは家庭向きのことも亦忍せにしてはならんからねえ。さあ私に接吻をしてお機嫌をよくしておくれ。どれ、栗毛の支度も出來上つたかい。」
「オルソ。」と、コロンバは言つて、

「貴方一人で出懸けてはいけません。」
「護衛なんか要らない。まさか私は誰にだつて耳を切らせはしないよ！」
「いけません、對戰中のこの際、斷じて貴方一人を發たせることはなりません！　ちよいと、ボロ・グリフォ！　ギアン・フランチェ！　メモ！　みんな鐵砲を持つんですよ、阿兄様のお伴をなさい。」
かなり勢ひ込んで言つてはみたが、オルソは護衛を附けねばならぬと言ふ說に讓歩しなければならなかつた。そこで彼は、羊飼の中でも、最も聲を大にしてバリチニ家と一戰を交へようと力強く悲憤してゐる者の中から護衛を選拔した。それから留守をあづかる連中や妹にも同じやうに改めて訓戒をして、バリチニ家を避けるやうにわざと廻り道をしてこの旅行に出かけた。
彼等は既にピエトラネラからかなり進んで馬の歩度を早めてゐると、或る沼に流れ込んで消えてゐる一つの川を渡ることになつた。老人のボロ・グリフォは、そこの泥濘の中で氣持ち良ささうに寢ころんで日光と冷水との二つを樂しんでゐる數頭の豚を見た。彼は直ちに一等大きなやつを狙つて頭へ當つた一發で、その場を去らせず射ち殺した。豚の仲間は踊り上つて、驚ろくべき速力で駈け出したから外の羊飼がまた一發射つた時にはその群は藪の中へ駈け込んで姿を見せなくなつた。
「馬鹿！」とオルソは叫んで、
「豚と猪を見違へてるな！」
「さうぢやアねえ、オルサントン。」と、グリフォは答へた。

「あの群は辯護士の物だよ。だから私はうちの馬へ傷を附けた返禮を辯護士に敎へてあげたのさ。」
「なんだと、この野郎！」とオルソは怒つて怒鳴つた。
「貴樣は敵の惡行をお手本にしてるのだ！　直ぐ歸れ、この馬鹿野郎。お前のやうなものには用はない、お前には豚がいゝお相手だ。こら、よく聞け、この上俺について來るやうなことをしたら、いゝか、貴樣等の頭を壞き潰すぞ！」
羊飼共は、うんともすんとも言はなくて互に顏を見合はしてゐた。オルソは馬に拍車を入れて忽ち姿を沒した。
「おや〳〵、妙だなア！」と、グリフォは言つた。
「人のために働いてこんな目に會ふ！　親父さんの大佐殿はお前に御不興だつたことがあつたぞ、いつだつたかお前が辯護士を鐵砲で狙うただけで射たなかつたからだ！　あの時射たなかつたとはお前は馬鹿だつた！　扨て息子殿は――お前が見てゐたやうに、私はあの人のために射つたのだのに、まるで葡萄酒の空き壜を壞すやうに、わしの頭を壞すと仰しやる！　大陸で敎育を受けてござつたことはあれだのう、メモ！」
「さうだとも！　だが、お前がこの豚を殺したと判つたら奴等はお前を訴へるぞ。さうなつた所でオルサントンはお前の辯護料も出すまいし、判事に手を廻しても呉れはしまい。幸ひ周りに人はなしと來てらア、聖・ネガ樣がお助け下さらうと言ふものだ。」

彼等は手短かに相談を決めて、豚は沼に叩き込むことにした。で、早速その運びをつけたのだが、勿論それは、デラ・レビア家とバリチニ家との敵愾心の犧牲となつた、この無辜の動物の臀から、たんまりと切り肉を頂戴してから後のことであつた。

十七

訓練のない護衞共を追つ拂つて、オルソはずん〳〵と旅行を續けた。彼の心は敵に會ふと言ふ恐怖よりはネヴィル孃に再會すると言ふ樂しい考への方に囚はれ始めた。
「あの惡漢バリチニに對して起さにやならぬ訴訟事で、バスチアへ行かざアなるまいな。」と、獨り言を言つて、
「だとすると、あの町までネヴィル孃と一緒に出懸ける、そこからオレザの鑛泉へ一緒に出懸けるとしたつてなぜ惡からう？」
突然彼の眼に、繪のやうなその町の風景が彼の幼時の追憶とともに描き出された。彼は時代の經つた栗の木の前に展開せる青々とした芝生の上に連れて行かれたと空想した。陽を受けてキラ〳〵光る草の上に青い花が處々密生してゐる。花は彼に微笑みかける眼のやうであつた。自分の側にはリディア孃が坐つてゐた。孃は帽子を脫いでゐた。絹絲より細く柔らかな孃の金髮は、木の葉を漏れて降り注ぐ日光に映つて黃金の如く輝く。孃の碧い眼は澄んでゐて、蒼穹よりも碧く思はれる。手で頰を支

へて孃は、彼がきまり悪氣にする短かい戀の口説を夢見心地で聞き惚れてゐる。孃は彼がアジャッチオで最後に見た時と同じモスリンの服を着てゐる。その服の下から、黑い繻子の靴を穿いた小さな足がのぞいてゐた。オルソは何を措いても、その足に接吻したいと思つた、が、リディアは手袋をはめた手に持つ一本の雛菊を差し出した。オルソはその雛菊を取ると孃の手は彼の手を抑へる。彼は先づ雛菊、次ぎに孃の手へ接吻する、孃はそれを厭ふやうな樣子をしない。

こんな想ひに耽けつてゐると自分の進んでゐる路のことは浮はの空となつてゐた。が馬はずん〳〵駈け出してゐた。この白日の夢の中で彼がネヴィル孃の手に再び接吻せんとして、危く馬の頭に接吻するばかりとなつた。馬が不意に止つたからだ。少女のチリナが馬の手綱を取つて彼を止めた。

「そんな風でどこへ行くの、オルサントン？」と、彼女は聞いて、

「この近所に敵がゐるのが分らなくつて？」

「敵！」と、オルソは叫んだ。彼は自分の空想が最も興味ある點に達したのを破ぶられたので腹を立てた。

「何處に敵がゐるんだ？」

「オルランデュチヨが直ぐ近くにゐて貴方を待ち伏せてゐます。お歸りなさい！　お歸りなさい！」

「ほう！　僕を待ち伏せてゐるつて！　お前は奴に會つたのかい？」

「會ひました！　彼の人が傍を駈け拔ける時私は齒朶の中に寢ころんでゐました。彼の人は望遠鏡で

周りを見てゐました。」

「どの方角へ行つたのかい？」

「貴方が今進んでいらつしやる方角、その下の方。」

「有難う。」

「オルサントン、うちの叔父さんを待つた方がよくない？　叔父さんは長い時間はかゝりやしない。叔父さんと一緒なら貴方は大丈夫よ。」

「心配は要らない、チリナ、お前の叔父さんに用はない。」

「よければ私が先きに立つて行きませう。」

「いやそれには及ばん。」

そこでオルソは馬に拍車を入れて、チリナが示した方角へ駈け出した。

彼の最初の考へは怒りに滿ちてゐた。だが、彼は自分が擲つた復讐に馬を切つた卑怯者を罰する絕好の機會を與へられた幸運を喜んだ。次に、進むにつれて、知事との約束の性質と、特にネヴィル孃の來訪の機會を失ふの怖れとが、彼の心に或る變化を働きかけて、成る可くオルランデュチオに會はないで濟むものならそれに越したことはないと言ふ望みを起させかけた。然し直ぐに父を想ひ出し、馬に加へられた侮蔑と、バリチニ家の脅迫を思ひ出すに及んで、彼の怒りは再燃し、敵を探し出しても無理矢理に決鬪させようと思ふに至つた。こんな正反對の考へに心が亂れて來たが、進むのはずん

ずんと進んだ。しかし今は心を配つて小藪や生籬の中も覗くし、時々は立ち止つて田舍で聞えるあの空漠たる物の音にも耳を傾けた。チリナと別れて十分――略朝の九時頃――非常に嶮しい岡の端へ差しかゝつた。彼の進まんとする路はやつと見える位の小路であつて、最近燒けた藪へ通じてゐた。その大地は白い灰で深く覆はれ、そこ彼處には燒けて葉をもぎとられ、黑焦げになつた二三の灌木の叢や、枯死したまゝ立つてゐる大きな立木が何本となくあつた。燃えた後の草叢を見ると、冬の半の北國の或る地方の景色が思はれた。また、火が通つた部分の荒寥たる風情と、豐富な草叢の繁りとの對照とは、一層憂鬱な寂莫さを見せてゐた。

かうした情景の中で、オルソは唯一つ肝要なこと――それは現在の彼の位置にゐる者には、眞實重要なること一つだけを考へてゐた。地面は露き出しだ。一人の伏兵も蔭してはゐない。ところで、草叢から銃身を覗かせて、こちらの胸に照準を狙けてゐる奴が、何時出るかわからないと言ふ怖れを抱く者にとりて、何物も遮るもの無き、この平地に臨むのは、正に正眞正銘のオアシスに入る如く思はれると言ふこと、そのことであつた。

燒けた草叢の先きには、耕やされた畑があつて、この國の習慣通りに胸の高さ程の小石の壁に圍まれてゐた。この圍ひの中へ路は出たり入つたりしてゐて、遠方からは森のやうに見える大きな栗の木があちらこちらに聳えてゐた。

傾斜が急なのでオルソは馬を捨てゝ手綱を馬の首に掛けたまゝ灰の中を辷りながら下りて來た。彼

は右手の圍ひの壁から十二三間のところまで來ると、面前に、先づ銃身、それから人間の頭が壁の頂きに上つて來たのを見た。その鐵砲は低く目にせられて、今やオルソに向つて火蓋を切らんとするオランデュチヨの顏が見えた。オルソは忽ち防禦の位置に就いた。二人はお互に狙ひ合つて數秒睨み合つた。それはどんなに勇敢なる人と雖も、殺し又は殺されんとす瞬間に感ずる苦しい數秒であつた。

「こゝな卑怯者！」と、オルソが叫んだ。

この言葉が言ひ終らぬ内にオルランデュチヨの鐵砲が閃めいた。すると同時に第二の銃音がオルソの左、小路の反對側から聞えて來た。オルソには見えなかつたが、別の壁圍ひの蔭に陣取つた別の一人の男が射つたのであつた。彈丸は二發ともオルソに當つた。オルランデュチヨのはオルソが狙ひをつけるために持ち上げてゐた左腕を貫通した。今一發の彈丸は胸に當つて上衣を破つたが、運よく短劍の刀身に當つてそこで潰れて微かな傷を附けただけであつた。射たれた手はぐつたりと垂れたから、オルソはその瞬間鐵砲を落した。然し彼は再びそれを拾ひ上げるや否や、右手の片手射ちでオルランデュチヨを射つた。眼から下は隱れてゐる敵の頭は壁の蔭に消えた。オルソは左へ向ひて第二發目を、煙の渦環の中から見えるか見えない男をめがけて放つた。その顏も亦隱れた。この四發は例へやうのない早さで次ぎ〳〵と射たれた。充分訓練の屆いた兵士でも、その交互射擊に於てこんなに短い間隔では射つことは出來なかつた。

オルソの最後の射擊の後には死の如き沈默が續いた。彼の鐵砲から出た煙りはまだ頭上の空に漂ふ

てゐた。壁の蔭からは誰も動かず何の音もしなかつた。腕の痛さがなかつたら彼が今射つた人は、彼の空想の幻影に過ぎないと思つたであらう。

二回目の發砲を豫期してオルソは一二間離れて、燒け殘つたまゝ立つてゐる一本の木の蔭へ行つて、その樹を盾にとつて膝の間に鐵砲を夾んで、素早く裝彈した。と同時に、左腕の痛みが烈しく加はつて來て、恐ろしく重いものを持つてゐたやうに感じた。敵はどうなつたのだ？　さつぱり分らない。敵が逃げたのなら、それとも怪我でもしたのなら、何かの音が聞えたであらうし、齒朶のなかにその氣配もあつた筈だ。では、死んだのか、それとも壁に隱れてオルソを射つ二度目の機會を待つてゐるのか？　この不安の狀態のうちで、力が次第に衰へるのを感じながら、右の膝に寄り掛つて左の膝で傷持つ腕を支へてゐた、そして木の枝へ銃身を掛けて、指を引金にあて、眼を壁につけ、聞き耳たてゝ些細の音でも逃がすまいと數分間は絶對に靜まり返つてゐた。その數分間は數百年の長さにも思はれた。

遂に、遙か後の方で吠え聲が聞え、矢の如く岡を飛び下つた一匹の犬があつて、彼の前に止まると尾を振つた。無賴漢どもの生徒兼同伴者たる犬のブルスコが主人が來たことを知らせたのであつた。如何なる善人の來訪と雖も、こんなに待ち焦れられることはなかつたであらう。

犬は鼻を上げて兩方の圍ひの側に近づいて不安げに嗅ぎ廻つた。忽ち低いうなり聲を發して一飛びで壁を越えて、再び壁の頂上に現はれた。犬はオルソを繁々とみて、犬として出來る限りはつきりと

驚きの情を見せた。それから再び鼻を揚げてそこを去つて、反對の圍ひの方まで走つてその壁をまた飛び越えた。暫らくすると、壁の頂上に現はれて、また同じ驚きと不安な樣子をして見せた。それから後足の間に尾を夾んで、オルソを見ながら、その脇を走り拔けて次第に遠ざかつて小藪に馳け込んだ、小藪を拔けると、下りた時に劣らぬ速さで一散に走り登つた。その坂道の嶮しさに頓着なく駈けつけて來る一人の男を迎へるためであつた。

「助けて呉れ！　ブランド！」とオルソは聲が屆くところまでその男が來たと知ると同時に叫んだ。

「やあ！　オルサントン！　怪我をしましたな？」と、ブランドラチオは息を切らせて駈けつけながら聞いた。

「體軀ですか、手足ですか？」

「腕だ。」

「腕を――ぢあ、何でもない。して相手は？」

「手應へがあつたやうに思ふ。」

ブランドラチオは犬の後を追つて圍ひの側まで走つて壁越しに覗き込んだ。それから帽子を取つて言つた。

「やあ今日は！　オルランデュチヨ旦那！」

彼はオルソの方へ向ひて眞面目腐つて一禮をして、

「これぞ正しく私が言ふところの適材適所です！」と言つた。
「まだ生きてるかい。」と、オルソは口を利くのも難かしげにして尋ねた。
「生きちやアゐられん！　貴方が眼玉を射ち抜いた彈丸で事切れでさア、これは魂消た！　この穴は何と言ふことだ、どうも立派な鐵砲だ。素晴らしくでつかい口徑！　これなら人間の腦味噌は木ッ葉微塵だ！　ねえ、オルサントン、私は最初のピイッ！　ピイッ！　を聞いて獨り言を言つたのですよ、やつたな、中尉を殺したわい！」すると私はブーン、ブーンを聞いたから、そこでまた言つた。
「やあ英吉利鐵砲がものを言つてる、しかも氣持ちのいゝ返答をしてゐる……」これ、ブルスコ、何用だ？」
犬は彼を、も一つの圍ひの方へ連れて行つた。
ブランドラチオは仰天して叫んだ。
「南無三！　二連發、懸け値なし！　火藥は高い、そこで火藥の節約！　讀めた、讀めた！」
「何だと、おい、何を言つてるんだ？」と、オルソは聞いた。
「されば！　白ばくれちあいけませんぜ、中尉殿、貴方は自分で射ち落した獲物を人に拾はせようてんだ。今日厭な不意射ちを食ふ者を知つてゐますが、それはバリチニ辯護士さん！　殺したてのほやほやの肉さ？　さあ、こゝには辯護士さんのお望み次第どつさりある！　だが、斯うなつたのでは誰が後繼者となるんだらう？」

「何！　ヴィンセンテロも死んでるのかい？」
「頗る附きで死んでまさア。『生き殘り連中に幸ひあれ。』ですよ。貴方が特別御親切だつたことは、二人に少しの苦痛も與へられなかつたことです。來て、まあ、ちよつとヴィンセンテロを見て御覽なさい。まだ膝まづいてゐますぜ。頭を壁に倚りかけて眠るが如くですよ。言つてみれば、鉛の安眠と言ふやつです——可哀想に！」
オルソは恐ろしさに顏を反むけた。
「確かに死んでゐるかい？」
「貴方は劍をとつては稀代の名人と言はれたサンピエロ・コルソのやうな方です。彼はいつも一突きで澤山だつた。これを御覽なさい、左胸部貫通——丁度ヴィンチレオネがウォーターローで射たれた通りです。たしかに彈丸は心臟から隔たつてゐません。然も二連發の後の分の彈丸だ！　私はもう鐵砲はやめよう！　二發で人間二人、然も二人の兄弟！　三發目があつたら親父が殺されてる。今度はもつと上手になつてゐる！　何とまあよく射つたもんだ、オルサントン！　好漢吾輩たりとも二發で二人の警官を射ち止めるやうな眞似はとても出來ない！」
こんなことを喋舌りながら、彼はオルソの腕を調べて短劍で自分の袖を切つた。
「何でもありやアしない。」と言つて
「コロンバ孃さんが上衣の繕ひ仕事をせられるだけのこと。おや、胴衣に血が着いてるなこゝから何

にも入りはしなかつたんですね？　勿論入つてゐない、入つたとあれば貴方はこんなに元氣にしては居られない！　さあ指を動かして御覽なさい。私が貴方の小指を嚙む時私の齒が分りますか。輕くしか分らん？　いゝのです、かまやしません、何もくよ〳〵思ふことはない。さあ、ハンケチとネクタイをお出しなさい。だが、貴方の上衣は可成り駄目になつちやつた。なんだつてこんなめかし立てた服を！　結婚式へでも行くつもりだつたのですか？　さあ、葡萄酒を一杯。おや水筒を持つてゐませんな？　水筒なしで出懸けるコルシカ人は無い筈だ。」

傷の手當ての繃帶半ばで、彼は手を止めてまた叫んだ。

「二連發、人間二人が石の如く死んぢまつた！　坊んさんは何と言つて笑ふだらう――二連發！　あ　あ！　チリナの蝸牛奴、來をつたな。」

オルソは返事をしなかつた。彼は蒼ざめて手足を慄はせてゐた。

「チリナ！」と、ブランドラチオは叫んで、

「壁の蔭を見ろ！　何があると思ふ？」

少女は體軀を延ばして、壁の上へ登つた。彼女はオルランデュチヨの屍體をみると直ぐに十字を切つた。

「何でもありやしない。」と、無賴漢は言つて、

「あそこへ行つてもう一偏見て來い。」

少女はまた十字を切つた。そしておづ〳〵と、

「叔父さん、貴方が爲たの？」と聞いた。

「私！　私は老いぼれて役立たずぢやないか？　チリナ、それは若旦那の離れ業だよ、お目出度う御座いますと申上げろ。」

「コロンバお孃さんがお聞きになつたら、さぞお喜びになるでせう。だが、お怪我を御覽になつたら隨分吃驚なさるわ、オルサントン。」と、少女が言つた。

「さあ、オルサントン。」と、オルソの傷の繃帶を濟ませて無賴漢は言つた。

「チリナが貴方の馬を連れて來ましたから、私と一緒にお乘りになつてスタゾナの藪へ行きませう。あそこなら警官共には判りやしない。私共はあらん限りの力を盡して貴方を守ります。十字街まで行つたら貴方は馬を下りて貴方の馬をチリナにお渡しなさい。その途中でチリナへどんな言傳でもなすつて下さい、この子はどんな使ひでもちやんとコロンバ令孃へお傳へします。何を言ひつけられても大丈夫です。一寸切りにせられたつて味方を裏切る子ぢやアありません。」

それからチリナの方へ向ひて優しく言つた。

「去せやがれ、倭娘、呪はれろ、破門されやがれ、小まぢやくれのお轉婆！」

ブランドラチオは多くの無賴漢の如く迷信を抱いてゐて、子供を祝福したり、褒めたりすると、子供が懷き過ぎるものと心配してゐた。人も知る通り運命の神は人が望む正反對の結果を齎らす惡い癖

があるからと言ふのであつた。
「私は何處へ連れて行くのだ、ブランド？」と、オルソは力なげに聞いた。
「さあ貴方がお好きなところへ、監獄へでも藪へでも。だが、デラ・レビア家の人は監獄へ行く道は御存じない筈、そこでまあ藪としませう、オルサントン！」
「すると、私の望みもおさらばだ！」
それがオルソの悲しい叫びであつた。
「貴方の望み！　ぢやア一體どんな勝負がしたいのです？　二發であれよりよく射ちたいと言ふのですか？　奴等が兎も角貴方に射つてかゝつたのは全く不思議のことだ。猫のやうな命を持つてやがつたに違ひない……」
「先きに射つたのは彼等だつた。」と、オルソが言つた。
「全くさうです、私は忘れてゐた……ピイッ、ピイッ！　それからブーン、ブーン！　片手射ちの二連發。あれより立派な離れ業があるもんなら絞められても構はない。さあ、貴方の馬に乘つて、出懸ける前に貴方の離れ業を一目見てやんなさいよ。暇乞ひをしないで出て行くのは紳士に對する禮儀ぢやない。」
オルソは馬に拍車を入れた。この世の何物を以てしても、彼が殺した不幸なる者共を見ようと言ふ氣にはなれなかつた。

「聞いて下さいオルサントン。」と、無賴漢は手綱を取りながら言つた。
「遠慮なしに話させて頂きませう。尤も、貴方に對して何の恨みも私には無いんですが、死んだ二人の青年は氣の毒とは思ひますよ。斯う言つたからと言つても勘辨して下さるでせうなあ。二人とも男前はよし、強くはあるし又若かつた！　オルランデュチョとは私は幾度も狩獵に行つた。四日前には私に葉卷を一束くれた。それからヴィンセンテロはいつも快活であつた、貴方としては、眞實に仕なけりやならんことをなさつたのだ。おまけに、貴方の射ち方はあまりに鮮やかだから悲しくも何ともありやしない。だが、私は貴方の仇討ちには何の關係もなかつたのだ。貴方は正しかつた。それは分つてゐる。敵がある時は敵を追つ拂ふのは當り前のことだ。扨、バリチニ家——それは舊家だ。こゝに一軒また舊家が減つた——しかも不思議なことには、二連發で！」
バリチニ家に對して、こんな追悼演說を試みながらブランドラチオは、オルソとチリナと犬のブルスコを、スタゾナの藪へ全速力で連れ込むのであつた。

十八

兎角する間に、コロンバはオルソが出發してから間もなく、間諜の者から、バリチニ家の者がオルソを待ち伏せをしてゐたとの報告に接した。それからといふもの、彼女は痛ましい心配の餌食となつた。來客を迎へるために支度の出來上つた座敷から臺所へと、周章てゝ家中を駈け廻つた。いつも忙

がしい、そして何にもしない、絶えず何事かゞ村に起きはせぬかと立ち止つては外を見た。略十一時頃になつて、聊か大人數のお客連が馬に乘つてピエトラネラへ到着した。一行は大佐、令孃、下女と案内人達であつた。

その一行を迎へた時彼女が言つた最初の言葉は、「兄にお會ひになりまして？」であつた。續いて彼女は案内人に、どの道を通つたかと言ふことゝ、何時に親類の家を發つたかと聞いた。その返事では一行がオルソに逢はなかつた理由を知ることが出來なかつた。

「多分若旦那は上の路をお通りになつたのでせう。」と、案内人が言つて、

「私共は下を通りました。」

だけれど、コロンバは納得しないで案内人を質問責めにした。冷靜は彼女の一部であり、加ふるに外國人には少しも弱點を見せまいとする自誇心があつたにも拘らず、自分の不安を包みおほすことは不可能であつた。で、大佐は素より、リディアは特に、コロンバから兩家の媾和の企て及びその企の最も不幸な結着を聞くに及んで、一樣に深く心配するやうになつた。

リディアはもぢ〳〵として方々に使ひを馳せてみようと言ふし、父の大佐は案内人を連れてオルソを探しに馬で出懸けようとまで提言した。お客のこの恐怖はコロンバに主婦たるものの務めを思ひ出させた。彼女は努めて微笑しながら、大佐に食卓へお着き下さいと言つて、兄の歸りの遲いのを說明せんと尤もらしい二十ばかりの理由を數へ上げてみたが、彼女自身で直ちにそれを打ち消した。大佐

は婦人が當惑してゐる際、それに元氣をつけるのは男子の義務だと考へつくと、次ぎのやうな思ひ附きを言つた。

「これは必つとデラ・レビアさんが何か獲物に逢はれたのですよ。でも、私が進げた鐵砲でなければあんな大きな音はしなかつた筈ですからなあ。」

コロンバは眞つ蒼になつた。彼女を注意して見てゐたリディアは、大佐のこの話がコロンバに應へたと直ぐに知つた。數分間默つてゐたコロンバは興奮して、二發の高い音は弱い二發よりは先きであつたか後であつたかと訊いた。然し、大佐も令孃も案内人もその肝心な點には少しの注意も拂つてゐなかつた。

一時頃になつても、出懸けた使ひが歸つて來なかつたから、コロンバは元氣を搾り出して兎も角もお客を食卓へ着かせた。だが、大佐を除いては誰も食べたがらなかつた。

家の外で少しの音がしてもコロンバは窓際へ走つたが、そこから悄然として歸つて來て椅子に着いた。それから更に痛ましいことには、努めてお客を會話に引き込んでみたのだが、悉く無駄に終つて何人も殆んど注意しなかつたし、永い沈默に歸るばかりであつた。

突然彼等は馬の蹄音を聞きつけた。

「あゝ！　今度こそは阿兄樣！」とコロンバは椅子から立ち上つて叫んだ。然しオルソの馬に跨がるチリナを一目見ると、彼女は叫んだ。

「阿兄様が死んだ！」

大佐は盃を落した、ネヴィル孃は叫び聲を發した。一同戸口へ駈けつけた。チリナが馬から下りるのを待つ間もなく、コロンバは羽毛の如くこの小娘を輕々と抱へて息が塞る位にまで抱き緊めた。チリナはコロンバの恐ろしい形相を見てとると、小さな口を出た最初の言葉は、ロシニの歌劇オセロの合唱の言葉「生きてゐる！　生きてゐる！」であつた。

コロンバは彼女を抱き緊めるのを止めて小猫の如く地面へ下してやつた。

「そして相手は？」と、コロンバは聲を嗄らして訊いた。

チリナが十字を切るとコロンバの兩頰の蒼白さが忽ち熱した輝きに變つた。眼を光らせて、彼女はバリチニ家を暫らく睨み付けたが、やがて微笑を湛へてお客に言つた。

「入つて珈琲を頂きませう。」

この無頼漢の小天使は澤山話を持つてゐた。彼女の方言は殘らずコロンバに依りて伊太利語に飜譯せられ、ネヴィル孃に依つて再び英語に飜譯せられた。大佐はそれを聞きながら幾度も呪ひの言葉を放つた。また令孃からは幾度も嘆息の聲が放たれた。然しコロンバは少しの感情の搖ぎも見せないで聞いてゐた。尤も彼女の指の間の布巾は捻ぢ切れてぼろ〳〵になつてはゐた。五六回も少女の話を遮ぎつて、ブランドラチオが、オルソの傷は危險でない、もつと深傷を幾度も見たことがあると話したのを、念を入れて再三繰り返させた。一通りの話が濟むと、チリナはも一度、オルソが熱心に手紙を

書きたがつてゐること〻、妹に託して家に滯在中の令孃に自分から手紙が行くまでは村を去らないで下さいと賴むやうにと言つて、更に、

「それが一番心配なのですつて。私がもう出懸けてゐたのをわざ〳〵呼び戻してその言傳は特に氣をつけて忘れてはいけないと三邊も繰り返して仰しやいました。」

兄からの言傳を聞き終ると、コロンバはにこりとして令孃の手を抑へた。孃は涙に暮れてゐたが、その話だけは父に飜譯しないのが得策だと思つた。

コロンバはリディアに接吻しながら叫んだ。

「さうですとも。私の處に御滯在下すつて私達を助けて下さいませ、ねえ。」

彼女は押入から古いリネンを取り出して繃帶にするために切り始めた。彼女の輝く眼と艶々した頰と、心も空ろの瞬間から、急に忙しさへと打つて變つたのを見た人は、兄の負傷に驚いてゐるのか、敵の死を喜んでゐるのか、どちらがどうとも言ひ得なかつた。彼女は先づ大佐に珈琲を出して、その手並が上手だと自分で冗戯けながら自慢をした。それからリディアやチリナに仕事を渡して繃帶を作らへさせたりそれを卷かせたりした。それから彼女はオルソの傷は大した苦痛ではなからうかと二十回目の質問をして仕事の手を置きながら大佐に言つた。

「あんな二人の狡猾な奴！　恐ろしい奴！　だのに兄様は全く一人で、怪我、片腕だけ——二人の奴をまんまと射ち止めた！　何と言ふ勇氣でせう、ねえ、大佐。兄様こそ眞の英雄ですね？　あゝ！

ネヴィルさん、お國のやうに平和な國でお暮しになるとは幸福ねえ！　ですけれど貴嬢はまだうちの阿兄様をほんたうに御存じではないのよ。曾て私は兄に申ました、『鷹は翼を擴げなん！』と、貴嬢は兄の優しい姿を御存じですけれど、それは兄は貴嬢のために裝つてゐた一面なのです！　あゝ！　今貴嬢が兄のためにお働きになつてゐるのを兄に一目見せてやりたい！　可哀想なオルソ。」

リディア嬢は殆んど働かなく一言も話さなかつた。父の大佐は何故早く檢事に告訴しないのかと訊き、また檢屍官の取り調べやその他コルシカ人には全く知られてゐない取り調べのことを話した。遂に大佐は負傷せるオルソに先づ手當をした親切なるブランドラチオ氏の山の住宅はピエトラネラからどの位距離があるか、氏を訪問するわけにはゆかないのかなどと訊いた。

コロンバはこれに對して例の如く落ち着いて、オルソは一人の無頼漢に看護せられながら藪の中に隱れてゐることゝ、オルソが知事やその他の官憲の意向を確かめない間に身を現すことがあつては、非常な危險を冒すことになるのだと言つて、他に二人とはない或る優秀なる外科醫がオルソを診察する筈になつてゐますから、心配しなくてもよいのですと言ひ加へた。

「特にね、大佐。」と、彼女は言つて、

「銃聲を四發貴方がお聞きになつたことを覺えてゐて下さい、また確かに貴方はオルソの方が後れて射つたと仰しやいましたわねえ。」

大佐は少しもコロンバが力を入れて言ふこの點の意味を理解してゐなかつた。嬢は溜息をついたり

涙を拭いたりしてゐるばかりであつた。

その日も暮れかけんとした時、濕めつぽい行列が村を過ぎた。舊家たるバリチニ家へ二人の息子の亡き骸を一人づつ農夫が附いて運ぶのであつた。一群の郎黨や閑人の浮浪者が、その列に附いて行つた。中に、こんな時にはいつも遲れて馳せ參ずる憲兵連や、頭の上へ兩手を延ばして「知事は何と仰しやるであらう！」と幾度も幾度も繰り返して言ふ村長代理があた。或る婦人達、その中の一人はオルランデュチヨ乳母だつた、は頭髪を搔きむしつて荒々しい泣き聲を揚げてゐた。然し斯樣な騷がしい悲しみは傍觀者にとりては、眼を見据ゑて絕望の沈默に耽ける一個の人物よりは深い印象を與へなかつた。

この人物こそは不幸な父親であつたが、彼は一つの死體から次ぎの死體へと歩いて、埃で汚れた頭を持ち上げて紫色の脣に接吻をし、既に硬直した足を取り上げたりして、路が惡いので、がたがたと振動するのを防いでやるやうな樣子をした。時々彼は何か言ひたげに口をぽかんと開けてはみたが、泣き聲もたてないし一言も口を利かなかつた。眼は死體を見据ゑ、凸凹の石につまづき、立ち樹に突き當り、總て路を遮ぎるどんなものにでも衝突した。

婦人達の嘆きや男達の呪ひの聲はオルソの家が見えて來るに從つて倍加した。デラ・レビアの羊飼共の二三人は無鐵砲にも戰鬪を揚げたので、敵の怒りは墜へ切れなくなつた。

「復讐だ！　復讐だ！」と數人が叫んだ。忽ち小石が飛び二發の彈丸がコロンバやお客がゐた部屋の

窓に當つた。その彈丸は窓の戸を射ち拔いたから中の人が仕事をしてゐた卓子へまで木片が飛んだ。リディアは激しい叫び聲を發したし、大佐は早速鐵砲を手にした。大佐が止める間もなくコロンバは立關へ突進して戸を開け放つた。階段の上に突つ立つて、敵を呪ふために、兩手を擴げて、彼女は叫んだ。

「卑怯者！　お前達は婦人に發砲した！　家の門の中にゐる外國人に！　お前達はコルシカ人か？　お前達は男子か？　けちんぼ！　後からでなければ人を刺すことは出來ないんだ！　さあ來い、私が挑戰する！　私は一人だ。兄さんは出てゐる。私を殺せ、私のお客を殺せ、それがお前達相當のことだ。出來まい。卑怯者奴。私達は復讐をしただけだ。去れ——女のやうに泣け。それからお前達からもつと澤山の血を要求しなかつた私達を有難いと思ひやがれ！」

コロンバの聲と態度には何か雄々しさと同時に恐ろしさがあつた。彼女を見ると群衆は恐れて尻込みをした。それはコルシカの冬の夜話に出て來る澤山の恐ろしい話を持つ性惡の魔女の一人を見た時のやうな樣子であつた。村長代理と警官と數人の婦人が群衆の萎むのを利用してこの對戰の中へ割つて入つた。それはデラ・レビア孃や他の者が武器を手にし今にも自由戰の火蓋を切るかと思はれたからであつた。然し兩軍はそれ〴〵首領を持たなかつたし、どんなに怒り狂つてゐる場合でも、コルシカ人なるものは日頃の訓練から、指揮者なしでは滅多に島人間の戰を引き起さないのであつたからだ。且つコロンバはこの場の成功で注意深くなつて來たから、巧みに手勢をまとめることが出來た。

「可哀想な奴等は泣かせて置けばいゝ。」と彼女は言つて、

「あのお爺さんには自分の肉から出た肉を持つて歸すがいゝ。人に嚙み付く齒も無いやうなあんな古狐を殺したつて何の役に立つものか？　ギュディチェ・バリチニ！　八月二日を憶えてゐるかい？　お前が僞筆した血に染まつた手帖を憶えてゐるかい？　阿父樣はそれへお前の借金をお書きになつたのだ。お前の息子がそれを支拂つたんだ。受取りをやらう、老いぼれバリチニ！」

コロンバは腕を組んで輕蔑の微笑を脣に漂はせて、亡き骸が敵の家に運ばれ、群衆が消へ去るまで見てゐた。それから戸を閉ぢて、食堂へ歸つて來て大佐に言つた。

「お許しを願はねばなりません、私の島の人達を、ねえ大佐。私だつて外國人の居る家へコルシカ人が發砲するとは思ひませんでした。私の國がお恥しく思はれます。」

その夜、リディアが部屋へ入ると大佐がその後を追つて行つて、二人は何時、頭へ彈丸が飛んで來るか解らぬやうな危險な村や、殺傷だとか詐僞行爲などが日常の出來事となつてゐる島から、一刻も速く逃げ出す方が良くはないかと訊いた。

ネヴィル孃は容易に返事をしなかつた。だから、父の申し出は彼女に餘り氣持の良いものではなかつたことが明かとなつた。遂に彼女は言つた。

「どうしてまあ、あの不幸な令孃が一等慰めを必要として居られるこの際、お一人だけに置き去りが出來ませう？　そんなことをしては私達は餘りに殘酷では無いでせうか？」

大佐は答へた。

「私はお前さんのためを思つて言つて見ただけなんだよ、ねえ。だから、アジェッチオのホテルへ無事に歸つても、あの勇敢な青年デラ・レビア君と一回の握手もしないで、この地獄のやうな國を去るのは殘念だと言ふ積だつたのですよ。」

「結構ですわ、阿父樣。もう暫らく待つて見ませう。それから、發つ前には私共がこゝの人達に仕て上げることが無くなつたといふことが明かになつてから後にしませう。」

「良い心掛けだ！」と、大佐は娘の額に接吻して、

「お前さんが斯んな風に他人の不幸を輕くするために、身を犧牲にするとは實に嬉しいことだ。では滯在しよう。他人に善いことをして悔いた例はない。」

寢床へ入つても、リディアは頭を擡げて眠らなかつた。時々外から聞える物の音は、今にもこの家へ攻め寄せる敵の行動かと思はれた。だが暫く經つてそんな心配は要らないと知れると、あの哀れな負傷したオルソのことが思ひ出された。恐らく今時分は苦痛を和げて呉れるものとては只一人の無賴漢の好意があるばかりで、冷たい地面の上に横になつてゐることであらう。彼女は苦痛を訴へながら血だらけになつて居るオルソを空想して見たが、不思議なことには、彼女の心の目には、曾て自分から贈られた埃及の指輪に接吻しながら、あの別れた時の彼の姿そのまゝが、却つて幾度も〳〵現はれて來るのであつた。すると、今度は彼の勇ましさが思い出された。彼は自分に一刻も速く會ひたいの

で、身を挺して敵に對つたのだ。そして辛うじて生命を取り止めたのだが、これ等はみんな自分のためだつたのだ……と、彼が腕を射ち拔かれたのも私を防いで呉れたためだつたと思はれた。だから彼の負傷の責は自分にあるとさへも考へられた。然し、彼女は彼をその故を以つてこそ褒めたので、コロンバやブランドラチオが思つてゐる程、二連發の的中を不思議には思つてゐなかつた。それでも、なほ、小說の中に出て來る古今の英雄達は、オルソが身を置いたやうな斯る危險な場合、オルソの如く大膽で、冷靜であつた者は稀であると信じてゐた。

彼女が寢てゐた部屋はコロンバの部屋であつた。祈禱臺の上、聖木の傍の壁の上には、少尉の制服を着たオルソの寫眞が懸けてあつた。彼女はその寫眞を外して暫く見入つてゐたが、遂に自分の寢床の傍に置いて再び元の位置へ還さなかつた。彼女は夜通し眠らなかつた。そして眼を覺した時には陽は既に高かつた。眼を覺すと寢床の傍で彼女の眼が開くのを待つてゐるコロンバが居た。

「ねえ、ネヴィルさん。」と、コロンバが言つて、

「このむさくるしい家でお氣持がお惡かつたでせう？　ちつともお寐れなかつたのでせう？」

「オルソさんから何かお便りがお有りになつて？」と、リディアは起き直りながら訊いた。彼女はオルソの寫眞に氣が付くと急いでそれにハンケチを掛けた。

「えゝ。」と、コロンバは微笑みながら、

「便りがありました。」

そして寫眞を取り上げて、
「これ、似て居ますか。實物の方がきつと好いのねえ。」
「あらまあ！」と、リディアは眞から恥かしがつて、
「私、うかうかとそれを壁から外しましたの。品物を元の場所へ還へさないと言ふ惡い癖がどうしても拔けないの……阿兄樣はいかゞ？」
「大分良いのですつて。ジョカントが今朝四時前に此處へ來て貴孃へ宛てた手紙を私に渡して往きました。オルソは私へ手紙を書いたのではありませんの。宛名はコロンバ方にてとしてはありますが、その下には『N——樣へ』と書いてありました。でも、妹なのですから、兄さんとは妬み合ひなんてしませんわ。ジョカントの話によると、腕の傷は手紙を書く時、大層痛んださうです。ジョカントは達筆ですから、代筆をしようと幾度も言つたさうですが、兄は承知しなかつたのですつて。兄は仰向に寢てブランドラチオが紙を差し延べるとそれへ鉛筆で書いたのです。その間に兄は幾度も起き直らうとすると、一寸動いても腕が恐ろしく痛んださうです。實に悲壯だつたと、ジョカントが申しました。これがその手紙ですわ。」
リディアはその手紙を讀んだ。それは疑もなく過度の注意を拂つて英語で書いてあつた。

「ネヴィル孃——呪はしい運命に私は追ひ詰められました。敵共が何と言はうと、どんな

惡事を企まうと、貴孃が彼等を御信用下さらぬ限りは私は苦には致しません。初めてお目に掛つた時以來私は笑ふべき考へに囚はれながら、斯んな大詰にて愚かしやかな自分をお目に懸けることゝなりました。今私は正氣になりました。私は目前のことを知りその成り行きに任せる氣でゐます。私は私を幸福に導く護符とまで思つたことのある、貴孃の賜物たるこの指輪を身に附けて置くに忍びなくなりました。ネヴィル孃よ、あなたはそれに値しない者に賜はりしことは、貴女が定めし怨めしく思召すならんと私は恐れてゐます。寧ろ私の愚かしき時代の天國に遊びたる思ひ出を、これ有るがために恐ろしく存じます。コロンバより貴孃へお返し致させます。

さらば、ネヴィル孃よ。コルシカを去り給はん日も近きことゝ存じます。最早お目には懸れません。たゞ妹には私が今も貴孃の好意をお受けするに値するものだとお話し下さい。而もそのことだけは誠心誠意私が申し上げんとするところ、また常に私はそれに値してゐるものです。

O・D・R、」

リディアは手紙を讀んで終ふと此方を向いたから、それまで氣を注けてリディアを見てゐたコロンバは、埃及の指輪を渡しながら、眼でその意味を訊いた。リディアは眼を揚げる元氣も無かつたが、

哀しげにその指輪を眺めて、指に嵌めて、直ぐにまた外した。
「ねえ、ネヴィルさん、兄は何と申して來ましたの？」と、訊いて、
「兄の具合はどんなだと言つてゐます？」
リディアは答へながら顔を赧くして、
「阿兄様はねえ……傷のことばかりお書きになつてゐます。お手紙は英語で書いてあつて、私の父に、知事が事件を都合よく解決して呉れる見込みがあると、話して呉れとありました。」
コロンバは、皮肉な微笑を浮べながら、リディアの手を執つて彼女の顔を繁々と見て言つた。
「貴嬢は御親切なお方ですわねえ？　兄へ返事をお出しになりたいのでせう？　さうしたら兄はどんなにか喜んだでせうに！　この手紙が來た時、私は直ぐにもお起ししようかと思ひましたが、控へましたの。」
「起して下さらなくつて貴嬢は本當にいけないわ。若し私から一行でも……」
「今となつては兄へは文通が出來ません。知事が來ましたから、ピエトラネラはその配下で一杯になつてゐます。ですけど何とか仕様があるでせう。あゝ！　ネヴィルさん、貴嬢が兄をよく知つて下さりさへすれば、私と同じく兄を愛して下さるやうになります。兄は非常に善良で非常に勇敢です。兄が爲たことを一寸考へてみて下さい、獨力で二人の敵を倒して自分は傷を受けただけですわ！」
知事は村へ歸つて來た。村長代理が大急ぎで彼に送つた報告書に接すると、彼は、憲兵や兵卒また

檢事、裁判書記等を引き連れてピエトラネラへ來て、この新らしい怖ろしき大詰――それは新らしき紛擾を加へたと言ふよりは、むしろ兩家の復讐騒ぎに一段落を着けたこの事件――を調査するためであつた。
彼は村へ着くと直ぐネヴィル嬢と大佐に會つたが、底を破つて打ち開け話をし、事件はデラ・レビア家へ不利な展開を見せはせぬかと心配してゐると話した。
「御承知の通り。」と、彼は言つて、
「この戰ひには立會人と言ふ者がありません。それに不幸な若い兄弟は鐵砲にかけての熟練と勇氣の評判は響いてゐたのですから、デラ・レビア氏が今自分を匿まつて呉れてゐる無賴漢の手助けなしに獨力で二人を殺したとは誰一人信じないのです。」
「そんなことはあり得ない！」と大佐は叫んだ。
「オルソ・デラ・レビア氏は名譽心を持つて居ます。私は何時でもそのことなら誓ひます。」
「それは私も信じてゐます。」と、知事は答へて、
「ですけど、檢事は――兎角裁判官と言ふ者は疑ひ深いものですが――信じません。で、どうも不利らしいですな。檢事の方では寧ろ都合の惡い反證を摑んでゐます。それはデラ・レビアさんが、オルランデュチョに宛てられた脅迫狀の形式の手紙ですが、文意に決鬪を強要して居られるのでして、その決鬪は檢事には欺し討ちのやうに解せられてゐます。」

「そのオルランデュチヨと言ふ男は。」と、大佐は言つて、
「紳士的な決鬪を拒絶したのですよ。」
「この島では決鬪は流行してゐません。こゝでは待ち伏せて背後から突くか射つかです。たゞ一つデラ・レビアさんに有利な證據があります。少女の證言なのですが、その娘は四發の銃聲を聞いたと言つて、後の二發は前の二發よりは音が一層高かつたと言ふのですが、それはデラ・レビアさんの銃砲のやうな口徑の大きな方から發する音なのです。ところがまた都合の惡いことにはこの娘はこの事件にデラ・レビアさんの助勢をしたと言ふ嫌疑を受けてゐる無賴漢の一人の姪ですから、その證言を敎へ込まれてゐやしないかと言ふ疑がありますのです。」
「知事さん。」と、リディアは目のところまで眞赧になりながら、初めて口を挿んだ。
「私共はその鐵砲が鳴つた時此方へ來る途中に居ましたから、今の子供と同じく銃聲を確かに聞きました。」
「えッ？　貴方方もお聞きになつた？　それは非常に大切なことです。そして、大佐もまた疑もなくその時同じ御觀察を得られたのでせう？」
「はあ！」と、リディアは素早く話を續けた。
「父は鐵砲のことでしたらそれは明るうございます。その時に申しました『デラ・レビア中尉は私が進呈した鐵砲で射つてゐる』と……ね。」

「では貴方のお持ち馴れになつてゐた方の鐵砲の二發は遲れて聞えたのですか？」
「え、、絶對に後でしたわ——ねえ阿父樣。」
大佐は、明瞭とは記憶してゐなかつたのだが、何時も娘の意見に逆らはないやうに注意してゐた。
「それなら直ぐにそのことを檢事に話さねばなりません。兎も角も今晩外科醫が來ることになつてゐますから、檢屍の結果、傷が果して噂通り口徑の太い鐵砲でやられてゐるか、どうかの報告が得られるでせう。」
「その鐵砲はオルソ君に贈物としたのですが。」と、大佐は言つて、
「海の底へでも沈めて置けばよかつた……否や、つまり、斯う言ふ意味です……私はあの勇敢な中尉が良い案梅にあれを身に着けてゐて呉れて有難いと思つて居ると言ふことなんです。若しあれでも無かつた時は、中尉はとてもあの難局を切り拔けられなかつただらうと思ひますよ。」

十九

外科醫の來るのが少し遲れた。彼は途中内密に或る冒險をしなければならなかつた。それはジョカント・カストリコニ坊んさんに會つたからだ。ジョカントはその時禮を厚くして、先生のお手竝みを一人の負傷者に施して戴きたいと述べて、先きに立つて案内した。彼はオルソの處へ連れて往かれ、傷の手當をさせられたのだ。

坊んさんはかなりの途を見送つて來たが、その道すがらピサ大學の有名なる教授連は、自分の親友であると言つて、夫々の噂をして大いに外科醫を啓發した。

「先生。」と訣れ際に坊んさんは言つた。

「先生が、お醫者さんと言ふ者は懺悔を聞く聖者の如く、分別の必要なものだと憶えてゐて下さつたら、私は先生を素的に尊敬致します。」と、婉曲に威嚇の意を含めて、鐵砲の引金をカヂカヂと鳴らしながら、

「ですから先生は吾々が先生をお迎へしたあの場所のことはお忘れになりましたね。さよなら。お會ひが出來て眞に喜んでゐます。」

コロンバは大佐に屍體の檢視及び解剖に立會ひしてもらうやうに賴んだ。彼女は言つた。

「御存知のやうに兄の鐵砲はどれよりも優れてゐたのですから、貴方の御臨席は一番有效ですね。それに村には性の惡い人が多いのですから、私共の利益になる方面を見てゐて下さる人が、一人も無ければ非常に危險です。」

リディアと二人だけ殘つてゐると、コロンバは非常に頭痛がするとこぼして村から少し離れたところへ散歩がしたいと言つた。

「郊外の空氣が利くでせう。隨分久しく風に當りませんもの。」

歩きながらコロンバは兄の噂をした。リディアはそれに釣り込まれてピエトラネラからかなり遠くまで行つても道のことには何の氣も付かなかつた。陽が沒しかけて來たので彼女は初めて氣が付いてコロンバに歸らうと言つた。

コロンバは近道を知つてゐるから直ぐに歸ることが出來ると言つた。彼女は今まで歩いた道を換へて別の道へ進んだが、それはほとんど人が通つた跡の無い道であつた。間もなく彼女は岡の側面を登つたが、それは非常に嶮しかつたから木の枝を片手で握つて、片手では後から來るリディアを引き上げねばならなかつた。

十五分ばかりも骨を折つて登つた後、彼女等は小さな平原へ出た。そこには天人花やその他の灌木が大きな園の中に生えてゐた。

リディアは非常に疲れた。村らしいところは少しも見えなくて、もうほとんど日が暮れてゐた。

「コロンバさん。」と彼女は言つて

「道を間違つたのではないでせうか？」

コロンバは答へた。

「御心配には及びません、ずん〳〵往きませう、追いていらつしやい。」

「きつと貴孃は道を間違へていらつしやるのです。その先きには村はありやしません、確かに村は後の方ですよ。ほら、あそこがきつとピエトラネラですよ、そら遙かに村の灯が見えますわ。」

「さうなのです。」とコロンバは心配氣に言つて、「貴嬢の仰しやる通りです。ですけどこゝからは二丁もあります……あの藪の中には……」

「えゝッ。」

「兄が居るのです。貴嬢が私と一緒に來て下されば、私は兄に會へますし、兄に接吻が出來ます。」

リディアは吃驚したが、コロンバは話し續けた。

「私ね、貴嬢と御一緒でしたからピエトラネラから出る時は誰にも氣付かれませんでした。でなければ私はきつと尾けられたのでした。折角斯うして兄の傍まで來ながら、兄に會はないなんて！　貴嬢は何故私の哀れな兄に會ひに私を連れて行つては下さらないの？　若し貴嬢が私を連れて行つて下さつたら兄は非常に喜びますわ。」

「ですけれど、コロンバさん、そんなことをしては道理に外れますわ。」

「おゝ！　その通りです、判りました。都會の淑女達は道理の外は何もお考へにならない。然し村に住んでゐる者は道理のことばかりは考へてゐやしません。」

「それにこんなに遲くもあるし！　阿兄樣は私をどうお思ひになるでせう？」

「兄は自分の友人からまんざら見捨てられては居ないと思ふでせうし、また苦痛にたへる勇氣を兄に與へることになるでせう。」

「それから私には父があります。父は私のことを非常に心配するでせう。」

「大佐は貴嬢と私が一緒に出たことを御存じです。さあ、御決心なさい。今朝貴嬢は兄の寫眞を眺めていらつしやいました。」と、コロンバは皮肉に笑つた。

「いけませんわ。コロンバさん、私行けませんわ。阿兄樣と御一緒に無賴漢の人が……」

「それは構ひません！　あの人達は貴嬢を存じてゐません。それに、先日は、貴嬢は無賴漢を見たいと仰しやつたではありませんか？」

「あら、まあ！」

「さあ、ネビィルさん、早くお決めなさいよ。貴嬢だけこゝへ措いては行けません。どんなことになるか判りませんから、ねえ。オルソに會ひに行ませうよ、それから、村へ歸りませう。兄に會ひませう、何時會へるやら、また會へないものやら判りませんのですから。」

「それはどう言ふことですの、コロンバさん。では、ようございます、阿兄樣に會ひに行きませう。だけど、ほんの一寸だけ。そして直ぐに歸ることにしませう。」

コロンバはリディアの手を握つた。そして返事もしないで、リディアには蹤を追ひかけられないような速足で歩き出した。幸にしてコロンバは直ぐ立ち止つて言つた。

「あの人達に知らさないではもうこの上は進めません、射たれるかも知れませんから。」

コロンバは指を口に入れて口笛を吹いた。すると間もなく一匹の犬の吠え聲が聞えた。無賴漢の前進歩哨たるブルスコが飛んで來た。この舊知はコロンバを見知つてゐて、彼女の案内人として活動し

た。澤山の廻りくねつた藪の中の峽い道を進んだ後、全身武裝せる二人の怪漢が彼女等に合ふために現はれて來た。

「お前さんはブランドラチオねえ？　兄さんは何處に居るの？」と、コロンバが訊いた。

無賴漢は答へた。

「あそこの下ですよ。だが靜かに願ひますぜ。あの事件があつてから初めて眠つたのです。成る程讀めた！　惡魔が通る途なら女にも通れることが解つて來たわい！」

二人の婦人は用心しながら進んで行つた。二、三分進むと焚火の傍の齒朶を堆んだ上に一枚の外套をかけて寢ころんでゐるオルソを見た。焚火の焰は、深く考へて集められたる小石の衝立の小さな壁で遮られてゐた。

オルソは色蒼ざめ呼吸も苦しげであつた。コロンバはその傍に坐つて默つて見てゐた。手を組んで祈つてゐたやうである。リディアは顏をハンケチに隱してコロンバに寄り添つて彼女の肩越しにそこの負傷者を時々眺めた。十五分間も一言の言葉も無くて濟んだ。坊んさんの合圖を聞いてブランドラチオと坊んさんとは森の中に隱れた。リディアはそれで安心した。コルシカの無賴漢を生れて初めて見た彼女は彼の大きな顎鬚や獰猛なる美裝は餘りに地方色に富み過ぎてゐると思つた！

遂にオルソは眼を覺した。直ちにコロンバは身を寄せて幾度も接吻をし、傷のことやその苦痛を種種と訊ね、何か自分に用事はないかと訊ねた。オルソは豫期してゐただけのことであると言つて、ネ

ヴィル孃は今でもピエトラネラに居るのか、自分に手紙を寄來すのだらうかと訊いた。

コロンバがオルソに凭れてゐたからリディアが完全に隱されてゐた。またこの暗闇では彼女を認めることは出來ないことでもあつた。コロンバは片手でリディアの手を握つて、片手では輕くオルソの頸を凭げてゐた。

「いゝえ、阿兄樣。リディアさんは私に貴方の手紙をお渡しになりませんでした。ですけど阿兄樣は何時でもリディアさんのことは考へていらつしやるわねえ？　阿兄樣は大層あのお方を愛していらつしやるわねえ。」

「愛してゐるとも！　コロンバ。だがあの人の方では私を今は輕蔑してゐる！」

その瞬間リディアはコロンバの手から自分の手を引かうとして見たが、それは出來なかつた。コロンバの手は小さくて美しかつたが、既に讀者の御存知の通りとても强かつた。

「阿兄樣が何をなさつたからと言つてあの方が輕蔑なさるのでせう！」と、コロンバは叫んだ。

「反對にあの方は貴方のことを親切に話していらつしやいます。あゝ！　オルソ！　あの方に就いては隨分お話はあつてよ。」

リディアはそれでも尙、コロンバから手を弛めさせようとしてゐたがコロンバの方ではリディアを却つてオルソに近寄せようとした。

「だが結局。」と、オルソは言つて、

「何故返事を下さらんのだ？　たつた一行でも私は滿足なのだ。」
リディアの手を引き寄せて、コロンバは遂に兄の手の中へその手を入れて、それから高く笑つて兄から遠ざかりながら叫んだ。
「オルソ・ネヴィルさんのことは何も惡口を言つてはいけませんよ、嬢は人並み外れてコルシカ語がお解りですから！」
リディアは直ぐ手を引いて、何か解らぬ言葉を二言三言吃りながら言つた。
オルソは夢に違ひないと思つた。
「貴嬢がまあ、ネヴィルさん！　どうしてまあ！　どうして貴嬢は思ひ切つてこんな處へ來られたのでせう？　あゝ！　ほんとに私を幸福にして下さいます！」と、言つて彼は辛うじて體軀を擡げて彼女に近寄らうとした。
「お妹さんと一緒に來ましたの。」と、リディアは言つて、
「ですから人には誰にも氣付かれませんでした。それから私も願つてゐたのです……確かに私として……ですけれど、どんなにか貴方はこんな處でお氣持ち惡くいらつしやるでせうね！」
コロンバはオルソの蔭に坐つてゐた。彼女は非常に注意深く兄の頭を膝の上へ置いてゐた。次ぎに彼女は自分の腕を兄の頭の周りに捲いて、リディアへもつと近くへ來るやうに會釋した。
「もつと近く、もつと！」と、彼女は言つた。

「病人と言ふものは聲を立てゝはなりません。」
そこで、リディアが猶もぢ〳〵してゐるのを見ると、手を執つて引き寄せ、リディアの着物の裾がオルソに觸れ、その時までコロンバが持つてゐた彼女の手はオルソの肩の上に置かれた。
「阿兄樣はさうしていらつしやるのは丁度いゝのです。」と、コロンバは嬉しげに言つて、
「ねえ、オルソ、焚火の傍で愉快ねえ、森の中で然もこんな美しい夜に、ねえ？」
「おゝ！　さうだ！　美しい夜だねえ！　忘れられないよ！」
「さぞお苦しくていらつしやるでせうねえ！」と、リディアが言つた。
「もう、ちつとも苦しくはありませんよ。私は一層このまゝ死んでしまひたい。」と言ひながら、オルソはコロンバがその時も猶しつかりと握つてゐたりリディアの手に觸れた。
リディアは言つた。
「デラ・レビアさん、貴方はもつと看護の屆くやうなどこかへほんたうに連れて行かれなければなりません。私こんな露天で、あなたがお氣持ち惡くお休みになつてゐるのを見たからは、今後はとても眠ることは出來ませんわ。」
「私が貴嬢にお會ひするのを恐れてゐなかつたら、ねえ、ネヴィルさん、私はピエトラネラへ歸つたのですよ。そして自首して出たのです。」
「おや、なぜネヴィルさんにお會ひするのを恐れていらしたの？」と、コロンバが訊いた。

「ネヴィルさん、私は貴嬢の仰せに從ひませんでした。だからこのところ貴嬢にはとてもお會ひする氣になれなかつたのです。」

「ネヴィルさん、私の兄のことに關して、今、貴嬢は何をなさつて下すつたらいゝのかおわかりでせう？」と、コロンバは笑ひながら言つて、

「兄にお會ひになつてるのを、私はお止めしますよ。」

「私ねえ。」と、ネヴィル嬢は言つて、

「この不幸な事件が一掃せられるのを望んでゐましたの。ですから、直ぐに何も御心配なさることはなくなりますわ。私コルシカを出るまでに正義が貴方の上に行はれて、貴方の高尚な名譽心や個人としての勇氣と言つたものが、島の官憲に依つて承認せられるのを見ることが出來たら、さぞ幸福だと思つてゐます。」

「貴嬢、コルシカをお立ちになるのですか、ネヴィルさん！　一寸そのことだけは仰しやらないで下さい！」

「でも止むを得ないのですもの。父はさう何時も狩獵ばかりしてはゐられませんし、しきりに歸りたがりますから。」

オルソはリディアに觸れてゐた自分の手を引いた。そして暫らくみなは沈默した。

「まあ！」と、コロンバが言つた。

「私達はそんなに大急ぎで貴嬢方を發たせやしません。ピエトラネラにはまだお目にかけるものがどつさりあるのです、それに、貴嬢は私に繪を描いて下さるとお約束をなさいました。それからまた、私は貴嬢に七十五聯の詩を書くと言ふ約束をしました。それからまた……おや、犬のブルスコは何のために唸つてゐるのだらう？　あらブランドラチオが犬の後を追つてゐる。何かあつたのかしら。」

彼女は直ちに起ち上つて、オルソの頭をリディアの膝の中に置き換へて、少しも音を立てないやうに無賴漢の方へ走つて行つた。

リディアは一人の美しい青年と、森の中に一人だけ殘されたのを知ると聊か驚いた。彼の頭は彼の膝の中に在つた。リディアはどうしていゝか全く途方に暮れた。若しも彼女が、だしぬけに身を引くやうなことがあつたら、彼に怪我をさすことになるであらう。

だけれど、オルソは折角妹が殘して呉れたこの氣持のいゝ枕から御免を蒙つた。右の腕で體軀を擡げながら彼は言つた。

「ねえリディアさん、直ぐにお發ちになるのですか？　私はこの不愉快な島に貴嬢方の滯在を長びかせようとは少しも思つてはゐませんでした。それだのに、今夜こゝへお訪ね下さつてからは、どうしたのかお別れするのがお會ひする以前よりは百倍も苦しくなりました。私は貧しい中尉です。前途に何の望みも持たないし、おまけに今のところ咎人です。私が貴嬢に戀をしてゐるなどと申上るのに今は一番不適當な時です。でも猶今は與へられた唯一の機會のやうにも思はれます。妙ですなあ、こん

なことをお話しただけで今は私の心が餘程幸福になつて來たやうです。」
リディアは顏を反けた。恰も暗だけでは彼女の羞恥を隱し切れないのかの如く！
彼女の聲は斯う言つた時慄へてゐた。
「デラ・レビアさん、こんな場所へ私が參りましたのも……」と、埃及の指輪を彼の手に渡しながら、努めて特質の快活な態度を取り返して言つた。
「そんなことを仰しやつては、オルソさんいけませんわ。こんな森の中で無賴漢にとり圍まれてゐて貴方を怒らうとしたつて怒れやしないぢやないの。」
オルソは指輪を返して呉れた彼女の手を執つて接吻しようとしてにぢり寄つた時、丁度リディアが早めにその手を引いたので、體軀の平均を失つて傷のある腕の上へ倒れた。彼は苦痛の呻きを發せざるを得なかつた。
「おゝ！　オルソさん、お怪我をなすつたの。」と、彼の體軀を抱へながらリディアは叫んだ。
「御免遊ばせ！　私が惡うございました。」
二人は寄りそつて、暫く靜かに話し續けた。
するとコロンバは突然走つて來た。彼女が去つた時と同じ狀態に二人がゐたのが彼女に見えた。
「兵隊が尾けて來たのです！」と、彼女は叫んで、
「オルソ、起つて歩いて下さい。私が手傳ひますから。」

「私はこのまゝにして置いて呉れ。」と、オルソは答へて、
「連中には逃げるやうに言つて呉れ。捕へられても私は少しも苦にはしない、だがお前は、リディア嬢をお連れ申せ。あゝ！　甘く逃げて下さればいゝが！」
「見殺しは出來ねえ。」と、ブランドラチオが言つた。彼はコロンバの後を尾けて來た。
「指揮をとつてる軍曹はバリチニ辯護士の名附け子ですから、貴方を拘引するより前に殺してしまひます。そして故意に殺したのぢやない、正當防衛だつたと言ひ拔けます！」
オルソは努めて起ち上つた。そして一二間は歩いても見たが、直ぐに立ち止つて言つた。
「歩かれない。お前さん達は皆逃げてくれ。さらば、ネヴィル嬢よ！　手を借して下さい、そして、お別れ！」
二人の婦人はとても置いてきぼりには出來ないと言つた。ブランドラチオは、
「歩けないなら私が引つ擔ぎますよ。さあ、中尉殿、もつと元氣を出して、裏の谷まで行けば逃げる暇があるですよ。その間は坊んさんが敵を喰ひ止めて呉れますよ。」
「駄目だ！」と、オルソはまたも地上に倒れて言つた。
「このまゝにして置いて呉れ。だが、コロンバ、ネヴィルさんだけはどうか連れて逃げてくれ。」
「貴嬢は力が強い、コロンバ嬢。」と、ブランドラチオが言つて、
「中尉の肩を摑んで下さい、私は足を持ちますから。それ、さう〳〵——さあ、進め！」

「オルソの反對には頓着なく速力を早めて運ぶのであつた。リディアは非常に恐れながら、その後を追つてゐると、鐵砲が一發鳴つて引續き五六發聞えて來た。

鐵砲の音を聞くと、リディアは悲鳴を揚げた。ブランドラチオは呪ひの聲を放ちながら、更に速力を早めて進んだ。コロンバは森の中を駈け拔ける時木の枝で顏を引つ搔かれ着物を破られたのだがそれに氣づかなかつた。

「屈むのですよ！　屈むのですよ！」と、彼女はリディアに幾度も言つた。

「さうしないと當りますよ。」

四五町ばかりこんな風にして歩いたり走つたりした時、ブランドラチオはもう歩けなくなつたと言つて地に蹲まつた。彼は疲れてコロンバの願ひや叱咤の聲に耳を傾けなくなつた。

「ネヴィルさんは何處？」と、オルソが聞いた。

鐵砲の音に脅かされたリディアは、兎角森の草叢に立ち止りがちであつたので、先きの方へ急ぐ友達にはぐれて今では唯一人、例へやうもない恐怖に襲はれて縮んでゐた。

ブランドラチオはオルソに答へた。

「後の方だが、あの婦人は殺されはしない――婦人が殺されるやうなことはありやしない。まあ聞いて御覽、オルサントン、坊んさんは貴方の鐵砲で素晴しく奮闘してますぜ。都合の惡いことには眼が見えない、暗夜に鐵砲と言ふが、さぞ無駄が多からう。」

「叱ッ！」と、コロンバは言つた。

「馬の音がする――助かつた！」

確かに、藪を拔けてゐた一匹の放れ馬が銃聲に驚いてこちらの方向に走つて來た。

「有難い！」と、ブランドラチオが直ぐ答へた。

その馬を捕へたり、緊髮を捉まへて、口に馬銜代りの綱を嵌めたりすることはコロンバの手助けに依つてブランドラチオが速かに片附けた。

「これは坊んさんに知らさざなるまい！」と、彼は言つた。

彼は二回口笛を吹いた。遠くから口笛が一回答へて來た。するとオルソの口徑の太い鐵砲が鳴らなくなつた。

ブラドラチオは馬に跨がると、その前の方へコロンバはオルソを乘せた。彼は片手でオルソをしつかり捉へて、片手では卽製の手綱を取つてゐた。

馬は二倍の重荷を乘せてゐながら、腹を二回も荒々しく蹴立てられたので、敢然として突進した。

その嶮しい坂を駈け下るのは、コルシカ產だつたから出來たことで、他國の馬なら死ぬるより外はなからうと思はれた。

そこでコロンバは後戻をして、有らん限りの聲を搾つてリディアを呼んだが答はなかつた。暫く路なき路を歩きながら元の路を探さうとしてゐるとバッタリ、二人の兵卒に出會つた。彼等は叫んだ、

「誰だ？」
彼女は冗談らしく、
「あら兵隊さん、立派な喧嘩を演つたのね、何人殺したの？」
一人の兵隊は言つた。
「お前は無頼漢と一緒にゐたんだらう。だから此處で吾々と逢つたのだ。」
「えゝ、さうよ。」と、答へて、
「だがお友達が一人此處邊にゐるの。何は措いても會はなきやならないのよ。」
「お前の友達ならもう捕まつてゐる。まあ今晩は一緒に監獄で泊つたがいゝぜ。」
「監獄で？　さう、行つてもいゝわ。だけど直ぐお友達に會はせて頂戴。」
兵卒共は、一先づ彼女を無頼漢の陣地へ連れて行つた。そこには彼等の遠征の分捕品が集めてあつた。それはオルソの外套、古鍋、水瓶と言つたものであつた。
恐怖のために半死の狀態となつたリディアがそこにゐた。涙を流しながら無頼漢の人數だとか、どの方角に逃げて行つたかと言ふ兵士達の問ひに答へてゐた。コロンバはリディアの腕に身を投げて、囁いた。
「みんな助かりました！」
そして指揮を執つてゐる軍曹に向つて、

「ねえ、軍曹さん、このお孃さんはあんた等の質問にはお答へは出來ないのですよ。だから、ピエトラネラへ私達を返しゝ下さい、心配して私達を待つてゐる人があるんです。」
「それは返すとも。」と、軍曹は答へて、
「取り調べが濟んだら、直ぐにこの時刻に、今逃げ去せた無頼漢共と何をしてゐたか白狀しなければならないんだぜ。あの奴等と來たらどんな符呪をしやがるか知らないが、きつと二三人の女から惚れられてゐる。無頼漢の居るところに別嬪が居ないことはない。」
「あんたは禮儀を知つてるわね、軍曹さん、だが、言ふことは氣を付けなさい。このお孃さんは知事さんの御親類だから餘り輕い口は利かない方がおためですよ。」
「知事の親類！」と、一人の兵士が言つた。
「どうも一目見て眞物の令孃に違ひないと思つた！」
「表面だけで判るもんか。」と軍曹は言つて、
「この二人は坊主のところに居たんだ。あの坊主は島で一等の符呪上手だから私はどうかして彼奴を監獄へ叩き込んでやりたいと考へてゐる。さあ、もうこゝに用はない。本當にあの醉拂ひの伍長トウピンの奴が下手をしなけりあ、網へかゝつた小鳥のやうに奴等を引つ捉まへてゐたんだ。伍長奴私がまだ數を圍り撓まんうちに一人で飛び出やあがつた。」
「お前さん達はみんなで七人ね？」とコロンバが訊いて、

「ねえ、みなさん、若しひよつとして三人兄弟のサロッチとテオドルとポリが、ブランドラチオや坊んさんと辻で出會つたら總勢五人になるから一寸あんた方に面倒ぢやない。ポリに御用があるにしても、こゝで會つてはいけないでせう。闇夜の鐵砲は見さかひは無いからねえ。」

コロンバが名を擧げた腕達者な無賴漢共と會はんとも限らないと考へたか、兵士共は目に見えて怯んで來た。軍曹はトウピン伍長のことを「狗ころ佛蘭西人奴」としきりに惡口を言ひながら、兵卒達に退却の命令を下した。

この小部隊はピエトラネラへ出發した、水瓶は一蹴りで仕末をしたが、外套と鍋とは携へた。一人の兵士はリディアの手を取らうとした。コロンバは直ぐにその兵士を突き退けて、

「このお方に指一本搓すことはならん！　私達が少しだつて逃げるやうな樣子は仕はしまいし。さあ、リディアさん私の腕をお捕まへなさい。子供のやうにお泣きになつてはいけません。心配の多い一晩ではありましたけれど惡いことにはなりはしません。三十分もすれば夕飯が戴けますよ。私は本當に待ち遠しいの。」

「兵隊達は私のことを何と思つてゐるでせう？」とリディアは囁いた。

「道にお迷ひになつたと考へてゐます！　それ位のことですよ。」

「知事は何と言ふでせう、それから特に私の父は？」

「知事には、縣のことで知事の職責をもつとよくお考へなさいとお話しになる方がいゝわ。それから

貴嬢の阿父樣に對しては、貴嬢とオルソがお話しになつたことを想像して見て、貴嬢御自身で、阿父樣にお話しにならなければならないことが出來てゐませう。」

リディアは何とも答へないでコロンバの手を握つた。するとコロンバは囁いた。

「オルソは愛せられるに價してゐます、だから貴嬢は卿か彼を愛していらつしやいますのね？」

「あゝ！　コロンバさん。」とリディアはまごつきながらも、微笑みながら、

「貴嬢は私の祕密をお悟りになりました。でも、私は貴嬢の聰明さには感謝してゐますわ！」

コロンバはリディアの胸を抱いて額に接吻した。そして穩やかに言つた。

「御免なさいねえ。お姉樣。」

「私こそよ。恐いお方。」とリディアは接吻を返しながら答へた。

知事や檢事はピエトラネラの村長代理の家で滯在してゐた。大佐は娘のことを氣使つて、何か便りがなかつたかと二十回目に飛び出すと、その途端に軍曹の派遣した一人の先發隊の兵士が、無賴漢と激戰を交へたと報告して來た。彼の話によると、この戰ひには敵味方一人の死傷者もなかつたが、でも分捕品として、鍋、外套及び無賴漢の情婦か間諜と思はれる婦人が二人、と言ふのであつた。

斯んな先き觸れがあつてから捕虜となつた二人の婦人が武裝せる護衞兵に取り圍まれて到着した。

その場に於けるコロンバの赤い顏、リディアの羞恥を帶びた顏、知事の愕き、大佐の喜びは容易に想像が出來る。

検事は意地悪くリディアを質問攻めにしたので、終ひには彼女は失神せんとした。

知事は言つた。

「この婦人方は釋放するのが至當と存じます。散歩に出懸けられたばかりのことであつて、それはこの好天氣には至つて自然な話です。然るに偶然負傷せる一青年とお會ひになつたのだがこれまた極めて普通のこと、申さねばなりません！」

そして彼はコロンバを脇へ呼んで言つた。

「貴孃は阿兄様には非常に好都合な結着を得たと知らせてお上げになるといゝですな。私が思つたより以上の結果でした。屍體の檢視と大佐の證言とで阿兄様は應戰せられたに過ぎないことゝ、全く獨力で向はれたことが明かになりました。全く申し分なき解決となりますでせう。だが阿兄様は一刻も速く森を出て自首をなさらねばなりません。」

その夜大佐や令孃やコロンバが、もう冷めてゐる晩餐の食卓に付いたのは十一時を過ぎてゐた。

コロンバは知事や檢事や兵隊共を冷かして笑ひながら腹一杯食べた。大佐は確實に食べたのであつたが、お皿から上へは眼を上げない娘を氣にして一言も言はなかつた。

到頭大佐は柔しく、然し、嚴かに英語で言つた。

「リディア、お前さんはデラ・レビアさんと婚約したのだね？」

「はい。」とリディアは眞赧になりながら、而もしつかりした句調で、

「今日のことですわ。」

そして父の顏を見上げて、些の不興氣な樣子がないのを知ると、自分の體軀を父の腕に投げかけて父に接吻した。それは丁度深窓に育つた若き淑女が斯んな場合によくするが如く。

「さう聞くと私も嬉しいよ。」と大佐は言つて、

「立派な人物だからなあ。だがこの野蠻な島では暮せませんよ！　さうするのだつたら不贊成だね。」

「私には英語は解りませんが、」と二人の樣子を非常に珍らしさうに見てゐたコロンバが、

「でも、きつと私はお二人のお話しになつたことを的てられると思ひます。」

「なにね、私共は貴孃を愛蘭土旅行にお連れしようと言つてゐるところです。」

「私嬉しいわ、さうなると、私は『愛らしき妹のコロンバ』ねえ。御承知なさつたのでせう？　大佐。さあ、そのために握手をしませう。」

「斯う言ふ場合にはね。」と大佐は答へて、

「接吻をするのが本式ですよ！」

二十

兄弟慘死事件と報ぜられたる新聞記事はピエトラネラ村民を戰慄せしめたが、それから二ケ月ばかり經つた或る日の午後、左手を繃帶で吊つた一人の青年が馬に乘つてバスチアからカルドの方へと進

んだ。カルドは藥湯で名高い溫泉のある村で、夏期は健康を害したバスチア市民が多數湯治に來た。
脊が高くて、素晴らしく美しい一人の淑女が青年と一緒に居た。彼女は一匹の小さな黑馬に跨つて居た。その馬はどんな博勞でもその逞ましさと美しい恰好とを褒めないでは居られなかつたが、然し具合の惡いことには何か珍らしい出來ごとのために片耳を切られてゐた。
村へ着くとその淑女は先づ馬からひらりと降りて、伴侶の男が降りるのを手傳つた。そして自分の馬の鞍に結び付けてゐた稍々大きな袋を解き外した。二頭の馬は一人の農夫に預けられた。彼女はその袋を長い被衣の下へ隱した。すると二連發銃を携へた青年は嶮しい小徑を傳つて先きになつて進んだが、その小徑と言ふのは何處へ通じてゐるのか解りさうもなかつた。
山の一番高い崖の上に行くと二人は止つて草の上へ坐つた。誰かを待つて居たらしかつた。二人はしきりに山の上の彼方此方を眺めた。女は暫々美しい金時計を見てゐた。それは恐らくは短かい時間の間だけ彼女の持ちものとなつてゐた寶石をでも鑑賞してゐるやうであつたが、二人が心待ちにしてゐる人が來る時刻を知るためであつた。
二人はそんなに長く待つには及ばなかつた。數を出て來た一匹の犬が女からブルスコと名を呼ばれると、急いで走つて彼女にじやれついた。數分の後に深い顎鬚のある、二人の男が現れた。腕に鐵砲を持ち帶に藥莢を着けその脇にピストルを持つてゐた。そのぼろ〳〵の着物は彼等の持つ鐵砲とは不思議な對照をなしてゐた。鐵砲はきら〳〵と陽を受けて一見名工の製品と知られた。

二人の人達は社會的地位は明らかに相違してゐたが、四人とも非常に鄭重なる挨拶をして舊友の如く振舞つた。
「これは、オルサントン。」と二人の無賴漢の年老つた方が若い紳士に言つて、
「事件は片付きましたね——放免の宣告——や、お目出度うございます。いかんながら私はバリチニ辯護士の狂亂を見ませんでした。だが、コルシカには居なくなりました。そして、お腕の傷痕は？」
「二週間すれば繃帶が外せると言ふことだよ。ね、ブランド、明日は伊太利へ行くのだよ。だから、君や坊ンさんにお暇乞ひをしようと思つて、こゝで會はうと思つてお願ひしたのだよ。」
「大急ぎですなあ、昨日は放免、明日は出發ですか？」
「御用が出來たのよ。」と女は笑ひながら、
「みなさんお辨當を持つて來たのですよ、おあがんなさい、ブルスコを忘れないやうにね。」
「ブルスコを甘やかしますな、コロンバさん。然し彼は恩を知つてゐます。一寸御覽なさい。こら、ブルスコ。」と言つて眼の前に鐵砲を搖し出して、
「バリチニさんのために飛べ！」
犬は全く知らぬ顏をして顎を舐めながら主人を見てゐた。
「デラ・レビアさんのために飛べ！」
すると犬は必要よりは二尺も高く飛んだ。

「二人とも聞いてくれ給へ。」とオルソは言つて、
「君達の商賣は餘り柄の良いことではい。バスチアの絞首臺の上で延びないで濟めば、憲兵のドンでけりがつくのがやまだ。」
「さうですとも。」とカストリコニが言つた。
「往生と言ふことになればどのみち同じですよ。熱を出して親類共の大なり小なりの誠意あるお悔みに取り圍まれて、床の中で死ぬのよりはうんと氣が利いてまさあ！　僕等見たいに青天井に馴れてごらんなさい。靴穿きのまゝで――村の人達が何時も穿いてゐるではありませんか――あのまゝ往生が出來るくらゐ結構なことはないと思ふやうになりますよ。」
オルソは言ひ續けた。
「君達は島に見切りを付けて、ほかでもつと安樂な生活をする氣になつてもらひたいね――例へば君達の友人が既に行つてるやうにサルディニアへ出懸けて、あそこで安住出來ないもんだらうか？　それなら容易にお力になれるのだが。」
「サルディニア！」とブランドラチオは叫んだ、
「あのサルディニアの奴等とその訛とは惡魔と驅落しろです！　奴等ときたら言語同斷の下劣さ！」
「サルディニアへ渡る氣にはとてもなれねえ。」と坊んさんは言つて、
「僕は斷然サルディニアの奴等を眞から輕蔑してます。奴等は無賴漢を狩り立てるために乘馬の民兵

を雇ふことにしやがつたが、それは無賴漢を踏みつけにすると同時に奴等の國家を踏みつけてゐる。サルディニアの恥知らず奴！　だが、驚いたねえ！　デラ・レビアさん、貴方は趣味も學問もある上に吾々の藪の生活の味を知つてゐながら、何故それをお行りにならんのです？」
オルソは笑ひながら答へた。
「僕はお仲間になる光榮は持つには持つたが、森の生活の喜びは、どうもあまりぞつとしないね。一晩嬉しかつたことがあるにはあつたが、荷物扱ひで裸馬に引つ括られて、ブランド君の御案内で駈け出した時のことを思ふと今でも手足がぴり〳〵するよ。」
「それで、まんまと逃げ終した時の喜びは勘定に入れないのですか？　吾々のこの理想的地帶に於ける理想的自由の魅力に貴方は無關心ですか？　防禦にこれを持つてれば。」――と坊んさんは鐵砲に觸つてみて、
「眼の届く限りの範圍では帝王ですよ――彈丸の届く範圍はねえ、一人で命令して、一人で襤褸を隱して置くんです。それが唯一の眞の道德で、また眞の快樂ですよ。全く唯我獨尊ですよ、ねえ中尉、ドン・キョオテエがもつといゝ武裝をして、もつと智慧を持つた武士に生れたとなると、どんな生活だつてそれには勝てはしません。こんなことがありました。可愛いリラ・ルイヂの叔父に當る吝嗇漢が彼女に持參金を呉れたがらないと言ふことを先日僕が聞きつけたんです。そこで手紙を書きました――脅迫狀ぢやありません、そんなことは僕は書きません――すると、どうです、吝嗇漢奴、僕の

意見を採用して娘を嫁に遣りました！　だから人二人を幸福にしてやつたんです。
僕の言ふのを聞いて下さい、オルソさん、無賴漢の生活程いゝものはありやしません。はゝあ！英吉利の某嬢がなかつたら、貴女は仲間になつたんですね。嬢は一度だけ私も拜みましたよ。バスチアの町では別嬪だと言つて大した評判ですぜ。」
「私の未來のお姉様は森がお嫌ひですつて、森へ入つた時あんまり吃驚し過ぎたんですつて。」とコロンバは笑ひながら言つた。
「まあいゝよ。」と、オルソは言つて、
「君達はこゝに止まつてゐたいのだね？　なら、さうし給へ。何か君達に行てあげることがあるのなら言つてみて吳れないか。」
「ない。」と、ブランドラチオは言つて、
「時々は私達のことを想ひ出して下されればそれで澤山です。貴方にはうんと御親切にして貰ひましたよ。チリナは持參金を頂戴しましたから、今にお嫁に行く時となつても坊んさんの結構なお手紙を頂戴しなくてもいゝわけです。私達は貴方の百姓達がパンと火藥を一人前はくれることを知つてゐます。ではお別れしませう。その内にもう一度コルシカでお目にかゝりたいですなあ。」
「不作と言ふことがあるが。」とオルソは言つた、
「その時は二三枚の金貨でも役に立つことがあるもんだよ、斯うしてお互は昔馴染なんだから、この

小紋は私から拒んではいけないよ。入ればもつとあるけれど。」
「金は頂きますまい、中尉。」とブランドラチオはきつぱりと言つた。
「金と言ふ奴も沙婆ではいろんな醫當を演るものですが、」とカストリコニは言つて、
「だが、森の中では、寢ても醒めても忘れられぬものは勇氣と外れのない鐵砲だけですよ。」
「何か些細な贈物でもしなくつちや別れ切れない。さあ、何がいゝだらう？　ブランド。」
無賴漢は横目でオルソの鐵砲を見ながら頭を掻いた。
「困りましたなあ、中尉、口を割つてみても……だが、いけねえ、御祕藏と來てらあ。」
「それは何だい？」
「何でもねえ——ものそのものは何でもねえんですが。使ひ方一つです。私は何時も、貴方の二連發のことを思つてゐますよ——然も片手射と、おゝ！　あれだけは二度と再びあることではない！」
「この鐵砲が要るのかね？　これなら君に上げるつもりでこゝへ持つて來たのだよ。だが、成る可く使はずに濟ましたいものだね。」
「おゝ！　私にはとても貴方のやうに甘く使ふなどと約束は出來ない。だが、心配は要りません。外の奴がそれを手に入れたとお聞きになつた時は、このブランド・サヴェリがお陀佛の後だと思つてゐて下さい。」
「そしてカストリュニ君、君には何を上げよう？」

「折角貴方が記念品をと仰つて下さるのですから遠慮なしに申上げませう。出來るだけ小形のホラスの詩集を屆けて下さいませんか、さうすると隨分樂しい時間が送れるし、羅甸語を忘れずに濟みますよ。バスヂナの波止場に葉卷を賣つてゐる娘がゐます、彼女に渡して下されば私へ屆くのです。」

「エルツェヴィル版を一部上げよう、先生。幸ひ持つて歸つて來た本の中に一册あつた筈だ……扨て、御兩君、お別れせねばならないから最後の握手をしよう。もし、その内に萬一にもサルディニアへでも行つてみようと思ふやうなことがあつたら是非手紙を呉れ給へ。僕の宛名はね、大陸へ渡つてからN氏氧附けでお知らせするからね。」

「中尉殿、」とブランドが言つた、

「明日貴方方が港をお出になる時山のこの地點を見て下さい、私達はこゝへ來て貴方のためにハンケチを振りますから。」

そこで彼等は別れた。オルソと妹はカルドの路へ、無賴漢は山路へと。

二十一

四月の或る晴れた朝、トオマス・ネヴィル大佐は、數日前に結婚した令孃とオルソ、及びコロンバの四人連れで一臺の四輪馬車に乘り、最近發掘せられたエトルリア人の古墳の探檢に出懸けた。それはピサを訪問した人は是非訪ねねばならない古蹟の一つとなつてゐた。

岩窟の中で新郎新婦は壁畫のスケッチをし始めた。然し、大佐とコロンバとはそんな考古趣味には少しも關心がなかつたので、二人を殘したまゝ散歩をしようと言ふので外へ出た。

「コロンバさん。」と大佐は言つて、

「お晝餐に間に合ふやうにはピサの旅館へは歸れませんぜ！　貴方はお腹が空きはしませんか？　オルソも妻君も古代の遺物には夢中になるのですから、スケッチを始めたとなると容易に出ては來ませんよ。」

「さうねえ。」とコロンバは言つて、

「それでゐて、小さい繪の一枚だつて仕上げて歸つたことがない！」

「あそこの小さい農家へでも入つてみませう。パンの少々と一本の葡萄酒、苺とクリームくらゐは食べさせるでせうから、そこで畫家連中を待つことにしませう。」

「結構ですわ、大佐。私達二人だけは家事向のことにかけては明るいのですから、詩境にだけ遊んでゐる新婚の二人の方のために心配をかけられてはつまりませんわ。では、貴方の手をお借し下さい。私、進歩して來たでせう？　貴方に手を持つて頂くし、流行の帽子も被るし、流行の着物も着てゐます、もう數へ切れない程の澤山の立派なことを勉強しました。だから私には少しも野蠻人臭いところはありませんわ。この肩掛をかけた恰好は本當に優美でせう。あの……貴方の聯隊にゐた金髪の士官ね、結婚式に來てゐたでせう——どうも、あの名が覺えられないけど、脊の高い、縮れつ毛の男でし

た。私には一撃で敲き倒すことの出來さうな……」
「チャットワース君ですね？」と大佐が訊いた。
「さう〳〵。私には、その名を發音することが出來ません。」
「あゝ！　コロンバさん、なか〳〵發展しますねえ、この調子だと第二回目の結婚式が近々の内にある！」
「私が結婚するのですつて？　では、誰がオルソから貰ふ甥の教育をするでせう——コルシカ語を教へるのは誰でせう？　甥はコルシカ語で話をするやうになるでせう。それから私は先きの尖つた帽子も作つてやりますよ、丁度貴方のお氣に觸るやうに！」
「何より先きに、その甥が出來るまで待たねばなりませんな。それから、また貴孃は短劍の使ひ方を教へることも出來ますね、お氣に召すことでしたなら、ねえ。」
「短劍なんて、もうお別れです！」と、コロンバは快活に言つて、
「今私は扇子を持つてゐますから、コルシカの惡口を仰しやると、これで貴方の指の節をひつぱたきますわ。」
二人が話しながら農家まで來た。そこには葡萄酒や莓やクリームがあつた。コロンバが莓を摘むのを手傳つてゐる間に大佐は葡萄酒を飲んだ。

小徑の角で藁椅子に坐つて、一人の老人が日向ぼつこをしてゐた。彼は一見して病人だと解つた。頬がこけて眼が落ち込んで、非常に痩せつこけてゐた。絶對に靜まり返つてゐて、蒼ざめた顏をして一個所を凝視してゐる。それは生きてゐると言ふよりは屍骸に近いと言つたやうに見えた。コロンバは數分間彼を非常な好奇心で見てゐたから、その農家の女中がそれに氣が附いて話し始めた。
「あのお氣の毒な老人はねえ、貴孃と同じお國の方です。お孃樣のお話しつぷりから、貴孃はコルシカのお方に見えますわ。あの老人は鄕里で沒落したのです。息子さん達が變死をなさつたのです、失禮な申し分ですけど、ねえお孃さま、お鄕里では仇敵には同情はなさらないのですつてねえ。そこで、この老人は一人ぼつちになつたので、ピザへ渡つて、この畠の持ち主が遠類に當るところから、そこへたよつて來てゐるのださうです。災難と悲哀とで、この方は少し氣が狂つてゐます——だけど、親類でも邪魔になるから、かうしてこゝで日向ぼつこをさせて置くのです。非常に穩なしくつて、少しも人の邪魔にはなりませんのです。頭が狂つてゐるからだと思ひますが、一日に三言とは言はないのです。毎週診斷に來る醫者も長く續くまいと言つてゐます。」
「あゝ！　もう見込みがないの？　却つてその方が片がついていゝのね。」
「お孃樣、少しコルシカ語でお話ししてお上げなさい。鄕里の言葉を聞けば、少しは慰められるでせうよ。」
「逢つてみませう。」とコロンバはからかふやうに言つた。

そこでコロンバはその老人に近づいて、彼の陽を塞ぐやうにして立つた。するとその狂つた老人は顔を擡げてコロンバをじろりと強く見た。コロンバは彼を見ながら笑つてゐた。彼は一二分經つと、手で額を蔽うて眼を閉ぢた。それは恰もコロンバの視線を逃れようとしてゐたようであつた。

やがて再び眼を開けたが今度はくわつと見開いた。唇を慄はせ兩手を差し延さうとしてみたがコロンバから見据ゑられて、言ふことも動くことも出來なくなつて椅子に蹲踞まつた。眼には涙を一杯たゝへて欷り泣きを始めた。

「あら、こんなことは今までありませんでしたよ。」と、女中は言つてそれから老人に話しかけた。

「このお嬢さんは貴方の島のお方ですよ。貴方に會ふために此處へおいでになりました。」

「無念だ！」と老人は聲を嗄らして叫んだ、

「無念だ！　まだ足りないのか？　私が燃した手帖の頁……どうしてまあ、あれが讀めたのだ？　然し、どうして二人ともあんなことになつたのだ？　お前さんはあの頁に書いてあつたことは知る筈がなかつたのだ。一人だけは――唯一人――オルランデュチヨだけは殘して呉れてよかつたのだ……彼の名は書いてなかつた。」

「二人とも入用だつたのです。」と、コロンバは聲を低めて、コルシカ語で言つて、

「枝葉は切つてしまひました。もし根も腐つてゐなかつたら、それもついでに裂いてしまつたところです。まあ、泣きごとはおよしなさいよ。苦しむと言つたつてお前さんのは長い間ではなかつた。私は二年間苦しみ通してゐたんだよ。」

老人は泣き聲を發して頭をがつくりと胸に垂れた。

コロンバは後戻りをして挽歌の一節から分らぬ言葉で、

「射つたことのある手、狙つたことのある眼、わしの死んだことを考へぬいた心。」

と、口吟みながら、靜かに農家の方へ歩き出した。

女中がその老人の介抱をしてゐる間に、コロンバは眼を輝し顔を眞赤にして大佐と向ひ會つて食卓へ着いた。

「どうかしましたか？」と、大佐は訊いた。

「貴嬢はピエトラネラで家の中へ鐵砲を射ち込まれた時のやうな顔をしてゐますよ。」

「コルシカにゐた時の追憶がふと頭に浮んだのです。だが今ではもうみんな濟みました。扨て私は甥の名附の母になつたつてかまはないでせう？　おゝ！　何んとか立派な名を附けたいものですね――ギルフチオ・トマソ・オルソ・レオネ！」

その時女中が歸つて來た。

「どんな具合？」と、コロンバは極めて穩やかに言つた。

「死にましたか、それとも氣絶しただけですか？」
「別に大したことではありませんでした、お孃さん。だけど、貴女を見ると、どうしてあんな具合になつたのか不思議ですねえ。」
「では、お醫者樣は長くはもてないと言つてゐるのですね？」
「二月は難かしいと言ふことです。」
「大して欲しい人でもないやうですね。」
「それは一體誰のことを言つてゐるのですか？」と大佐は訊いた。
「島から來た狂人の話ですよ。」とコロンバは氣にも止めないやうに答へて、
「あそこの家で厄介になつてゐます。これから時々その人の便りを聞くことにしませう。だけど、大佐、新郎新婦に苺を少し殘して置きませうね。」
コロンバがその農家を出て四輪馬車に乘ると、遠くまで見送つてゐたそこの内儀さんは自分の娘に言つた。
「あのお孃さんを見たかい？　縹緻は大したものだが、あの眼は、あれはきつと鬼眼だよ。」

コロンバ　終

ロキス

ロキス

ウィッテンバッハ教授の原稿から

一

「テオドル君。」とウィッテンバッハ教授は言つた。

「どうかあの寫本を取つて呉れないか、洋皮紙で綴ぢてある本だよ、私の文机の上の書棚の二段目にあるだらう――いや、それぢやないよ、小形の方の本だよ。その中に千八百六十六年にあつた記事の覺書がみなある筈だ――少くともツェミオス伯爵に關する覺書だけは、ね。」

教授は眼鏡をかけて、深い沈默の中に、次のやうに讀んだ。

「ロキス」と。

それには標語として次のリシュエニア人の諺が冒頭にあつた。

「二つ揃へば對になる」（二つことは同じ）

リシュエニア語の聖書の飜譯が初めてロンドンに現れた時、私はケエニヒベルヒの「科學及び文學新聞」紙上で一つの論說を發表した。その論の中で學殖ある飜譯家と聖書協會の敬虔なる出版の動機を公平に批評して、その中に些細ながら、數ケ所で見付けた誤謬を指摘して、更にこの飜譯はリシュエニア人の一部分にしか役には立つまいといふことを述べた。

實際、彼等が飜譯したと言ふ方言は普通一般にジモウデ語と言はれてゐる。ジョメティック語を使用してゐる地方、卽ちサモジティアのパラティン領地方の住民には殆んど理解が能きない種類のものであつた。そこの國語は、恐らく、リシュエニア語よりは梵語に關係が近かつたであらう。

私のこの觀察はドルパ大學の或る有名なる一教授から酷評を受けたにも拘らず、聖書協會の委員達は時を移さず、聖・マシュの福音書をサモジティア語に飜譯刊行の指圖と管理とを私に擔當してもらひたいと言ふ申込を禮を厚くして賴んで來た程、彼等の面々を啓發したのだ。

當時私は裏ウラル地方の方言の研究に非常に沒頭してゐたので、四福音書全部と言ふ廣汎なる仕事に從事することは能きなかつた。私はゲルトルード・ウェーベル孃との結婚を延期して、手に入れられる限りのジモウデ語の記錄は悉皆、印刷したものでも寫本でも蒐集する目的でコウノ（地名）へ行つた。私は、勿論、昔の俗謠や物語や傳說等を看過しなかつた。卽ち飜譯の仕事に取りかゝる以前に

必然的に材料となるジョメティック語の參考になるものは、みな集めようとした。

私は若き伯爵マイケル・ツェミオス氏への紹介狀を手に入れた。伯爵の父なる人は名僧ロウィキの、あの有名なサモジティア語の教義問答を所藏してゐたと聞いてゐた。これは實に稀有な文獻で、既に私が言つたドルパ大學の例の教授の如きは、その存在の有無をすら論議したのだつた。

私が知つた消足によると、古代普魯西語の俗謠以外に、古い俗謠集をも、彼の書齋で發見するらしかつた。私の訪問の目的を明示するために、ツェミオス伯に書面を送つたところ、伯爵からは伯のメディンテイルタス城内で、研究に必要な日數だけは、滯在してもよいと言ふ非常に鄭重なる招待狀が返事となつて來た。伯爵は百姓と殆んど同じ程度に、巧みにジモウデ語を話すことが出來るのを誇りとし、

「貴下の御企ての如きかゝる重要にして興味ある事業に對し小生が御援助いたし得るは頗る欣快と致すところに候」

と、手紙を結んでゐた。

伯爵はリシュエニア一流の富裕な地主たるのみならず、私が彼の宣教師たるの光榮を有し得るやうに、同一宗派の信仰を懷いてゐた。伯爵には或る特種な性癖が無いでもないとは警告されてゐたところであつたが、彼は非常に手厚いもてなしをする人だし、殊に智的趣味を持つた人には、誰に對してもさうだと聞いてゐた。だから、私はメディンテイルタス城への旅行に出懸けた。

城の階段で、私は伯爵の執事に逢つた。彼は直ちに、私のために準備せられた部屋へ、案内してくれた。

「伯爵さまは。」と執事は言つて、

「今日貴方と御一緒に御食事がお出來にならないことを大層殘念がつていらつしやいます。激いお頭痛でしてねえ、誠に御不幸な痼疾でございまして、で、若し貴方がこちらのお部屋で一人でお食事をなさるのも妙でないと思召すなら、伯爵夫人のお抱へへの、醫者のフレーベル博士と御一緒になすつて頂ければ、一時間も經たぬ間にお支度が出來ます。そのためにお着換へになるには及びませんのです。また、何か御用がございましたら、そこに呼鈴がございますから。」

で、鄭重な一禮をして執事は引き退つた。

部屋は非常に廣く、居心持よく道具が揃へてあり、鏡や金鍍金などで美しく裝飾されてゐた。その一方の側からは、庭と言ふよりは、寧ろ城の附屬公園とでも言ふべき花園が見渡され、別の側からは表玄關が見渡された。着物を着換へるには及ばないと言はれたにも拘はらず、私は黑のフロックをトランクから出さないではゐられなかつた。上衣を脱いで、私のたつた一つのトランクを荷解きをしてゐると、馬車の輪の音が中庭からして來たから、私は窓際へ惹き付けられた。

美しい四輪馬車が、今しがた這入つて來たところだつた。馬車の中には、黑衣に包まれた貴婦人が一人と、紳士が一人と、それにリシュエニア人の百姓の着物を着けた婦人が一人と都合三人居たが、その百姓の女と言ふのは脊が高くて筋骨逞ましく、一見して、これは女裝せる男子だなと私は見違へた。彼女が先づ馬車から出た。別に同じ位に頑强な二人の女が既に踏段の上に立つて待つてゐた。紳士は黑衣を纏つた貴婦人に凭れかゝつてゐた。と、非常に驚いたことには、その紳士は、その貴婦人を馬車の座席へ繫りつけてあつた幅の廣い柔革の帶金を外してゐたのだつた。

貴婦人は長い白髮を亂してゐた。廣く開かれた大きな眼の表情は、どこか空洞であつた。帶革をほどいてしまふと、紳士は帽子を手にして、非常に恭々しく彼女に話しかけた。然し彼女はその紳子に少しの注意をも拂つてゐないやうだつた。紳子は、女達の方へ向いて、素早く頭で輕い合圖をした。

三人の女達は、黑衣の貴婦人を捕へて、まるで羽毛か何かのやうに輕々と抱へ出した。貴婦人は猶ほ馬車へしがみつかうともがいてゐるにもかゝはらず、さつさと城中へ搬び込んだ。この光景はこの家の幾人かの召使達にも目擊せられたのだが、一同はそれを少しも異常なこととは考へてゐないらしかつた。

それらの行動を指圖してゐた紳士は時計を出して、直ぐ食事の用意が出來るかと訊いた。

「十五分もかゝりますまい。」と言ふ返事だつた。

私は直ちに、この紳士はフレーベル博士で、黑衣の貴婦人は伯爵夫人だと推測した。その年配から

推すと、彼女は現在のツェミオス伯の母であらうと結論した。そして彼女に對する用心深い扱ひは、彼女が狂氣してゐる故だと判つきりと解つた。

數分の後に、博士自身が私の部屋へ來た。

「伯爵のお氣分が勝れませんものですから。」と、彼は私に言つた。

「私は貴方に自己紹介をしなくてはなりません。私はドクトル・フレーベルと申します、どうぞ宜敷く。それに私はケーニヒベルヒの「科學及び文學新聞紙」の全讀者に知られていらつしやる學者とお近付きになるを得て嬉しく存じます。かなりお待ち疲れになつたでせう。」

私はドクトルの挨拶に對して、能きるだけの應酬をして、若し食事に下りて行く時間でしたら私も早速お伴をしたいと言つた。

二人が食堂に這入ると、賄係の用人がリキュールと、びりびりする、ひどく香料を加へた料理の幾皿かを、北國の風習にしたがつて、食慾をそゝるために銀の盆に載せて搬んで來た。

「貴方、醫者の役目としまして、あのスタルカを一杯おすゝめ致したいと存じますが。四十年から樽にあつた眞物のフランスのブランデイの一種です。まあ、言はゞリキュールの中では女王ですね。ドロンティム產のひしこをお取り下さい。それ位、消化器官を開いて、消化の準備を整へてくれるものはありませんですね、消化器官は身體のなかでは一等重大な器官ですからね……さあ、やりませう。貴方は何故、獨逸語でお話しになりませんのですか？　貴方のお國はケーニヒベルヒですのに、私は

メメルです。尤も、學位はエナで取りました。獨逸語で話す方が一層氣樂ではありませんか。さうしませう。それに用人達と來たらポーランド語かロシヤ語しか知らないのですから、私達の言ふことなんか解りつこなしですよ。」

我々は最初は默つて食べた。それからマディラの最初の一杯を傾けてしまつてから、私はドクトルに、伯爵はその晩、氣が進まぬから一緒に食事が出來なかつたと言ふ話だが、屢々そんな發作が起きるかどうかと訊いた。

「さうです、いや、さうぢやありません。」と言ふのが、醫者の返事だつた。

「伯爵の遠征次第ですな。」

「どうしてさうです？」

「例へば路をロジェニエへ取る場合なんかですと、歸ると、頭痛がして氣が荒くなります。」

「私だつてロジェニエへなら行つたことがありますけど、そんな經驗はなかつたですがね。」

「そりや教授、」と、彼は笑ひながら、

「戀をしてゐるかどうかと言ふことですよ、問題はね。」と答へた。

私は婚約中のウエベル孃を思ひ出して、嘆息した。

「では、伯爵の許婚の婦人がロジェニエに住んでいらつしやるのですか？」と私は言つた。

「さうです、その附近です。だがその婦人が伯爵と婚約をしたかどうかは確かと言へませんね。その女

は本統に蓮葉娘ですから、伯爵から頸をもぎ取つてしまひますよ。すると伯爵は阿母樣と同じ狀態になるでせうな。」

「本當に、それぢや、あの貴婦人は……御病人ですか？」

「あれは狂人ですよ。貴方、キ印ですよ。それを思ふと、此處に來たなんて、私も一層キの字でしたねえ。」

「貴方の御手腕であの女を正氣に返して下さるといゝですな。」

醫者は首を振つて、手に持つてゐた葡萄酒の杯の色を凝つと見詰めた。

「貴方の眼の前にゐる男の私は、教授、曾つてはカルウガ聯隊の軍醫少佐でした。セヴストポールなんかでは、朝から晩まで人間の腕や脚を切斷してゐました。怒つた馬の、背中の蠅ぐらゐもうるさく爆烈彈が我々の間に落ちて來たのは言ふまでもないことです。だが、その頃は眠る場所と言つたつてひゝ、ひどい處で、食ふものと來たら、また、お話にならなかつたのでしたが、此處に居る程苦にはなりませんでした。ありつたけの甘い物を食つたり飲んだりして、皇子の住むやうな處に住んでゐて、宮廷の醫者ぐらゐな報酬を貰つてゐながら……だつて、自由と言ふものがねえ、先生！　……お察しの通りこの『雌の龍』と一緒ぢや、自分の時間と言つたら一分だつてありませんよ。」

「永い間あなたから御厄介になつてゐるのですか？」

「二年にはなりますまいね。どうでも二十七年も正氣ぢやないのですからね。今の伯爵が生れる前か

らでしたよ。このことならロジェニエかコウノかで誰かゞ貴方にお話ししませんでしたか？　それぢやあ、お聞きなさい。私はベテルスブルヒの『醫學雜誌』へ何日かは論文を書きたい思つてゐる患者ですからね。恐怖から起つた發狂ですからね……」

「恐怖からですつて？　どうしてそんなことがあり得ました？」

「びつくりしちまつたんですね。あの方はケースタット家の人でしてね……あゝ、この家に限つて身分の低い家とは結婚しませんよ。……『我々はゲディミンの子孫だからね』と言つてゐます……。それで、先生、結婚式は今私達がかうして飲んでゐる……ところで、貴方の健康を祝して乾盃！　……この城の中で擧げられたのですが、その結婚後二三日して今の伯爵の阿父さんに當る先代の伯爵が狩に行つたのです。吾が愛するリシュエニアの貴婦人達は、御承知の如くみな本物の女武者ですよ。ですから新婚の夫人は新郎の伯爵に蹤いて狩に出かけたのでした……夫人は狩獵家達の背後に殘つたか前に進み過ぎたかしたのですな……どつちだつたか判りませんが……その時、突然、新夫人の小姓の十二歳か十四歳ぐらゐのコサック少年騎兵が全速力でやつて來るのを伯爵が見ました。

『御前樣！』と少年は言つた、

『熊が奥樣を搔ッ攫つて行きました。』

『何處へだ？』と、伯爵は叫んだ。

『あそこです。』と、少年騎兵は答へる。

狩獵の連中は悉く少年の指さした地點へ向つて走つたのでしたが、伯爵夫人の影は何處にも見えなかつた。夫人の馬は絞め殺されて、片側に延びてしまつてゐたし、片側には夫人の羊の毛皮の上衣がありました。みなは一生懸命に探して、八方から森へ分け入りました。到頭一人の狩獵家が叫び出したのです。

『あそこに熊がゐる！』

すると、熊公め、悠々として開墾地を横ぎつてゐたのです。伯爵夫人を曳きずつて、どこか茂みの中かなにかの、邪魔の入らないところで啖ひつかうと言ふのでした。こんな畜生は貪慾でしてねえ。それから修道院の僧侶のやうに樂々と氣永く啖ふのです。結婚後二日しか經つてゐなかつたのですから、伯爵の勇氣と言つたら大したものでした。伯爵は熊に向つて自分の體軀を投げつけようとしたのでしたよ、拳にしかと狩獵メスを握つてね。だが、リシュエンアの熊は豚のやうな具合に刺し殺されはしませんよ。丁度幸なことには伯爵の鐵砲持ちが、それは異樣な下等な男でしたがね、その朝なんかは、ひどく醉つぱらつてやがつてね、家兎と野兎との區別だつて見別けられない位だつた奴がね旋條銃を射つちまつたんです。それも百歩以上もある處からです。彈丸が熊に的るものやら伯爵夫人に當るものやら、一向お構ひなしで、打つてしまひました。」

「それで熊を殺したんですか？」

「ぐうの音もありませんでした。あんなにして射つには醉つぱらひでないと駄目ですな。さう言ふ運

を持つた彈丸があつたんですね、先生。うんと良い値でそんな彈丸を賣る魔法使があるんですね……伯爵夫人は恐ろしく引き裂かれてゐたのでした、無論無意識でした。また一本の足は折られちまつたんです。みなは總がかりで家に搬んで歸りました。やつと意識だけは取り戻しましたが、理性は去つちまつたわけです。ペテルスブルヒへ連れて行つて、特別診察で四人の醫師に見て貰ひました、そのお醫者さん等は人氣にかけては當時斷然光つてゐた名醫だつたのです。その診察によると、夫人は姙娠をなさつてられるので、出產なさつたら、順調に向ふだらうから心配はないと言ふのでした。夫人は新鮮な空氣を吸ふために、田舍にやられて乳精とコカインとを用ひさせられた。どの醫者も約百圓位づつ貰ひました。九ケ月經つと、夫人は立派な丈夫さうな子供を產みましたが、どうしてどうして『順調に向ふ』ものですか？　あゝ、さうです、實際は……キ印を募らしただけのことでした。伯爵は赤ん坊を見せてやつたのでした。小說でしたら、そりや屹度好き效果を捻出するところでせうね。

『殺せ、それを！　殺しておくれ、その畜生を！』

斯う叫び出したのです。その時、うつかりしてゐるなら、子供の頸を絞めて捻ぢ上げたでせうね。その時からと言ふものは、ぼんやりした精神虛弱の狀態になりましたよ。そして時々猛烈な精神病の發作と變るやうになりました。また甚く自殺をしようとする傾向が出て來ました。從つて新鮮な空氣をとらせるのには、革紐で締めてをかねばならないことになりました、體軀を捉まへて置くのに屈强な召使が三人も要ることになりました。それでも、教授、この事實だけは書きとつておいて貰ひたい

ものですがね、私がラテン語をつかひ盡るまで話してゐると、別に服從は强ひないでも、夫人を宥める手段が得られるのです。時には夫人の髮を切つちまふぞと脅してやることもあります。夫人は或る時代に美しい髮を持つてゐたに違ひないと見えます。虛榮心ですな！　この虛榮心と言ふやつが人間には最後まで殘る唯一の感情ですな。實に妙ではありませんか？　若し私が好きなやうに夫人を實驗することが能きるものなら、ことによると治すことが能きるかも知れませんのですけれど。」

「どんな方法でです？」

「毆りつけるのですがね。そのやうにして私は二十人も村の百姓の女を治したことがありました。それは露西亞に有る恐ろしい發狂病の中に「咆え氣違ひ」と言ふのがあつて、それが流行つた村のことでした。一人の女が咆え始めると、その伴の女が咆え出す。三日も經たない中に、村中が咆えてキ印になつた時のことでした。私は皆毆ぐりつけて、そのキ印を片付けてしまひましたがね。諺に言ふ、『雛雞に手向ひなし』でした。だが伯爵はその實驗を試ることは決して私に許しますまい。」

「何ですつて！　貴方はその殘虐な仕打ちに、伯爵を同意させようと思つていらつしやつたのですか？」

「おゝ！　伯爵はお母さんを殆ど知つてゐませんでした。また、その荒療治は御病人にはおためになることなんです。だがね、教授、恐怖が人を發狂させるとお考へになつたことがありますか？」

「伯爵夫人の場合は實に恐ろしいことでしたねえ、……野獸の爪の中にゐたなんて！」

「でも、子供は親に似ないやうです。一年前に伯爵がまた同じ境遇に立ちましたよ。でも、伯爵は冷靜であつたお蔭で、不思議に遁げ出しました。」

「熊の爪からですか？」

「さうです。伯爵のは雌熊でしたよ。まづ稀らしい最大級の奴でした。伯爵はそれを襲撃しようと思つて、猪に使ふ槍を手に持つて向つたのです。だが熊は一度仰向けに寢返へつただけで、槍の刃を擋け流して置いて、伯爵をぎゆつと握つちやつたんです。それから地上に敲き倒したのです、その易易たることゝ言つたら私がこの壜をひつくり覆すやうなものでした。で、伯爵は狡猾くも死んだ風をしたのです。……熊の奴さん、伯爵の匂ひを嗅いで、鼻をくん〳〵させました。それから、微塵に引き裂かうとはしないで、舌で舐めたのですよ。伯爵には動かないぞと言ふ沈着さが在つたのです。すると熊の奴はあちらに行つちまひました。」

「奴さん死んだと思つたんですな。こんな畜生は死體は食はないと言ふことですね。」

「さうだと信じたいとは努めてゐるのですがね。そしてその問題を個人的見地から調査するのは愼しみたいとは、ね。だが、恐怖に關してなら、セヴストポールであつた事件を一つお話し致しませう。

或る日のこと、僕達五六人の者があの有名な第五番の撓堡の野戰病院の裏手に坐つてゐたのです。僕等の處へ搬ばれた一本のビール壜を撓んでゐました。すると哨兵が『榴彈だつ！』と叫んだから僕等はみな腹ばひになつちまいました。いや、僕達全部ではなかつた。一人何とか言ふ男が……でも、

名前なんか言ふ必要もないが……友達の處に來たばかしの一人の若い士官が立つたまゝでゐました。彼はなみ〳〵と充たされたコップを手にしてゐると、丁度その時榴彈が破裂しました。それで可哀想に我が戰友マンドレー・スペランスキイ君の腦の働きだけは飛んぢまひました。彼は勇敢な若者でしたがね。そしてビール壜がこはれちまひました。いゝ案梅に殆ど空つぽだつたのです。さて、その爆裂騷ぎの後でみんな立上つて見ると、煙の眞只中にです、我が戰友はまるで何事もなかつたやうに、ビールの最後の一口を呑み込んでゐるぢやありませんか。皆が英雄だと、綽名しましたよ。その翌日私はゲデオノフ大佐が病院から出て來るのに逢つたのでした。

『今日諸君と一緒に食事をやらう。』と大佐は言ひました。

『そしてね、私の歸隊を祝福するためにシャムペンを御馳走したいと思つてゐる。』

一同早速食卓につきました。あのビールの若い士官もそこに列席しました。が、奴さん、シャムペンが拔かれやうとは思つてゐなかつたのです。奴さんの近くで、全く不意打ちに壜が拔かれると、ポーン、シューッと來た。そして、コルクが奴さんの顳顬に飛んで來たのです。奴さん、あつと叫んだが、そのまゝうーんと氣絕しました。いゝですか、本當はかうなんでした。昨日吾が英雄は過度の恐怖に陷つたのです。にも拘らず遁げもしないでビールを飲んでゐたと言ふのは、心の統御を失つてゐたからです。それで只、無意識な機械的動作だけが殘つてゐたことがおわかりでしたでせう。實際、教授、人間の機械的動作はですね……」

「先生。」と、この時つか〳〵と部屋に這入つて給仕は、
「ジュダノヴさんが仰つしやるには、伯爵夫人はお食事を召し上がりませんさうです。」
「えい、畜生！」とドクトルは唸つた。
「夫人の處へ行つて來なくてはならない。あの『雌の龍』に食べさせたら、教授、若しお氣に召せばトランプを一つお手合せを願ひませうか？」
私は勝負事は知らなかつたから、殘念ですがと言つてをいて、ドクトルが病人を診に出懸けると、私の部屋へ返へつて、婚約中のゲルトルウデ孃へ宛て、手紙を認めた。

二

暖かい夜であつた。
私は窓を開け放つて、公園のやうな花園を見下してゐた。手紙を書いて了つたあと直ぐに眠むたいと言ふ感じもなかつた。で、不規則なリシュエニア語の動詞をお浚ひして、その不規則の出所の相違を見出すために梵語を調べる仕事にとりかゝつた。私が專心勉强してる最中に、窓近くの一本の立ち木が烈しく搖れた。私は枯れ枝がきしむのを聞きとることが能きた。そしてそれは何かまるで大きな動物でも登らうとしてゐるやうに思はれた。博士がして呉れた熊の話が尙心の中に殘つてゐたので、私は幾らか不安を感じて立上つた。

窓から僅か數尺の隔たりで、木の葉の間に隱れた一人の男の頭が、私の部屋のランプの明りでくつきりと照されてるのを見た。その幻は僅か一秒間續いたに過ぎなかつたが、私の瞳とぶつかつた。彼の妙にきらきらした眼付きが名狀しがたい位にまで私の心を强く打つた。私は思はず一歩あとすざりをしてゐた。それから窓際へ走つて、きびしい調子で、闖入者に何の用事だと訊ねた。
彼は速やかに攀ぢ下つた。兩手の間に大きな枝をつかんだまま、體軀をぶらんぶらん振つて、地上に飛び下りたかと思ふと、直ぐに姿は見えなくなつた。
私はベルを鳴らして、それに應じて來た召使に、その奇談を物語つた。
「あなた。」と彼は言つた。
「貴方は誤解なすつてらつしやるに違ひありません。」
「いま君に話したことは本當だよ。」と私は答へた。
「庭の中に强盜が忍び込んでるのではないかと思ふがね。」
「そんなことはあり得ませんですが、貴方。」
「さうだとすると、では、誰か家から出た人でもあるのですか？」
召使は返事をしないで眼を大きく開いて、しまひに何か御用は御座いませんかと訊ねた。私は窓を閉めて呉れ給へと言つて寢床に就いた。
私は熊のことも盜人のことも夢に見ないでぐつすりと眠んだ。

朝になつて、着物を着換へてゐると、誰か戸を叩く者があつた。戸を開けると、長い土耳古パイプを手に持つて、禮裝をつけた、非常に脊の高い立派な體軀つきの青年が入つて來たので、私は彼と顏をつき合はせた。

「御挨拶に上がりました、教授。」と彼は言つた。

「あんなに有名でいらつしやるお客樣を、あんなにぶしつけにお迎へいたしまして。私がツエミオス伯爵でございます。」

私は彼のいとも鄭重なる歡待に對して、私の謙遜な感謝を述べ、全く彼のお蔭によることが大きいと言つてから、頭痛はお治りですか如何ですかと訊ねた。

「殆どすつかり、」と彼は言つて、

「兎も角も、次の危機まではね。」と憂鬱な表情をしながら言ひ足した。

「此處のお氣持はいかゞですか？　貴方は野蠻人の中に居るのだと言ふことをお忘れになつてはいけません。サモジティアでは、さう思はないでゐることは困難でせうね。」

私は非常に居心地よくもてなされてゐると信じてゐますと答へた。私は、かう話してる間も、始終甚だ失禮なる好奇心から、彼に對する人物觀をしないでは居られなかつた。彼の風貌にはどこか奇異なところがあつて、さうではないとは思つてみながら、昨夜木に登つたのを私が見た男のことが思ひ出された……。

「ではその可能性はどこにある？」と私は獨語して、

「ツエミオス伯が夜間木に登るなんてことがあると言ふのは？」

彼の前額は高くて少し狹いが、よく發達してゐた。體軀附きは大きくて好く整つてゐた。たゞ、眼だけは餘り接近し過ぎてゐた。そして一方の涙腺から他方の涙腺まで測つて見ると、希臘彫刻家の法則としてあるだけの眼と眼の間の幅があるとは考へられなかつた。彼の瞥見は鋭かつた。二人の眼は期せずして幾度か出合つた。そして多少當惑してお互に顏を見合はせた。突然伯爵は噴き出した。

「貴方は私に見覺えがあるんですよ！」と彼は言つた。

「貴方に見覺えがあるんです？」

「さうですよ、昨日、私が惡漢の役をやつてる處を貴方に見付けられたんですよ。」

「まア！　伯爵、閣下が！」

「昨日は寢室へ閉ぢ込められてね、苦しい一日を過したのですよ。夜になつて、幾分か氣分がよくなりましたから、庭へ散歩に出かけたのですよ。貴方の明りが見えたので好奇心に騙られてね……自分は誰であるかと言ふことを貴方にお話しして、自己紹介をする筈でしたがね、でもあんな滑稽な樣子をしてゐましたので……きまりが惡くなつて、あゝして遁げちまつたのですよ……あの際に折角御勉强の最中でしたところをお邪魔をいたしまして、平にお恕し下さい。」

彼は、いかにもおどけた樣子でありたいと言ふ風にして、この一部始終を物語つた。だが、彼は赤

面して明かにとぎまぎしてゐた。私は、最初の會見以來、何等の不愉快な印象を持たなかつたと言ふことを言つて、彼に安堵させるために出來るだけのことを言つた。そして話題を變へるために、名僧ロウイッキの教義問答を本當にお持ちですかと訊ねた。

「多分あるでせうが、本當のところ、父の書齋のことは、私はよく知りません。父は古い珍しい本を好いてゐましたが、私は近代の作品以外には殆ど何も讀んでゐません。でも一緒に探して見ませう、教授。それぢや、貴方はジュモウデ語の福音書を讀まうとしていらつしやるのですね？」

「伯爵、貴方は、聖書をこの國の言葉に飜譯いたすことは、非常に望ましいことだとお考へになりませんか？」

「確にそれはいゝことです。でも、少しばかし言はせて戴きますと、ジュモウデ語以外の他國語を知らない人との間には、讀める人なんて只一人もないことを申上げられますね。」

「勿論さうでせう。ですが、閣下のお許しを得させて戴きまして申上げますが、讀むことを學ぶのに一等の邪魔物は本の無いことだと言ふことを指摘させて頂きます。サモジ語を使ふ國々に印刷した本文が出來れば、それが讀みたくなつて來て、人々が讀書を學ぶでございませう。このことはもう既に多くの未開の種族の場合に起つたことでして……こんな言葉をこの國の人々と言ふ意味で申上げようとは思ひませんけれど……猶ほその上に。」と私は言葉を續けた。

「一國の國語がですね。何等の遺跡も後に殘さないで、消えて行くなんて隨分悲しいことではございますまいか？　ブロシャ語と來たら三十年も前から死語になりましたし、コルニック語を知つてゐた最後の人は先日亡くなられましたし。」

「悲しいことですね。」と伯爵は口を挾んだ。

「アレキサンダー・フンボルトが私の父に話したことですが、彼は亞米利加に居た時に、天然痘のため今は全く一掃されてしまつた一部落の國語を二言三言知つてゐる唯一の生殘りとなつてる、一羽の鸚鵡に逢つたさうです。お茶を此處へ持つて來させてもよろしいですか？」

茶を飲んでる間に話題はジュモウデ語のことに變つた。伯爵は獨逸人がリシュエニア語を印刷した遺方の失敗を擧げたが、その意見は當つてゐた。

「獨逸語の字母は、」と彼は言つた、

「私達の國語には關係がありませんですね。獨逸語には、ジュモウデ語のJもないし、LやYやEもありませんからね。去年、ケエニヒベルヒで出版になつた、古い俗謠集を手にしてゐますが、その中の言葉を理解するには隨分と骨が折れましたよ、そりや妙に組立つてあるんですよ。」

「閣下は多分レスネルの俗謠集のことをお話しになつていらつしやるのでございまんか？」

「さうですとも、ありや隨分無味乾燥の詩集だね？　どうですか貴方の御意見は？」

「氏は恐らくもつと好いのが選べたでせうにね。あんな具合では、あの詩集には純粹な言語學的な興味しか無いですね。でも注意して探して見たら、貴方のお國の民謠の中から、美しい花とでも言つて

いゝ完全な詩を集聚することは出來るだらうと信じます。」
「いゝえ駄目ですよ！　どうもそれは大きな疑問ですね。いくら私が愛國心が盛んでしてもねえ。」
「數週間も前でしたかね、ウイルノにゐた時でしたが、大變立派な俗謠を手にいたしましたが……史詩ですね……非常に有名な詩です……お讀みいたしませうか？　手提の中に入れてありますから。」
「是非とも拜聽いたしたいものです。」
彼は煙草を吸はせて呉れと賴んだ後、安樂椅子に體軀を埋めた。
「私は煙草をやらないで居ては、詩が解らないのでしてね。」と彼は言つた。
「『ボウドリの三人の息子』と言ふのですが。」
「『ボウドリの三人の息子』ですつて？」と伯爵は、驚駭の態度をして叫んだ。
「さうです、ボウドリは、閣下の方が、却つてよく御存じでいらつしやるに、歴史的人物です。」
伯爵は例の妙な目付きでぢつと私を見詰めた。それはおづおづとしてるが、また兇暴でもあり、殆ど名狀し難い種のものであつた。そして慣れて了ふまでは、殆ど苦痛と言つていゝやうな印象を與へた。私はそれを避けるために急いで讀み始めた。

「ボウドリの三人の息子」

——老ボウドリは、その城中の中庭に、三人の息子を呼び集めた——息子達は彼と同じ

やうに純粹なるリシュエニア人である。
——いゝかい、と彼は子供等に言つた。
軍馬に秣草をやつて鞍の用意をするんだよ。
劍と投槍を鋭くしておくんだよ。
地球を三地方に分つてウイルノでは戰爭が起つたと言ふことだ。
オルゲルドは露西亞に向つて進軍するだらうし、
スキルゲエロは隣國のポール人に向ひ、
ケエスタットはテュトン人を攻擊するであらう。
お前達は若い、強い、また大膽だ。
行け、戰へ！
リシュエニアの神々はお前達を守り給ふぞ！
俺は今年は戰爭に行けない。
俺はお前達の相談には乘りたいと思つてゐる。
お前達は三人だ。それで、三つの路がお前達には開けてるのだ。
——長兄はオルゲルドに伴いて露西亞へ行かねばならない、イルメン湖の國境まで、ま
たノヴゴロッドの城壁の下へだ。

貂の皮や縫取りした毛織物が澤山そこにはあるだらう。
それに商人の間に澤山のルーブルがあるはずだ、それは河の中に氷の塊が澤山あるやうに。
——二男はケエスタットの進軍に追いて行かねばならない。
彼に、十字架を持つてゐる烏合の衆を紛碎してもらひたい！
彼處には琥珀が海の砂ぐらゐもある。
奴等の着物ですら、光と色とがとり〴〵の美しさだ。
彼處の坊うさんの着物はルビーで飾られてゐる。
——三男はスキルゲエロに從つてニエメンを横斷するだらう。
敵は卑怯な武器を持つてゐる。
立派な槍と丈夫な絞め金を選ばねばならない。
さうすれば、嫁を連れて歸れるだらう。
——波蘭土の女はな、いゝかい、捕虜の中でも一等美しい——仔猫のやうに遊戯を好み、クリイムのやうに色が白い。
黑い眉毛の下には眼が星のやうに輝いてゐる。
俺が若かつた頃、五十年も前になるかなあ、私の女房になつた美しい娘を波蘭土から捕

虜にして來た。
もう遠つくに死んでしまつた。
爐火の側に居る時に、私は何時でもあれのことを想ひ出す。
老いたる父は若者達を祝福した。
息子等ははや甲冑をまとひ鞍にのつてゐた。
三人は出陣した。
秋が來た。
それから冬が……
だが、息子等は歸つて來なかつた。
老いたる父は彼等は戰死をしたと思つてゐた。
——吹雪が來た。
一人の騎士が近づいて來た。
彼は毛深い外套の下に貴重なる重荷を持つてゐた。
——そりやノヴゴロッドからのルーブルの嚢かい？　と、ボウドリは訊ねた。

——いゝやお父さん、波蘭土から嫁を連れて來ましたよ。
吹雪の最中に今一人の騎士が現はれた。
彼の毛深い外套も、また貴重な重荷で脹らんでゐた。
——お前は何を持つて來たんだい。獨逸から黄色の琥珀でもかい？
——いゝやお父さん、波蘭土から嫁を連れて來ましたよ。
雪ははやてになつて落ちた。
一人の騎士が毛深い外套の下に貴重な重荷を隱して進んで來た……
だが、彼がその分捕品を示すに先き立ち、
ボウドリは第三回目の結婚式に友人を招待した。

「天つ晴れ、教授。」と伯爵は叫んだ。「ジュモウデ語を完全に發音なさいますね。だがこの美しい昔の俗謠を誰からお聞きになつたのです？」
「若い御婦人でございます。ウイルノに居ました時、光榮にもカタッナ・バス妃殿下の御殿でお近づきになりましたお方です。」
「名は何と仰しやいましたですか？」
「イウィスンカ孃でございました。」

「イオウル孃でしたか！」と伯爵は叫んだ。
「あの向う見ずの婦人でしたか！　多分さうだと思つてゐましたよ。ね、教授、貴方はジュモウデ語やその他總ゆる學者でなけりや解らない言葉は殘らず御存じでいらつしやいますし、古い書物はどれもこれも讀んでいらつしやいますのに、それだのに、貴方は、小說しか讀んだことのないこの若い婦人に瞞まされていらつしやいます。今の俗謠は多少は正確でしたが、あの婦人がミキエウィッチの上品で優さしい俗謠の一つを貴方に飜譯したんですよ。それを貴方は今まで讀んでいらつしやらなかつたのですよ。だつて、それは古いものではありませんもの、私の年齡ぐらゐのものですからね。若し何でしたら、波蘭土語の方を貴方にお見せいたしませう。いや若しお氣に召せば、ポウチキンの立派な露西亞譯のをお見せ致してもいゝですよ。」
私は全く面喰つてしまつたことを白狀する。若し私が「ボウドリの三人の息子」の原文として、それを出版したら、如何にドルバの教授から油を搾られたことやら……。
私のこの困惑に興味を持つでもなく、伯爵は、いとも慇懃に、忙いで會話を轉じた。
「それでは、貴方はイオウルカ孃にお逢ひでしたか？」と彼は言つた。
「私は名譽にも紹介して頂きました。」
「あの方のことをどうお考へになりますか。本當のところを構はず言つて頂きたいものですが。」
「大層愉快なお若い婦人でいらつしやいます。」

「それだけですか。」
「迚も美しいお方ですね。」
「おゝ！」
「世界中で一等愛くるしい眼を持つてらつしやるとは伯爵もお考へになりますでせう。」
「さうですとも。」
「目が眩むやうな眞白い顏色をしていらつしやる……私は波斯の唄を想ひ出しましたつけ。中に情夫が自分の情婦の皮膚の美しさを賞めるところがあります。」

彼女が紅い酒を飲んでしまふ、
彼女の喉を通るのが見える。

と、情夫が言ふことになつてゐます。イウィンスカ孃はこの波斯の詩を思ひ出させました。」
「イオウルカ（孃のこと。イウインスカ）孃はその位の現象ならありますよ。だが、あの人の血管には血液が流れてゐないらしい……情なんてありませんからね……雪のやうに白いかはりに、また雪のやうに冷たいのです。」
かう言つて立上つて、彼は恰も感情を隱すかの如く、口もきかないで、暫らく部屋を歩き廻つた。

それから突然たち止つて、
「失禮いたしました。」と言つた。
「確か、民謠のことを話してゐたのでしたね……」
「さうでした、伯爵閣下。」
「結局はミキエウィッチのものを、彼女が大變美しく飜譯したことを認めねばなりませんね……『仔猫のやうに遊戯を好み』だとか……『クリームのやうに色が白い』だとか……『眼が星のやうに輝いてゐる』だなんて言つてるところは、自分の肖像そつくりですね、さうお思ひになりませんか？」
「全くですな、伯爵閣下。」
「あの娘の惡いトリックについては……確かに、隨分淺薄なトリックですがね……可哀想にあの娘は自分より年上の叔母さんに虐められて死ぬやうな思をしてるんですよ。叔母さんは尼さんのやうな生活をやつてゐます。」
「ウィルノにゐた時は、私も社交界へ出ましたよ。聯隊——の士官達によつて催された舞踏會でしたが、あのお方のお姿を見かけましたよ。」
「あ、さうですか！　若い士官との交際と來たら、てつきり似合ふね。誰かと笑つたり、他の人の蔭口を言つたり、それから皆とふざけ散らしたり……父の書齋へ行つて御覽になりませんか、教授？」
立派に綴ぢてある本がぎつしり並んでゐる、長い廊下を私は彼に隨いて行つた。そしてその書籍は、

その緣に積つた埃から判斷して見ても、滅多に開かれたものでは無いと判つた。硝子窓から私が引き出した、最初の卷の一つがサモジ語の敎義問答だと判つた時、私の歡びは如何！　私は歡喜の叫びを發しないでは居られなかつた。それは恰も何か神祕な力が暝々の裡に吾々讀書家に威力を振つてゐるかと思はれた……伯爵はその書物をとつて、頁を無頓着にめくつた後で、表紙の裏の白紙に、

ウィッテンバッハ敎授に捧ぐ、

ミケル・ツェミオスより

としたゝめた。

私は感極まれる感情を、どうして表はしたら宜いか分らなかつた。そして、この貴重な文獻は、私の死後は、吾が大學圖書館の裝飾となるべき名寶にしようと、私は心の中に決心した。

「若しこの書齋をあなたの勉强室にしたいとお考へになれば。」と伯爵は言つた。

「此處なら何も邪魔は這入りません。」

三

その翌日朝飯の後で、伯爵は、私と一緒に散步がしたいと申出た。その目的は古墳を訪問することであつた。そこは、その國では非常に有名なる名所となつてゐた。その譯は昔時、詩人や魔法使などが（彼等は同一の名となつてゐた）或る特別な場合には其處に集まつたからである。

「大變穩なしい馬を貴方に差し上げたいと存じますが、」と彼は言つた、

「殘念ですが、馬車で御案內致しかねますので。路と來たら馬車ではとても駄目ですからね。」

私は寧ろ書齋に止まつてノートを取りたいのだつた。だが、私は寬大な主人の希望に反するやうなことは何も言へなかつた。で、私は承諾することにした。

馬は中庭の踏段の下のところで我々を待つてゐた。そこには一人の別當が、革紐で繫いだ犬を伴れてゐた。

「犬のことはよく御存じですか、敎授？」

伯爵は一寸立ち止まつて、私の方へ振り向いて言つた。

「殆んど何も存じません、閣下。」

「私が持つてゐる土地に住む或る男がね、このスパニイル種を送つて呉れましたのです。その人はね、この犬を好いと言つて敬服してゐるのです。一つお見せいたしませうか。」

彼は別當を呼んで、犬を連れて來させた。

成程美しい犬だつた。犬は別當にはすつかり慣れてゐた。そして嬉しさうに跳り上つたりして、生命が躍動してるやうに見えた。だが伯爵から一二間も離れない處まで來ると尾を脚の間に挾んで恐ろ

しさうに後退りをした。伯爵が輕く叩くと、犬は却つて物凄い唸り聲をたてた。
「注意して訓練したら好い犬になるだらうと思ひます。」と彼は、鑑定家の眼で暫らくの間、檢査した後に、
「教授、」と彼は言つた、
「城に續いてるあの並樹へ行つた時にね、あの犬が自分を怖がつてゐた理由がわかつて來ます。貴方の本當のお考をお伺ひしたいものです、貴方の大學者たるお力で、この謎を解いて下さらねばなりません……何んだつて畜生奴は私を怖がらねばならないのでせう?」
「本當に閣下は、私をスフィンクスの謎を解いたエディプスとお間違ひ下さいました、ほんの比較言語學の一教授に過ぎない私でございますのに。多分それは——」
「いゝですか、」と彼は口を挾んだ、
「私は馬でも犬でも一度だつて打ちなんかしたことはないのですよ。無智だからこそ過失をするやうな可哀想な動物を、鞭で打つことなんかは遠慮してゐるのです。だつて、それでも私がですね、犬や馬に與へる嫌惡は貴方だつて、よもやお思ひつきになりますまい。だから馴らさうと思つたつても、他の人がするよりも二倍の時間と手數が私にはかゝるのです。貴方が乘つてらつしやる馬だつて、馴らすまでには隨分とかゝりました。でも今ぢや小羊のやうに溫なしいのですよ。」
「だから、かう思ひますわ、伯爵閣下、動物は人相學者なんですね、だから、最初に見た人が、自分

達を愛するか愛しないかゞ直ぐにわかるんですね。貴方が動物をお好みになるのは、たゞ貴方のお役に立てさすばかりだと、私はかんがへます。その反對に、多くの人は本能的に動物に對して偏愛と言ふものを持つてゐるのです。それで、動物達も直ぐと、それを見てとるのですよ。ところで、私だつて、例へば、猫ならいつだつて、本能的に好きになれますね。打たうとしたつて、遁げたりなんかは餘程滅多のことでもないといたしませんね。それに、引つ掻れたことなんて一度だつてありませんでした。」
「どうもさうらしいのです、」と伯爵は言つて、
「私なんか、畜生に對して本當の愛情を持つてゐるとは言へませんね……人間の方が、それだけ餘計に好きになれます。やあ、森へ來ましたね、教授、此處には、獸物の王國が今だつて榮えてるんですからね——出產所だね、子宮ですな、動物の大きな幼稚園だ。さうさ、獨逸の國民的傳說によるとですね、この森の心臟をつき究めた人はまだないんですよ。一人だつて、こんな森や藪の奥底まで達し得た人は無いのでした。尤も何時も例外になつてゐる、至るところ究めざるはなしと言ふ魔法使達は別ですが、ね。此處では、獸物達はね、どれも共和國に居るやうな生活をしてるんです……それとも立憲政體の統治になつてゐるのかしら、どうとも言へませんが。獅子や熊や大鹿や、あの野生の牛やなどが恐く一緒になつて非常に幸福な生活をしてるのです。地下象なんかは、そこで保存されてゐますけれど、尊敬されてるんですよ。議會に臨む元帥ですね。奴等は非常に嚴格な警察力を持つてる

んです、そしてどんな畜生でも、それは背德な奴だと決定されると追放の宣告を受けるんですよ。で其奴は鍋から飛び出して火の中に落ち込むのです。つまり人間の領地へ這入つて來ざるを得ないのです。逃げおほす奴は少いのですよ。」

「隨分妙な傳說ですね、」と私は叫んだ。

「でも、閣下はいま野生の牛のお話をなさいましたね、あれはシイザアが戰記の中にも書いてゐるし、またメロヴィンジアの王がコンピエネの森で狩つたと傳へられてゐる、あの氣高い動物のことでせう。リシュエニアにはまだ生きてゐると言ふ話ですが——さうなんですか？」

「確に生きてゐますとも。私の父なんかは政府から許可を得て、一匹自分で殺したことがあります。あの大きな食堂でその時の奴の頭を御覽になれます。私は一匹も見たことはありません。稀れなことは稀れです。その代りに、狼や熊なら此處にはたんとゐます。この紳士の一人とでも萬一遭遇することを慮つて、私はこの器械を持つて來ました。」(と言つて、彼は帶の中に挾んでゐた銃をとり出した。)

「それから別當は鞍箱に二連發の旋條銃を持つてゐます。」

我々は森へかゝつた。間もなく我々が進んで來た狹い路は全く見えなくなつた。二三分置きに、我我は低い枝が路を遮つてゐる巨木を遠廻りして行かねばならなかつた。その幾つかは、老い朽ちて測り知られない設計になる、冠狀傘のやうに見えた。と思ふと、深い沼があつて、睡蓮や浮草で蔽はれ

てゐた。更に進むと、草が綠玉のやうに輝いてゐる開墾地へ來た。

だが、そこへうつかり乘り出す者はとんでもないめに逢ふことがある。この豐かな當にならぬ草木は、乘り人を馬もろともに永遠に一呑みにする泥濘の奈落を常に隱してゐるからだ……路が嶮しいので我々の會話が妨げられてゐた。私の注意は全く伯爵に隨いて行くことにのみ奪られた。そして彼が磁石も見ないで、案內して行き、何時も古墳へ達するために通らねばならない、正しい方向を誤らない、あの泰然自若たる聰明さに私は感嘆した。彼はこの大自然の密林に屢々狩りに來たことは明白であつた。

遂に吾々は大きな開墾地の中心に古墳を認めた。それは非常に高くて、地滑りがあつたにも拘らず、今尙ほ、はつきりと認められ得る壕に依つて取り圍こまれてゐた。それは恰も最近に掘り開かれたやうに見えた。

頂上で、私は、中に火事の跡のある石で造られた一つの建物の遺蹟を見付けた。可成りの量の灰が、木炭のかけらと混ぢつて此處彼處に粗末な土器の破片すらもあつて、餘程の間、この頂で火事が續いたことを證明してゐた。

若し民間の傳說に信を置き得るならば、生きた人間の犧牲も、幾度かこの墓地で捧げられたのであつた。だが、この嫌惡すべき儀式が行はれなかつた宗敎にして、初めて、永く末代まで續いてゐる。だから私の想像によれば、歷史的證明よりして、古代リシュエニア人に關しても、同樣な理論の正し

いことが言ひ得る。
吾々は壕の向う側へ殘して來た馬の處へ歸るために古墳から下りて來た。すると、一人の老婆が杖に凭れ、手には籠を携げて、我々に近づいて來るのが見えた。
「今日は、旦那樣方、」と彼女は近づきながら言つた、
「神樣のお惠みで施し物をお願ひいたします。可哀想なこの體軀を暖めるために、一杯のブランデイ代を戴けませんか。」
伯爵は貨幣を一枚投げて遣つて、こんな人里離れた森の中で何をしてゐたかと訊ねた。簡單なる返事の代りに、彼女は蕈で一ぱいになつてる籠を示した、植物の知識はほんとに限られてゐたのだつたが、私は中に有毒の蕈が幾つかあるやうに思つた。
「お婆さん、」と私は言つた、
「お前さんはこれを食べないやうになさい。」
「貴方さま、」と老女は悲しさうに微笑んで答へた、
「貧乏人は神樣が與へて下さる物ならどんな物だつて食べますので。」
「貴方はリシュエニア人の胃袋を御存じでありませんな。」と伯爵は口を挾んだ。
「鐵の薄板で胃袋に裏がつけてあるんですよ。百姓達はどんな種類の蕈だつて見付け次第に食べるんです。それであなたちつとも食あたりをしませんね。」

「でもあれの籠にあるひら蕈だけは食べさせないで下さい。」と私は叫んで、猛毒のある種の蕈の一つを取り出すために手を延ばした。だが、老婆は速かに籠を引つ込めた。
「氣をお付けよ、」と彼女はびつくりした調子で言つた、
「お守りを受けてゐるんだよ……神樣！　神樣！」
その「神樣」と言つた言葉はサモジテイア人の語であつた。
私は老婆が異敎徒の神を念ずるのを聞いて驚いたが、それよりも彼女の籠の中の蕈がむくむくと持ち上がるのを見るに及んで更に一層びつくりした。一匹の蛇の黑い頭が少くとも一尺は籠から上がつた。私は跳び退つた。すると伯爵はスラブ人の迷信的風習に從つて、肩の上へ唾を吐いた。彼等は、古代羅馬人がしたやうにこの方法で災禍を避け得ると信じてゐた。
老婆は籠を地上に置いて、その側に踞んだ。そして彼女は呪文のやうに何か譯も分らぬ詞を言ひながら、蛇の方へ手を差し出した。蛇は一寸靜まつてゐた。それから、彼女のしなびた腕の圍りに縮まつて、彼女の羊皮の上衣の袖の中に姿を消した。その上衣は、汚ない下衣とともに、私の考へではリシュエニア人の着物全部を含んでゐた。彼女は手のこんだ奇術をうまく遣つてのけたばかりの手品師よろしくの、勝利の小さな笑ひを以て吾々を眺めた。その顏は、多く惡黨か阿呆かである、デモ魔法使に屢々認められる狡猾と愚鈍と混交したものであつた。
「此處に、」と伯爵は獨逸語で言つた、

一地方色の標本がありますね。古墳の麓で、蛇使ひの女魔法使が博學者なる敎授とその土地の無智な紳士を眼前に見据ゑてゐる。貴方と同國のお方のクナウスが描いた自然生活の畫の主要なる題材ですな……若し貴方の運命を卜なはせたいお考でしたら、今は絶好の機會ですが。」

私はこんないかさまものには氣が向かないと答へて、

「どつちかと申しますと、」と附け加へた、

「貴方がお話になつたあの不思議な迷信に就いて、彼女が何かもつと知つてはいないかと訊ねたいのですが……お婆あさん。」と私は彼女に向いて、

「あの獸物どもがね、團隊になつてだね、人間の支配から全く獨立してだよ、彼等だけで生活してゐるやうなところが、この森の中の一部分にあるやうな話は聞いたことがないかね？」

女魔法使は點頭きながら、ありますと答へて、馬鹿にして、半ば意地惡るさうに低い聲で笑つた。

「私はその處から來るのですぜ。」と彼女は言つた。

「獸物どもは王樣を失くしてゐるのですよ。氣高い、獅子が死んだので、彼等は他に王樣を擁立しやうとしてゐますのです。もし貴方が其處へ行かつしやれば、貴方を王樣にして吳れるでせう。」

「何言つてるんだい、おつ嬶あ？」と伯爵はわつはつはと噴き出した。

「誰に向つて話してゐるつもりだい？　お前は知るまいが、このお方はね……（一體敎授なるジュモウデ語があるかないか知らないが）大學者なんだよ。聖賢なんだよ、詩人だよ。」

女魔法使は目を丸くして、凝つと伯爵を見詰めた。

「ぢやあ間違ひだつたのかな。」と、彼女は言つた。

「其處へ行くのは當然貴方だつたのかな。貴方なら王樣になれるでせうよ。あの方ではなかつたのかな。貴方なら、脊は高いし、丈夫だし、爪と齒を持つてゐなさる。」

「彼女が狙つてゐる謎は何だとお考へになりますか？」と伯爵は言つて、

「どの道を行けばいゝのか敎へて貰へまいか、おつ嬶あ君。」と、彼は訊ねた。

彼女は手で森の一部を指さした。

「本當かい？」と伯爵は言つた。

「ぢやあ、どうしてあの沼澤が横ぎられるんだい？　敎授、通られない沼の在る方を指しましたぜ、綠の草で蔽はれてゐる泥濘の池の方をです。去年でしたか、私が牡鹿を一匹傷つけてやつたら、この地獄のやうな沼へ飛び込みましたよ。見てゐる間に、次第々々に沈んで行つてしまひましたよ……五分と經たない間に、角が見えただけでしたが、それも間もなく沒入して、到頭姿が見えなくなりました。二匹の犬も一緒にでした。」

「だが、私は重いことはないでな。」と老婆はくすくす笑ひながら言つた。

「吾なら箒の柄に乘つてでも樂々とあの沼地ぐらゐは渡れると思ふね。」

憤怒の閃光が彼女の眼の中で輝いた。

「貴方さま、」と彼女は乞食のやうな鼻聲で、のろのろした聲に返へつて言つた、
「憐な女にやる煙草を一服お持ちではありませんかな？　貴方はな、ドウギェリイへ行かつしやるよりは、あの沼地の路でも探した方が宜ろしいでせうな。」
「ドウギェリイだつて！」と伯爵は赤面しながら言つた、
「それはどう言ふわけだい？」
私は、この言葉が伯爵に奇異な效果をもたらしたことに氣が着かないでは居られなかつた。彼は眼に見えて狼狽した。その狼狽を隱すために頭を垂れ、急いで獵刀の柄にぶら下つてゐた煙草入れを開いた。
「いけません、ドウギェリイへ行つてはなりません。」と老女は繰り返へした、
「あの白い小鳩は貴方には向きませんぞ、、なあ、神樣？」
その時、蛇の頭が老女の上衣のカラーから現はれて、その女主人の耳まで延び上つた。この爬蟲類は、疑ひもなく奇術の訓練を受けてゐるので、まるで物でも言つてゐるやうに顎を動かした。
「私の言ふことには間違はないと仰しやつてゐます。」と老婆は言つた。
伯爵は一握りの煙草を彼女に與へた。そして、
「僕を知つてるのかい？」と訊ねた。
「知りませんとも、貴方。」

「僕はね、メディンティルタスの主人だからね。近い内にやつて來たまへ、煙草もブランデーも進げるよ。」
老婆は彼の手に接吻して、速かに大股で歩いて行つた。間もなく姿は見えなくなつた。伯爵は、自分で何をしてるのかも殆んど無意識に、袋の紐を結んだり、解いたりして、考へ込んだまゝになつてゐた。
「教授、」と彼はやゝ長い沈默の後で私に言つた、
「貴方はお笑ひになるでせう。あの梅干婆めは、私のことも、指さしたあの路のことも、みんなよく知つてゐたんです。それを知らないふりしてゐたのです……結局のところ、何もさう大して驚くほどのことではありませんのです。私はこの田舍では、白い狼のやうによく知られてゐるのですよ。あの瘠馬めはドウギェリイ城へ行く途中で幾度か私を見てゐたんですよ……年頃の若い婦人がそこに住んでゐるものだから、彼女め、私が戀でもしてると定めつちまつたんですね……それとも、誰か美しい青年から賄賂でも貰つて、私にけちをつけたんですね……屹度さうです。でも……矢張り、彼女の言ひ草が氣になつてゐます。どうも脅かされますね……お笑ひになるのも御尤です……本當のことを申しますと、私はドウギェリイ城へ行つて御馳走になる積でした。でも、今ぢや躊躇しますね……私は大馬鹿でゝよ。さあ、教授、貴方がお決めになつて下さい。行つていゝでせうか？」
「結婚問題でしたら御忠告はいたしません。」と、私は笑ひながら言つて、

「でしたら、私は注意して何の意見も述べますまい。」
吾々は馬のゐる場所に返つて來た。
「代りに馬が選つて決めて呉れるでせう。」と伯爵は鞍に飛び乘りながら叫んだ。そして手綱を弛めたなりにして置いた。
馬は躊躇しなかつた。彼は直ちに或る小徑に這入つた。その小徑は幾度か廻り曲つた後ドウギェリイに通ずる砂利を敷いた路へ下りて行つた。
半時間の後、吾々はその城の踏段へ到着した。
吾々の馬の音を聞いて、二つのカーテンの間に枠を取つた窓から、美しい頭が現はれた。
私がまんまとかつがれたミキエウィッチの飜譯家と判つた。
「よくいらつしやいました。」と彼女は言つた。
「ほんたうに好い折でした、ッェミオス伯爵。たつた今巴里から着物が着いたばかりですもの。それに、着換へをしたら、私、見違へるほど美しくなれるわ。」
カーテンは再び閉ぢられた。
「その着物を最初に着おろすなんて、屹度私のためぢやないのですよ。」と伯爵は踏段を登りながら呟いた。
彼はイウィンスカ孃の伯母に當るドウギェロ夫人を私に紹介してくれた。そして彼女は鄭重に迎へ

てくれて、ケエニヒベルヒの「科學及文學新聞」に於ける私の最後の論説に就いて話した。
「教授は貴女に不平を仰しやりにいらしたのですよ。」と伯爵は言つて、
「ジュリアンヌ孃が教授へなすつた人の惡いいたづらをです。」
「彼衣は子供なんでございます、教授。何卒恕してやつて下さいませ。彼衣が馬鹿なことをして呉れるので、私は始終、困りぬいてゐるのでございますの。彼女が二十歳の時よりも、私が十六歳の時の方が、もつと物判りが好かつたですわ。でも彼衣だつて心だては好い娘なんですわ。それに好い特質だつて澤山あるのでございますわ。大した音樂家なんでして、花だつて上手に描きますわ、それに佛蘭西語でも、獨逸語でも、伊太利語でも同じやうに上手く話すのです……刺繍だつて致しますし。」
「それにジュモウデ語の詩もお作りですな。」と伯爵は笑ひながら附け加へた。
「彼女にはそんなこと能きませんですわ。」と、ドウギェロ夫人は叫んだ。
そこで、二人は夫人の姪のいたづらを説明しなければならなかつた。
ドウギェロ夫人は相當教育もあつて、彼女の國の古蹟も知つてゐた。彼女の會話は私には殊のほか氣持ちがよかつた。彼女は吾が獨逸の評論雜誌を多く讀んでゐて、言語學に關しては非常に穩健な意見を持つてゐた。
イウィンスカ孃が着物を着變へるのにどの位の時間がかゝつたのか、私は氣がつかないでゐた。然し、ッェミオス伯は、それを長い時間だと思つたらしい。彼は立上つたかと思ふと、また腰を下ろし

て、窓から外を眺めたり、待ち切れない人のやうに指で硝子板を太鼓のやうに打つたりした。
遂に四十五分も經つた頃、ジュリアンヌ嬢は、そのことを書くには、私以上にその道の批評的知識を必要とするやうな立派な着物を、いとも優雅に纏つて現はれた。彼女は佛蘭西人の家庭教師に附き添はれてゐた。
「美しくは見えなくつて？」と、彼女は伯爵に四方から自分の姿を見せようと思つて、靜かに身をくるりと廻しながら言つた。
「どうしたつて言ふのです、イオウルカ。」とドウギェロ夫人は言つた。
「教授に挨拶もしないなんて？　教授はお前さんにお叱言を仰しやりにいらつしつたんですよ。」
「あッ！　教授でしたわねえ！」と、彼女は愛嬌にも口を尖らせて叫んだ。
「妾、どんなことをしたのでせう？　妾に罰を與へるためにいらしつたの？」
「私達は自分に罰を與へますよ、お嬢さん、若し貴方の前に居させて戴けないやうでしたら。」と私は答へて、
「叱言どころか、私は感謝いたしてゐます。リシュエニア人の女神がいつもよりはずつと美しくなつて現はれたのを知るを得て喜んでるんですよ。」
彼女は頭を下げた。そして手を顔の前に置き、髪を亂さないやうに注意して、何かお菓子を盜んだばかりの子供のやうな調子で言つた。

「堪忍して下さいね、妾、もうあんなことは致しませんから。」
「えゝ、堪忍しますとも、お嬢さん。」と私は彼女に言つて、
「ウイルモでカタツナ王女の御殿で御親切に貴女がなさいましたお約束を御實行下さいますなら。」
「どんなお約束でせう？」と彼女は頭を上げて笑ひながら訊ねた。
「もうお忘れになつたんですか？　貴嬢はお約束なさつたではありませんか。サモジティアで今度逢つたら、魅惑的だとおつしやつた或る田舍踊のやうな物を私に見せてやるつて。」
「まあ、水の妖精の踊！　とても氣に入つてゐるの。それに恰度無くてならない男子が此處に一人居るのですわ。」
彼女は樂譜を積み上げてある卓子へ走つて行つて、急いで一つを開けると、それをピアノの樂譜臺へ置いた。
「こゝをお願ひしてよ。」と、彼女は家庭教師に話しかけて言つた。そして嬢は拍子を示すために、立つたまゝで序曲を自分で彈いた。
「さあ、お初めなさいつてば、ミケル伯爵！　貴方は餘りにリシュエニア人なんですもの、踊れないことがあるもんですか……だけど、ほんの百姓のやうに踊るのですよ、お分りになつて。」
ドウギェロ夫人は反對したが無駄だつた。伯爵は氣乘りしてゐた。その理由は、この踊に於ける彼の役割は、直ぐわかることだが、非常に愉快なものだつた伯爵と私とは是非お願ひしたいと言つた。

から。
家庭教師は、幾度も試みた後で、すこし不馴れではあるが、この種類のワルツを彈くことが出來ると思ふと言つた。
孃は邪魔になる二三の椅子と卓子一脚とを動かした後で、相手の上衣のカラーを捕へて、部屋の眞中に連れて來た。
「御承知でせう、教授、私は水の妖精の役を持つてゐます。どうぞよろしく。」
彼女は低くお辭儀をした。
「水の妖精はねえ、森を飾つてる水の黑い大きな池には、どこにだつて一人はゐるのですよ。近づいたらいけないことよ！　近くへ行くと出て來るわ、屹度妾より可愛い人だわ。妖精は貴方を池へ連れ込むでせうよ、そして多分、鵜呑みにしてしまひます……」
「地中海の魔女と同じですね。」と私は叫んだ。
「伯爵の役は、ね。」と孃は、ッェミオス伯を指さして續けた、
「隨分お馬鹿さんの若い漁夫なんです。妾を捕まへようとして身體を挺して來ます。だから妾、長く娛しむために、一時の間はあの方の圍で踊り廻つて、魂まで奪つてやるの……だつて、あらッ！　ちやんと正式に演らうと思つたら、胸當のない百姓の長いスカートでなくつては。つまんないわ！　この着物でも恕して下すつてね、特徴も地方色もないのだけど……まア！　それに上草履を穿いてるんだわ。スリッパなんか穿いてたら、妖精なんてほんたうに踊れつこはないわ……おまけに躓つきではね。」

孃は着物を抓み上げた。そして、脚が見えさうになるまで上品に優美に美しい小さな足を振つて、居間の端まで上靴を蹴ね飛ばした。次ぎにまた片方のを蹴ねた。そして絹の靴下のまゝで、寄木細工の床の上に立ち上つた。
「すつかり用意は出來ました。」と、彼女は家庭教師に言つた。
踊が始まつた。
妖精は相手の圍りをぐるぐる廻つた。漁夫は彼女を捕へようとして腕を差し延べる。だが、彼女はその下を辷つて遁れる。それは非常に優美だ。それに音樂には運動と獨創性があつた。この所演は、相手が妖精を捉へたと信じて、接吻を與へんとすると、妖精が一飛びして彼の肩を打ち、彼が足許に倒れ死する時を以つて終る……
だが、伯爵は一つの新案を卽興的に創り出して、この愛くるしい生きものを腕の中に抱き緊めて、彼女に幾度となく接吻した。イウィンスカ孃は小さな叫びを發し、ひどく赤面して、伯爵は正しく熊であるやうに、自分を抱き緊めたと言つて、ぶつぶつ言ひながら、膨れつ面をして、長椅子の中に身を投げた。
私は、孃の比喩が伯爵を喜ばさないことを見た。その理由は、彼の心に家庭的不幸を思ひ出させた

からである。果して彼の眉は暗くなつた。

私はイウィンスカ孃に厚く感謝をして、彼女の踊を賞讃した。

それは、私には懷古的風情を忍ばしめ、また、希臘人の神聖な踊を想ひ出させたからであつた。

私の話は將軍とヴェリテミノフ王女の來訪を告げる、召使のために中絶した。

イウィンスカ孃は靴をはくために安樂椅子に跳び上つて、急いで小さな足を突き込むと、續けざまに低くお辭儀を二つばかりしながら王女を迎へるために走つた。私は、お辭儀をする毎に彼女が巧みに上靴の側へ近づくのに氣がついた。

將軍は二人の副官を連れて來てゐた。一行は吾々同樣、御馳走になるために來たのだつた。私の想像では、どこのよその國だつて、家の女主人が、一度に六人も腹を空かした思ひがけない賓客を悉く接待することは少なからず當惑を感じたことであらう。だが、リシュエニア人の款待は頗る大まかで、御馳走は半時間も經たない間に出來上つたぐらゐだつた。

無暗に多くの肉饅頭があつたのだが、中には熱いのも、冷たいのもあつた。

四

夕飯は非常に活氣を呈した。將軍は高加索で話される方言に就て非常に面白い話をして呉れた。その中にはアルヴン語もあればチュラニアン語もあつた。尤もこの相異なる民族の間にも風俗習慣には

著しき一致があつた。

ツェミオス伯は私を祝して呉れて、今日の吾々の旅行ほど好都合に運んだ旅行をした宣教師や教授に逢つたことがないと言つてくれた。私は自分の旅行談を話さねばならなかつた。私が彼に說明したことは、南米シャルアスの國語で一つの著述をするやうに聖書協會から委托されたので、ウルグッイ共和國で三年半程、殆んどいつも馬に乘つてインディアン人と一緒に彼の地の大草原で生活した時のことであつた。この話をしてゐる間に、私は、食物や水もなく、果しなき大平原の中に三日間も道に迷つたが、私に隨行してゐた土人と同樣、馬の血を取つて、その生血を飲まねばならぬ破目になつた樣子を物語つた。

婦人達は殘らず戰慄の叫びを發した。將軍はカルモウク人も同樣な窮境に陷つた時同樣な處置をとると言つた。伯爵はその時どんな呑み味がしたかと私に訊いた。

「道德上では、最も厭らしいことでしたがね。」と私は答へた。

「だけど、肉體的からは、どつちかと言ふと好かつたですね。つまりあの時のそのお蔭なんですよ、今日此處で光榮ある食事が出來ますのも。歐洲人の中にはね、白人でも、長い間インディアンと生活を一緒にしてる者には、その生血に慣れてゐる人が澤山ゐますね、その味が好きになつてゐる者さへゐます。私お仲好しのフルクトウオソ・リヴェロさんなんか、共和國の大統領をやつてゐますが、殆んど一度だつて、それを滿足る機會を遁したことはありませんよ。或日でした、彼が盛裝して議會へ

臨む時でした、若い馬の仔が血を流してゐた牧畜農場を通り掛つたのです。生血をね、一口お願ひするために馬から降りました。そのあとで、議會で迚も雄辯な演說をやつゝけました。」

「その大統領つて怖い怪物だわ。」とイウィンスカ孃は叫んだ。

「御免下さい、お孃さん。」と私は彼女に言つた。

「非常に有名な人なんですよ、とても進んだ心を持つてゐる人でしてね、幾種類も大層難かしいインディアン人の方言を完全に話せるのですよ。殊にシャルア語ですが、その動詞と來たら無數な形になるのです、動詞の目的が直接か間接かによつてです。それに、それを話す人の社會的地位の關係に依つてさへも變化するのです。」

私はシャルア語の動詞の構成に就いて、何か非常に珍らしい一例を擧げようとした。然し伯爵が口を挿んで、血を飲む時は馬のどの部分の血を流すのかと訊ねた。

「後生だから、ねえ敎授。」と、イウィンスカ孃は、をどけた恐怖の表情をして叫んだ。

「言つてはいけないことよ。あの人つたら厩のお馬をみな殺しにしかねない人だわ、それに馬がなくなつたら私達をも食ひ盡くすわ。」

この洒落で婦人達は、我々が煙草を吸つてる間に、茶と珈琲の用意をするために笑ひながら卓子を去つた。十五分と經たない中に、彼女等は客間から將軍を呼びに來た。我々は皆彼と一緒に行く用意をした。然し婦人達は一時に一人しか欲しないと言ふことを私は聞かされた。直ぐに間もなく、客間

からは高い笑ひ聲と手を拍つ音とが聞えて來た。

「イオウルカ孃がいたづらを爲てゐるんですよ。」と伯爵は言つた。

伯爵は次ぎに呼ばれた。そして再び其處では笑聲と喝采が續いた。彼の後は私の番だつた。部屋に私が着くまでは、どの顏もわざとらしい眞面目さを裝つてゐた。私は何か徒を豫期してゐた。

「敎授。」と將軍は將校らしい態度で私に言つた。

「この御婦人達は、我々がシャムペンを餘り心よくお受けしたと主張なさるんです。それで、試驗をして見るまでは我々を許して下さらないのです。貴方は部屋の眞ん中からあの壁まで目隱しして歩いて、手でそれに觸はらねばならないです。わけはありませんぜ。たゞ眞直ぐに歩いたら好いのです。貴方は直線の通りに歩くことが出來ますか？」

「出來ると思ひます、將軍。」

イウィンスカ孃は、それから、私の眼にハンカチを投げかけて、背でしかと結んだ。

「部屋の眞ん中にいらつしやるのですよ。」と彼女は言つた。

「手を出して頂戴……それで宜いのよ！　妾、貴方が壁に觸らないつて賭けますわ。」

「前へ、進めッ！」と將軍は叫び上げた。

五、六歩進むだけのことであつた。私を轉ばさうとして、途中に惡意に置かれてある、何か綱か足臺のやうな物に出くはすと確信して、非常に注意深く進んだ。そして私の狼狽を增すやうな抑へられ

た笑聲を聞くことが出來た。

遂に私は壁の直ぐ傍へ來たと信じた。その時私の延ばされた指は突然にも何か冷たい粘々する物の中に這入つた。私は顔を顰めて飛び退つた。それは見物人を悉く笑はせた。私は目隱しをもぎ取つた。そして、イウィンスカ孃が蜂蜜の壺を持つて私の側に立つてゐるのを見た。私は壁に觸つたと思つて壺の中へ指を突つ込んでゐたのだつた。私の唯一の慰安は二人の副官が同じ命令でやつて、私にも劣らぬ結果になるのを見守ることであつた。

その晩中、イウィンスカ孃はふざけた。諧謔を續けて決して止めかなつた。彼女は絶えずからかひ、絶えずいたづらをして、最初に一人の人を、それから他の人を自分の冗談の的とした。私は、彼女が伯爵へ一層屢々話しかけるのを見た。そして彼は、實のところ、決して腹を立てず、彼女の魔力を享樂してゐるらしくさへ見えた。だが、その反對に、彼女が副官の一人に攻擊を開始すると、彼は顏を顰めた。そして私は彼の眼が殆んど恐ろしいばかりのあの鋭い焰で燃えてゐるのを見た。

「小猫のやうにふざけたがり、クリームのやうに白い。」あの詩を書いてる中にミイキェウィチは確かにイウィンスカ孃の肖像をを描かうと欲してゐたに違ひないと私は思つた。

五

我々が寢床へ引き退つたのは夜も餘程更けてからであつた。リシュエニアの大きな家には、すばらしい銀の皿や美事な家具や高價な、波斯の絨毯は澤山ある。然し獨逸に於ける如く、疲れた賓客に與へる寢心地のよい羽毛の寢臺はない。

金持も、貧乏人も、貴族も、百姓も、スラヴ人ならば、板の上でまつたくぐつすりと眠ることが出來る。

ドウギェリイ城はこの一般規則に洩れなかつた。伯爵と私が案内された部屋には、新らしく鞣皮で蔽はれた二つの寢臺しかなかつた。私は旅行中は屢々何も敷かないで大地の上で眠つてゐたから、これは大して苦痛にはならなかつた。で、伯爵が同國人の野蠻な風習を嘆息したから、私は少しく笑つた。一人の召使が來て我々の靴を脱がせて寢卷とスリッパとを呉れた。

伯爵は上衣を脱いで了ふと、暫時默つたまゝであちこちと歩いた。それから彼は寢臺の前に立止つた。その上に私は既に體軀を延ばしてゐたのであつた。

「イオウルカ孃のことをどうお考へになりますか?」と彼は言つた。

「愛くるしいと思ひます。」

「さうですとも、だが、あんな浮氣女ぢやあ! ……あの美しい白髪をしてゐた小柄な副官を、彼女が好いてるやうにお思ひですか?」

「副官ですか? ……私には判るものですか。」

「彼奴はしやれ者だな! ……だから女を悦ばす筈だ。」

「私は貴方の結論を否定致しますね、伯爵。眞實の話をするやうに望んでいらつしやるのですか？イウィンスカ嬢はツェミオス伯をどうして悦ばせようかと多量に考へていらつしやるのですよ。軍隊の副官どもを皆悦ばすよりは。」

彼は返事もしないで、顏を赧くした。だが私の詞が彼に大きな歡びを與へたことが判つた。彼は再び物を言はうとしないで暫時の間歩き廻つた。それから自分の時計を見てから言つた。

「これは〳〵！　本當に寢なくつちやなりませんよ。隨分遲いのですよ。」

彼は吾々の部屋に置いてあつた旋條銃と獵刀とを取り、それを戸棚に入れて、そして鍵を下ろして、その鍵を取り出して、

「預つてゐて下さいませんか？」と言つて、驚いたことには、それを私に渡した。

「私は忘れるかも知れません。貴方は確かに私よりは記憶が宜いのです。」

「貴方の武器をお忘れにならない一等宜い方法は、寢臺の椅子の近くのあの卓子の上に置くことでせう。」と私は言つた。

「いゝえ駄目です……いゝですか、本當のことを申上げると、眠つてる時、傍らに武器を置くのは厭なんですよ……かう言ふわけですから。グロドノの輕騎兵隊に居た時分でしたよ、或る晩同僚と一室で寢ましたが、ピストルを近くの椅子の上に置いたのでした。夜になつて私は銃聲を聞いて目を醒したのでした。私は手にピストルを持つてゐましたね。それを打つたのでした。彈丸は戰友の頭を去る

二寸の處を通りました。……私はその時の夢をどうしても想ひ出せませんのですが。」

私は彼の逸話で幾らか心が騒いだ。私は彈丸で頭を打ち通されないやうに保護しなければならない。しかし、筋骨逞ましい肩を持ち、黑毛で蔽れたる筋ばつた腕をした、私の件の高い姿を見たとき、若し彼の夢見でも惡かつたら、彼の手で完全に私の喉を締め殺すことが能きると認めないでは居られなかつた。然し私は、少しでも不安を感じた樣子を、彼に見せないやうに注意した。私は寢臺の近くの椅子の上に燈光を置いたに過ぎなかつた。そして持つて來たロウウッツキの教義問答を讀み始めた。伯爵は私にお休みと言つて、横になつた。その上で彼は五、六度も寢返りを打つた。遂に彼は眠つたらしかつた。尤も彼は身を縮めてゐた。それは、箱の中に閉ぢ込められてゐたので、曲んだ膝頭に頭が觸はつた、ホレースの愛人のやうであつた。

折々、彼は重たく溜息を吐いたり、神經的なガタ〳〵と言ふ音を立てたりした。それは、彼が寢入らうとして選んだ特殊な寢姿故だと私は思つた。一時間は恐らく斯うして過ぎた。そして私自身も眠むたくなつた。私は本を閉ぢて、出來るだけ具合好く寢臺に體軀を落ち着けた。

妙にげら〳〵と笑ふ聲が、ふと隣りから起つたから、私はぶるぶると身慄ひした。私は伯爵を見詰めた。彼の眼は閉ぢてゐた。彼の全身は身震ひしてゐた、半ば開いた彼の脣からは、何か殆んど聽きとれぬことばが發せられた。

「あんなに新鮮だ！　……あんなに色が白い！　……教授は自分で言つたことを知つてゐなかつたのだ……馬は藁にも値打ちしない……何とうまい一口だ！」

それから彼は、頭を休めてゐた蒲團を、精一杯の力で嚙り始めて、同時に自分で目が醒めた位に高い聲で唸り始めた。

私は寢臺の上で全くぐつとしてゐて、眠つてゐる風を裝つた。そして彼を見守つてゐた。

彼は起上つて眼をこすり、悲しげに溜息を吐き、そして明らかに思案に暮れて殆んど一時間は位置も代へないでゐた。私は、非常に氣持が惡かつた。で、伯爵の側では二度とは寢まいと心の内で誓つた。だが結局は疲勞がこの不安に打ち勝つた。朝になつて召使が部屋へ來た時は、我々二人はどちらも深い眠の中にあつた。

六

朝飯を濟ませて吾々はメディンティルタスに歸つた。フレーベル博士が一人でゐたので、私は、伯爵の加減が良くないやうに思はれることと、彼が怖い夢を見たことゝ、恐らく夢遊病者らしいが、この狀態では危險だらうと言ふことゝを博士に話した。

「私はそのことはみな知つてゐます。」とドクトルは言つた。

「强健な體格を持つてるんだが、同時に、ひどく縛られた女のやうに神經質なんですよ。多分母親譲

りですね……彼女と來たら、今日は頗る惡るかつたのですよ。……私は、お腹の大きい女がびつくりするとか、烈しい願望を持つとか言ふ話は大して信じません。だが、一つだけは確かです。それは伯爵夫人が狂人で、狂氣は遺傳すると言ふことだけは……」

「だが伯爵は、」と私は答へた。

「全く正氣ですよ。心は健全だし、私が考へてゐたよりは、ずつと餘計に知識があることを認めますよ。讀書も好きです……」

「勿論ですとも、貴方、無論ですよ。だが、時には屢々數日の間も常規を逸してゐます。部屋に閉ぢこもつてゐたりします。それで夜中にうろ〳〵と歩きます。彼は人に知られてゐないやうな本も讀んでゐますね……獨逸の哲學とか……生理學とか、何とかかとか！　昨日でしたかね、本の小包みがライピチッピから來ました。明らさまにお話しますと鬼の女房に鬼神がなると言ふ式で、相當な女性が必要なんです。此處には大層美しい百姓の娘が何人かゐますぜ……土曜の晩にね、身體でも洗つた時は、王女と間違へるかも知れません……それがこゝの主君の心を奪ふのを誇りとしないやうなものは一人だつてゐません。私が、彼の年だつたら、えい、ぢれつたい！　……いや、情婦がないんです。結婚を欲してゐないのですね。そいつが惡いのです。彼は何か心を充たすやうな物を、是非とも持つてゐないといけないのです。」

ドクトルの亂暴な唯物論は少からず私の膽を潰した。で、私はツェミオス伯が適はしい妻君を見出

してくれることを心から望むと言つて、この會話を直ちに止めた。哲學的研究に對する伯爵の趣味を、ドクトルから教へられた時私は非常に驚いたことを認めねばならない。

輕騎兵の士官たりしこの熱心なる運動家が、獨逸の形而上學を讀み生理學研究に從事してゐるとは私の凡ゆる先入思想に反してゐた。けれど、私は實にその日、その證據を得たので、ドクトルの言葉は眞實だつたと知つた。

「どう說明なさいますか、教授。」と伯爵は夕飯も濟む頃になつて突然私に言つた——

「二元論ですね、卽はち我々人間の二重の性質ですが、どう御說明なさいます？」

そして私が、質問の意味が分らないと述べると、彼は續けた。

「塔の頂上か絕壁の端にでも立つたことはありませんですか、空間の中に體軀を投げ出さうと言ふ願望と同時にそれと絕對的反對の恐怖の感情をお持ちになつたことはないですか？ ……」

「そりや純粹に肉體的の立場から說明できますね。」とドクトルは言つた。

「先づ、丘へ登つた疲勞のため頭腦に血液が逆上しますね、そいつが——」

「血液の問題は暫らく除けときませう、ドクトルさん。」と伯爵は我慢が出來なくなつて口を挿んだ。

「では他の例を取つて見ませう。貴方は彈丸をこめた銃砲を持つてゐるんですよ。親友が側に立つてゐるとします。彈丸で友達の頭を打ち通さうと言ふ考へがふと浮んで來ます。貴方は暗殺に對しては最大の恐怖を抱いてゐながら、でも矢張り、打つてみよう、打つてみようと考へてゐます。私はね、

皆さん、我々の頭に一時間の間に浮んだ考へが全部……若し貴方の考へが全部ですね、教授、それは賢明なお考へだとは思ひますがね……書き竝べられたものとして御覽なさい。恐らくフォリオ版が一册は出來ますぜ。それを讀んだ上で、首尾よく貴方を辯護するやうな辯護士つたら、たゞの一人だつてありますまい。牢屋へ入れるか、瘋癲病院に打ち込むかしないやうな裁判官も一人だつてありますまいね。」

「その裁判官は、ねえ、伯爵、どのスラヴ語の動詞が前置詞と結び付く時は未來の時を取るかと言ふやうなことを決定するあの不思議な法則を、今朝一時間以上も私が探したつて、確に私をとがめはしないでせう。だが、若し何かの拍子で、私が何か他のことを考へてゐたとしても、何の證據を私に對して貴方は擧げることが能きるでせう？ 私に暗示を與へるやうな外的事件と同樣、私は自分の考へ通り自由に實行することは態きません。何故と言ふに、一つの考へが心に起つたとしても、私がそれを實行するとか、さうしようと決心するとか言ふ意味にはなり得ませんから。私は何人をだつて、嘗て人を殺さうと思つたことなんかありませんでした。だが、若し殺人の考へが心に浮んだとしてもそれを追つ拂ふやうな理性と言ふものがないでせうかしら？」

「貴方は貴方の理性に確定性を置いてお話しになつてゐるのです。だが、貴方のおつしやるやうに理性はいつも、吾々と一緒に居てくれて、導いて呉れますかしら？ 反省ですね、つまり、時間と冷靜とが、理性に物を言はせたり、服從させたりするのに必要なんですよ。ところが、人はいつでもこの

二つを持つてゐられるでせうか？　戰爭中私の方へ銃彈がやつて來るとする、そいつが跳ね反へると
する、私は遁げ出す、逃げたがために私は友達を矢面に立たせることになつた。その時に、反省の餘
裕でもあれば、私は友人の身代りに生命を與つたことになる……」
　私は人間として、また、クリスト教徒としての吾々の義務、卽ち、いつも戰はんとしてゐる、聖書
の戰士を眞似ねばならぬ義務を彼に指摘しようと試みた。遂に私は、我々の情慾と不斷に鬪ひもがく
間に、我々はその情慾を弱らせて、それに打ち勝つべき新鮮な力が得られるものだと言ふことを彼に
悟らせた。だが、彼を沈默に陷しいれることに成功したに過ぎないと思ふ。彼は私の言ふことに共鳴
したらしくもなかつた。
　私はそれから城中に十日ばかし滯在したに過ぎなかつた。私はドウギェリイへは、もう一度訪問し
ただけだつた。その時我々は其處では眠らなかつた。最初の時と同じやうに、イウィンスカ孃はふざ
けたがる甘つたれた子供のやうな行動をした。彼女は一種の魅惑を伯爵に與へてゐた。で、彼も彼女
にひどく惚れ込んでゐることを、私は疑はなかつた。同時に彼は彼女の缺點を充分に知つてゐて、決
して錯覺狀態には陷入つてゐなかつた。彼女がたわいなきあだもので、自分に慰みを與へてくれない
物には盡く無頓着だと言ふことを彼は知つてゐた。彼女があんなに聞き分けの無いのを見せられる
と、彼は心の中では始終苦しんでゐることが、私には分つた。
　だが、彼女が何か一寸した注意でも彼に拂ふと、彼の顏は晴れ〳〵と輝き、他のことの一切を悉

く忘れて、歡びの餘り微笑んだ。
　私が出發する前日、彼はドウギェリイへ私を連れて行かうとした。その理由は多分、私が伯母と一
緒に話してる間に、彼は姪なる孃と庭を歩くことが能きたからであつた。だが、その日は私は行る仕
事が手に餘る程あつたので、どんなに彼が勸めて呉れてもお斷りしなければならなかつた。
　待つてゐなくても宜いと言つてゐたのだけれど、彼は夕飯までには歸つて來た。彼は卓子へやつて
來た、食ふことは能きなかつた。彼は食事中ふさぎ込んで氣分が惡いらしかつた。時々、彼の肩は縮
み、彼の眼は不吉な表情をとつた。ドクトルが伯爵夫人の處へ歸つて行つた時、彼は私の部屋へ隨い
て來て、心の中にあることを一切私に告げた。
「心から後悔しますよ。」と彼は叫んだ。
「貴方を置きつぱなしにして惡いことをしましたよ。彼女は私をからかひます。彼女は新しい顏以外
には好きになれないのです。あゝ！　あの小さな愚か者に會ひに行つたなんて！　でも幸ひなことに
は、二人のことは何もかも終焉となりましたよ。私は心底愛想をつかされました。それで二度と彼女
に會はうとは思はなくなりました……」
　暫の間、彼はいつもの習慣通りに歩いて行つたり來たりした。
「貴方は、恐らくは私が彼女と戀をしてゐたとお考へなさつたでせう？」と彼は續けた。
「それは、あの莫迦なドクトルが考へてゐることですよ。決して、決して、私は彼女を愛してなんか

ゐませんでした。彼女の陽氣な顏付きを見ると私は嬉しいのでした。彼女の白い皮膚なんか見てゐると愉快になれました……それだけですよ。彼女が私の氣に入つたのは。……特に彼女の顏の表情と來たら……だが頭腦なんてありませんね。彼女の中から私は只ほんとに綺麗な人形より他は、何も見出してはゐませんでした。人が退屈して新しい本もない時なんかなら見てゐても氣持がいゝですね……彼女が美しいには異存はありません……あの皮膚と來たら素的ですからね！　……あの皮膚の下の血液と言つたら、馬のより好いに相違ありませんよ。……さうお思ひになりませんですか、教授？」

そして彼は高らかに笑つた。だが、その笑聲を聞く者には、それは氣持のいゝものではなかつた。

私はその翌日彼に暇を告げてパラティネートの北部へと私の探險を續けた。

七

探險は殆ど二ヶ月續いた。

私が足を止めなかつたり、何か書類を蒐集しなかつたやうな村はサモジティアには殆んど一つもなかつたと言ふことが能きる。私の研究に承諾して呉れた眞に溫情ある協力に對し、また私の辭書の語彙を豐かにして呉れた秀れた寄書に對して、その國の住民達、殊に教會の高僧諸賢に、私は感謝するこの機會を、此處で取らせてもらひます。

ツァウレで一週間滯在した後、私はクライペダ、俗にメメルと言ふ港で船に乘つて家に歸るつもり

であつた。その時、私は次のやうな手紙をツェミオス伯から受け取つた。それは彼の狩獵家の一人によつてもたらされたところであつた。

教授よ、――獨逸語で書くのをお許し下さい。ジュモウデ語で書きますと、文法上の誤謬を餘り澤山やるので、私への尊敬を失なひさうです。貴方だつて間違はないとは信じられまんけれど。且つまた私が貴方に御通知いたさんとしてゐます便りを恐らく增してくれるとは思はれません。仰々しく申上げないで、私は結婚しようとしてゐます。それで貴方は誰とだと御推量なさいますか。「神は愛人の誓を笑ふ」そのやうにこの土地の神は言つてゐます。で、來月の八日に私が結婚する筈の人はジュリアンヌ・イウィンスカ孃なのです。若し結婚式においで下すつて御援助を賜はれば貴方は一等親切なお方です。メディンティルタスや界隈の農夫は悉く、數頭の牛と無限の豚を貪り食ふためにこゝへ來るでせう。そして彼等が醉つぱらつたら、多分御記憶のあの並樹の右側にある牧場で踊るでせう。すると、貴方のお考へに適さはしい風俗習慣が見られるでせう。若しおいで下されば私にもジェリアンヌにも最大の歡びを與へて下さるのです。そして貴方から拒絕を頂戴すると、我々は非常に拙い狀態に陷入ることを附加へねばならないのです。私の許婚同樣、私がカトリックの傳道組合に屬してることは御存じでせう。ところで、我々の宣教師は、

約三十里も離れた處に住んでゐて、痛風病みの癈疾者です。で、貴方がその代りをお勤め下さることを私は切望いたします。頓首再拜

ミケル・ツェミオスより

手紙の終りに、追白となつて、美しい女文字で、ジュモウデ語で附加へられてあつた。

リシュエニアの女神たる私はジュモウデ語で書くの。ミケルは貴方の御承諾をお願ひするにも隨分とぶしつけだわ。本當に、彼のやうな人と結婚するなんてお莫迦さんは妾位のものです。教授、來月の八日には、素的だなんて言はれる花嫁を御覽になることよ。この素的と言ふ語、これはジュモウデ語ぢやなくつて佛蘭西語なの。どうぞ儀式中に精神錯亂をなさらないやうにね。

手紙も追白も私の氣に入らなかつた。結婚と言ふ嚴肅な場合に對して、許す可からざる輕率を、婚約した二人が示してゐるものと私は考へた。然し、私はどうして拒絶することが出來やう？　その豫定のお祭り騒ぎは私に對して魅力を持つことを認めねばならない。どう考へてもメディンティルタス城に集合する多數の紳士達の中から、有益な知識を私に供給するに足る教養ある人の幾人かは見出さ

ないやうなことはないだらう。私のジュモウデ辭書は非常に上等だつた。だが、最下層の百姓達の脣から習つた、詞の中には、今尙ほ意味の曖昧なのもあつた。これ等の考へが悉く結びついて來て、私は伯爵の要求を承諾するに充分なる力を得た。で、私は八日の朝までにメディンティルタスに着くだらうと答へた。

この私の決心は、どんなに大きな後悔の機會を作つてくれたことか！

八

城へ通ずる並樹に這入ると、モウニング姿の多數の紳士または淑女が、入口の階段の上に群をなして立つてゐるのや、公園の路を歩き廻つてゐるのが見えた。中庭は日曜着を着た百姓で一杯だつた。城にはお祭り氣分が漂よつてゐた。各所に花や花輪、旗や花絲があつた。召使頭が、私に割りあてられた地階の部屋へ私を案内して、もつと好い部屋を差上げることの出來ないことを辯解した。

城中にはそれは多くの訪問者があつたので、私が最初の訪問中に占領してゐた部屋を、私のために除つて置くことは不可能だつた。その部屋は宰相の元帥の夫人に配てられてゐた。然し、私の新しい部屋は、非常に居心地がよかつた。公園が見渡され、伯爵の居間の下になつてゐた。私は急いで儀式のために身支度して白布の法衣に着換へた。

伯爵も許婚も姿を現さなかつた。伯爵はドロギェリイへ彼女を迎へに行つてゐたのだつた。彼等は

この時刻よりずつと前に歸つて居るべきだつた。だが、花嫁の化粧は容易な業ではなかつた。で、ドクトルは宗教の儀式がすむまでは朝餐が始まらないから食慾の我慢の出來ない人は、凡ゆる種類の菓子と飲物とを竝べられてゐる食器棚から適宜に取つて力を附けるが宜いと言ふ旨を賓客に言つた。

私はその時、こんなに式が遲れては、人々は意地の惡い詞を言ふやうになる刺戟となると知つた。果して、お祭に招かれた美しい少女の母、の二人が、花嫁のことに就いて諷刺を言はないではゐられないでゐるのを聞いた。

大砲と銃との祝砲祭が彼女の到着の先觸れをしたのは晝過ぎであつた。そして間もなく立派な馬車が、四頭の盛裝を凝らした馬に曳かれて竝樹へ這入つて來た。一行の遲延が馬の咎でなかつたことは、馬の胸を蔽つてゐる泡によつても容易に判つた。

車の中には花嫁とドウギェリイ夫人と伯爵とを除いては誰一人としてゐなかつた。伯爵は出て彼の手をドウギェリイ夫人に與へた。イウィンスカ孃は、あでやかになまめかしいみなりをして、四方から自分を取り卷いて好奇心に輝く人々の顏を避けるために、肩掛で顏を蔽つてゐる風を裝つた。だが彼女は馬車の中で立ち上つて將に伯爵の手を取らんとした。その時、百姓が花嫁に投げつけた夕立の如き花に恐れを抱いたものか、または、動物がッェミオス伯の姿を見ると、經驗すると思はれる、あの妙な恐怖に捉はれたものか、一頭の後馬は跳ね躍つて、ヒヒンと鼻嵐を吹いた。一頭の後馬は踏段の下で柱を蹴つた。で、一時はその成り行きがきづかはれた。イウィンスカ孃は小さな叫びを發した

……だが皆の心は直ぐに救はれた。

伯爵は彼女を腕の中に抱きかゝへて、階段の頂上まで、恰も彼女が鳩か何かのやうにやすやすと搬んだからだ。我々は悉く、伯爵の沈着と武俠的に勇ましい處置を拍手喝采した。百姓達は大騒ぎをして萬歳を叫んだ。で、顏を赧くした花嫁は笑ひ出すと同時に慄へた。伯爵は彼の魅するが如き荷物を急いで除けようとはちつともしないで、あたりの群集に彼女と言ふ繪を見せることに於て、明かに欣喜雀躍してゐた。

突然にも、脊の高い、青ざめた、痩せた女が、着物は取り亂し、髪は亂し、顏の道具にはどれもこれも恐怖を現して、何處から飛び出して來たのか、誰にも判らない間に、階段の頂上へ現れた。

「あの熊を御覽！」と、彼女は金切り聲で悲鳴を擧げた。

「あの熊をごらん！　……鐵砲を持つておいで！　……女を連れて遁げ出した！　熊を殺せ！　射てッ！　射てッ！」

それは老伯爵夫人だつた。

そら花嫁の御來着だと言ふので、城内一切の人々を中庭や窓へ惹きつけてゐたのであつた。この憐れな狂人の番をしてゐた女達すら、自分の預かり物を忘れてゐたのであつた。老夫人は遁げ出して、誰にも悟られないやうに、吾々一同の居る處へ來てゐたのであつた。

それは非常に痛ましい光景であつた。

彼女は泣き叫び、反抗するにも拘らず連れ去られねばならなかつた。賓客の多くは、彼女の病氣の性質を知らなかつた。で、一部始終のことが彼等に説明せられねばならなかつた。人々は後で長い間低い調子で囁いた。總ゆる顔がどきんとしてゐるやうに見えた。

「それは凶兆です。」と迷信家は言つた。

リシュエニア人には迷信家の數が非常に多かつた。

然しながら、イウィンスカ嬢は、五分間と言ひながら、まる一時間はかゝる化粧直しをしたり、花嫁の被衣を着けたりしなければならなかつた。それは老伯爵夫人の病氣の原因と、そのこまかな話を知らない人々に説明をするために要される時間よりも、多くの時間がかゝつた。

つひに花嫁は、素晴らしい着物を纏ひ、ダイアモンドで蔽はれて再び現れた。彼女の伯母は、彼女を全賓客に紹介した。そして禮拜堂へ這入つてゆく時が來た時、ドウギェロ夫人は、ひどく私の驚いたことには、一同の前で、姪の頰を平手で打つた。然うでもしないと、注意を集められないために、人々の心をそれに轉ぜしめようとしたのでは隨分苛酷な仕方であつた。ところが、その打擊は全く平氣で受け取られた。何人も驚いたやうには見えなかつた。

黑衣を着けた一人の男が、持つてゐる紙へ何事か書いた。そして居合はせた幾人かの人々が最も無頓着な態度で彼等の名前に署名した。儀式の終るまでは、私はその謎を解く手掛りを見付け得なかつた。若し私がそれを知つてゐたら、私は宣教師たる私の神聖な役目の全體の威嚴を以つてしても、こ

の忌み嫌ふべき風習に立派に反對してみせたであらう。それはこの結婚は、契約した一方に對して、體力にのみ重きを置いて擧行せられるに過ぎないと主張することに依り、離婚訴訟を起すにあることであつた。

宗教的儀式のあとで、私は彼等がたつた今お互を結びつけた結合の眞面目さと神聖さとを、この若い二人に重んじて貰ひたいと思つて、一言の希望を述べることが、私の義務だと感じた。で、私は尙ほもイウィンスカ嬢の追白を心に留めてゐたので、もはや彼女は子供らしい愉快や娯しみを考ふることなく、眞面目な義務と重大な試練とを前にしてゐる新生涯に入つたのだと自覺してもらはねばならないと言ふ意味を述べた。私の説教のこの部分が、獨逸語の判る並み居る凡ての人と同樣、花嫁の考への上に大きな效果を起したものと私は思つた。

銃火の一齊射擊と、歡喜の叫びとが、禮拜堂から出て來て食堂へ行く途中の行列を迎へた。

御馳走は素晴らしく、食慾は非常に鋭かつた。最初はナイフとフォークがカチヤ〳〵と言ふ音以外には如何なる音も聽くことが能きなかつた。然しながら、やがてシャムペンと匈牙利の葡萄酒で暖まつて來ると、人々は話をしたり、笑つたり、叫んだりし始めた。

花嫁の健康を祝して、熱烈なる喝采と共に乾盃された。白い髭を生やした一人の老人が立ち上つた時、一同は殆んど坐つてゐなかつた。

「わしは殘念でございます。」と彼は高い聲で言つた。